
バカとデバイスと魔導師 ~ バカが奏でる絆の曲 ~

銀臥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとデバイスと魔導師 ～バカが奏でる絆の曲～

【Nコード】

N6553X

【作者名】

銀臥

【あらすじ】

八年前…僕が九歳の頃から、全てが変わった。

僕は八年前、偶然『あるロストログア』を体内に取り込んでしまった。その時からだった。僕が、魔導師になるきっかけになったのは……そして、金色の長い髪に綺麗な紅い瞳の彼女と出会ったのきっかけになったのも……

『P・T事件』、『闇の書事件』を解決し、月日は流れ、とある理由で文月学園に入学した僕。任務をこなしつつ、入学してから一年と少し経った頃だった……僕は、新たな事件に巻き込まれる。そ

して同時に、彼女達と再会を果たす。

バカとテストと召喚獣とリリカルなのはのクロスオーバー！！

魔導師となつた明久が！雄二が！シリアス&ハードボイルドに事件を捜査！なんてできるわけが無い（笑）！！バカな明久が捜査面では意外な活躍を！？そしてドキドキな彼女との同棲生活……巻き起こる、死亡フラグ……果たして、彼らは無事に青春を謳歌しつつ、事件を解決できるのか！？…バカとデバイスと魔導師……ここに開幕！！

P r e l u d e (前書き)

前に掲載していた小説を知り合いに消され、ブルーになってました
が再び立ち上がりました！！

！
バカとりりなののクロスオーバー作品、どうか楽しんでください！

Prelude

深い、深い…闇。

その中心、一つのぼんやりとした光が見えた。

『…！…！…！…！…！』

『…！…！…！…！…！』

光の中で、誰かが話している。

そこに意識を集中させると、突然光が拡がって闇を消した。

「ここは……」

いつの間にか、僕は海岸にいた。懐かしいなあ……ここは……

『フェイトちゃん！アキくん！』

あ、この声って……

茶色の髪を二つに結った少女が、金色の髪の女の子と一緒にいた僕に…八年前の僕に向かって近づいてくる。

そっだ、これは…あの時、フェイトと僕の処遇が決まって、本局の方に身柄が引き取られることになった時だ……

『あんまり時間はないんだが、しばらく話しているといい。僕達は向こうにいるから』

『ありがとう……』

『ありがとう……』

『……ありがとう』

僕ら三人は…クロノさんにお礼を言つと、僕たちはしばらく見詰めあつた。

たくさん、しゃべりたいことはあつただけど、それでも、話せなかつた。何故か、話せないような気がしたから……

『話したいこと、いっぱいあつたはずなのに……変だね、フェイトちゃんとアキ君の顔を見たら、忘れちゃつた』

『私は……』

フェイトは何かを言いたそうにする。けれど、今まで人とあまり関わってこれなかつたフェイトには、上手くそれが表現できなかつた。そんなフェイトの手を、小さい僕は優しく握り締めた。

『大丈夫、フェイトが嬉しかつた事を言えばいいんだよ』

『私は……』

一拍置き、フェイトは告げた。

『そうだね、私も、上手く言葉に表現できない……だけど、嬉しかつた』

『ふえ？』

『まっすぐ向き合ってくれて』

素直な気持ちで、彼女はなのはに伝える。

フェイト、僕が『アレ』を身体の中に取り込んで、管理局から逃げた時に匿ってくれた女の子……ジュエルシードを集めるのを一緒に手伝い、『アレ』と一緒に手に入れたデバイスの使い方を教えてもらった日々は本当に楽しかった。そして、なのは。

最初は敵同士だったけど、そのまっすぐな気持ちに救われ、僕らは彼女と友達になることが出来た。

『うん！フェイトちゃんとアキ君と友達になれたらいいな、って思ったの。でも、今日はもう、これから出かけちゃうんだよね？』

『そうだね……少し、長い旅になる』

『僕も……だから、しばらく会えないね……』

『……また、会えるんだよね？』

『……うん』

『もちろん』

フェイトの母親、プレシアは彼女の目の前で虚数空間に落ちた。

とても悲しい事だけど、それは変えることも出来ない事実。だけれど、フェイトは最後の瞬間には母親と真正面からぶつかる事が出来た。

それは、彼女にとって一番の成長だったから……

「フェイ……っ！！」

彼女の名前を呟いた瞬間、辺りの景色が変わる。

「これって……」

その中では、白を基調としたバリアジャケットを身に付けている女の子と、赤いゴシッククロリータ調のバリアジャケットを身にまとった女の子が協力して襲い掛かってくる触手と対峙していた。

『ちゃんと合わせるよ、高町なのは！』

『ヴィータちゃんもね！』

「なのは……ヴィータ」

そう、この二人は…なのはとヴィータだ………ということは、これって八年前の『闇の書事件』………？という事は………きっと他のみんなも。

『盾の守護獣ザフィーラ！砲撃なんぞ、撃たせん！！』

彼、ザフィーラが前に出て魔法陣を展開させる。

その魔法陣から無数の棘が現れて、襲い掛かってくる触手を切り裂いていった。

『彼方より来たれ、宿木の枝……』

「この詠唱……もしかして！？」

茶色のショートカットの女の子が詠唱を終えた刹那、杖の先から魔法陣が展開され、その前に七つの銀色の魔力の塊が出現する。

『石化の槍、ミストルティン！』

魔法の名を叫び、杖を振り下ろす。

それが合図のように一気に七本の槍が化け物に向かって飛んでいく。

化け物の身体に刺さった槍は、刺さった場所から次々に化け物の身体を意思に変えていく。

「…はやて……」

僕は石化の槍を放った少女を見下ろしながら、呟く。

この後の展開は…解ってる。そして、その後起こる…僕の罪も。

『行くぞ、デユランダル！』

「クロノ…さん」

『今ならいけるはずだよ。三人とも！頑張れ！！』

「この声って……」

僕は辺りを見渡す。そして、なのはとはやてと……

「フエイト……」

金色の長い髪に黒いバリアジャケットを身にまとった女の子、フエイトがそこにいた。

「……………」

しばらくその姿を見た後、僕は見た。

「……………僕だ」

八年前の僕の姿。

さっきと比べると、多少は成長してるかな？でも僕って童顔だから割と変わってないかも……………うっ、自分で言っていてちょっと自己嫌悪。

『全力全開！スターライト……………』

なのはが、

『雷光一閃！プラズマザンパー……………』

フェイトが、

『ごめんな……………おやすみな』

はやてが、そして……………

『今、助けてあげるね』

僕が、魔法を放つ準備をする。

『響け、終焉の笛ラグナロク……………！』

はやてが叫んだ瞬間、彼女の前に巨大な魔法陣が展開される。三角形型の魔法陣は頂点となる三つの部分に魔力が集まっていった、そして……

『ブレイカアアアアアアア』

『！！！！！！』

声を合わせて、三人一緒に魔法を放つ。

凄まじい轟音と共に放たれた三つの光は、化け物に衝突する。その威力はきつと僕なんかの間に入って行っても一瞬で消される程の力を持っていたに違いない。

三つの光が炸裂し、大きな爆発音と一緒に天に伸びていく巨大な炎。化け物の身体がなくなった瞬間を……

『本体コア、露出……捕まえ、た！』

「シャマル……」

金色の髪の女性、シャマルがクラーウルヴィントを使って、コアを捕獲する。

さあ、ここからが僕の出番だ……悲しい闇の書が、眠る時……

『行け、吉井！！』

『うん！！！！』

「シグナム……」

ピンク色のポニーテールの女性、シグナムの言葉と同時に空を滑空する九歳の僕。

コアに向かって、空を一直線に飛びながら軽く足を開き、腰を落とし、右手で握る刀は左の腰へ、左手はその鯉口に添える。僕の刀型のデバイス、フォルトの…『鎮魂一閃』の構えだ。途中で僕に向かってくる攻撃を全てなのは達が空中で迎撃していた。

『今まで辛かった闇を…悲しみを、僕が…ううん、僕達が』

剣が、閃く。

『終わらせる!!!!!!!!!!』

そして、僕は、化け物のコアを切り裂いた。

周りが一気に静まり返る。

誰もが自分の時間が止まったような感覚になる。当然、今までの流れを見ていた僕も同じような感覚に陥っていた。

パキン！

やがて時は動き出す。

先ほど立てた音と共に化け物が巨大な爆発を起こし、その姿を消していった。

「あの時は死ぬかと思ったなあ……」

苦笑を浮かべる僕。

あの爆発の中、僕は思いっきり吹っ飛ばされ、そのまま……

ガッン！！

『んじっ！』

『ぶげっ！』

爆発の余波を受けた僕は、そのままヴィータに向かって飛んでいって、ヴィータに激突するって言うクライマックスには似合わないオチを作ってしまったんだっけ。

あつ、ヴィータがアイゼンを振り回しながら僕を追いかけてる……ははっ、懐かしいなあ……いや、あの時は本当に死ぬかと思ったんだけどね。

周りのみんながそれを見て笑っている。

うん、とても幸せそうな笑顔だ……これが本当のハッピーエンドだよな。

でも

『夜天の魔導書本体の……破壊？』

幸せな時は終わる。

『吉井明久…君の魔法なら、完全に消す事が出来る』

『彼女、リインフォースの介錯を…してくれ……』

悲しい離別によって……

雪が降る中、一人たたずむ銀髪の少女…

『ねえ、本当にこれしかなかったの？』

涙が流れそうなのを必死にこらえている…デバイスを握り締める僕。

『ああ』

『なんで、なんで僕なの……？』

辛そうに顔を歪めながらリインフォースに尋ねる僕。周りでは涙を流しそうになっているのは達がいた。多分、これから僕がやるうとしていいる事が、解っているからだ。

『お前だから頼みたいのだ。お前達のおかげで、私は主はやての言葉を聞くことができた。主はやてを喰い殺さずに済み、騎士達を生かす事が出来た。それに…主はやてが信頼を置いていたお前だ。私は、お前の手で最後の幕を降ろしたい』

『……………っ！！』

「……………っ！！」

僕は、うつん。僕らは悔しくて歯を強く食いしばった。

悔しくて、悲しくて、寂しくて、色々な感情が交じり合って目の前がグルグルとうねるように回り続けるような、そんな苦しい感覚が僕を襲った。

『はやてちゃんとお別れしなくて、いいんですか？』

『……主はやてを悲しませたくないのだ』

『リインフォース……』

フェイトが悲しそうに呟いた。

彼女は母親を、愛した人を目の前で亡くしている。その辛さがどれだけのものか知っているからこそ、目の前でリインフォースが言った『悲しませたくない』っていう言葉が、どれだけ悲しくて、酷くて……そして……どれだけ優しいものなのか、解るから。

終わりの時は近づいてくる。

『そろそろ始めようか？夜天の魔導書の終焉だ』

『ごめんなさい、リインフォース……』

『それはこちらの台詞だ……まだ主と同じ年の者に、辛いものを背負わせてすまない……』

シヤマルがデバイスを使って、リインフォースのリンカーコアを抽出させる。

優しく、労わるように、安らかに彼女が逝くために……

でも僕にとって、うつん。その時間はきつと誰もが辛くて悲しい

時間だったと思う。その中で、僕は必死に両目に涙を蓄えながらも体を震わせながら必死に待っていた。

そして、リインフォースの胸に一点の光が灯された時だった……

『リインフォース！みんなあー！！』

リインフォースの、彼女の名前を叫びながら車椅子を漕ぎながら必死に僕らの元へとやって来る優しい女の子、はやて……リインフォースの、マスター……

『あかん、やめて！リインフォース、やめて！！破壊なんかせんでええー！！私がちやんと抑えるー！！こんなんでええー！！アキ君も、こんなんでええからー！！』

『はやて……』

『ごめん、はやて……』

あの時、はやてにはその言葉が言えなかった。幼いながらも……バカな僕でも、これだけはどうしようもないんだ、ってちゃんと解ってたから……。

僕がやるうとしてしていることは、はやてから大切な家族を奪う事……絶対にはやてから恨まれる事だ。それが怖くて……とつても怖くて、悲痛な叫びを上げ続けるはやての顔を見ることが出来なかった。

『主はやて、良いのですよ』

『良い事ない、良いことなんかなんもあらへんー！！』

『随分と永い時を生きてきましたが…最後の最後で、私は貴女に綺麗な名前と心を頂きました。騎士達もあなたの傍に居ます。何も心配は要りません』

『心配なんて、そんなん…！！！！』

「はやて…」

悲痛な叫びを上げ続けるはやてに、僕は両目から涙が溢れるのを抑える事は出来なかった。でも九歳だった頃の僕はそれを必死に堪えていた。皮肉だなあ…全部終わった後に、涙を流せるなんて…

『ですから…私は笑って逝けます』

『話し聞かん子は嫌いや！！マスターは私や！！話聞いて！！私がかきつとなんとかする！！暴走なんてさせへんって、約束したやんか！！！！』

『その約束は、もう立派に守って頂きました…』

『リインフォース！！』

『主の危険を払い、主を守るのが魔導の器の務め。あなたを守る為の…最も優れたやり方を私に選ばせてください』

『せやけど…ずっと悲しい想いをしてきて……』

『やっと……やっと……救われたんやないか！！』

『私の意志は…貴女の魔導と騎士達の魂に残ります…私はいつも貴

女の傍に居ます』

『そんなんちゃうやる！そんなんちゃうやる！リインフォース！！』

そくだよ…はやては、ううん。誰だつてこんな悲しい結末なんて望んでいない。

はやてがずっと抱いてきた幸せは、みんなが笑って過ごせる未来。それなのに、それなのにリインフォースがそこにいないなんて、ダメだよ。おかしいよ！！

『駄々っ子はご友人に嫌われます。聞き分けを…我が主』

『リインフォース！！！！！！』

はやてはリインフォースに近づこうと車椅子を漕ぐ。けれど車輪が雪で隠れていた石にぶつかって、はやては雪の上に身体を投げ出されてしまった。

『なんでや…？これから……やっと始まるのに……これからうんと、幸せにしてあげなあかんの……！！』

雪の上で泣きじゃくるはやてに、見られなくなった小さい僕はシヤマルに懇願する。

『お願いシヤマル！一旦止めて！…！』

『……はい』

リンカーコアの抽出が止まったリインフォースは、はやての元へと歩み寄り、しゃがみ込んで優しくはやての頬に手を添えた。

『大丈夫です。私はもう世界で一番幸福な魔導書ですから』

『リインフォース……………』

そして彼女は、あるお願いをはやてに言う。

『主はやて、一つお願いが』

『……………』

『私が消えて……………小さく無力な欠片へと変わります…もし良ければ、私の名はその欠片ではなく、貴女がいずれ手にするであろう新たな魔導の器に送ってあげてくれますか？

祝福の風、リインフォース……………私の魂はきっと、その子に宿ります』

『リインフォース……………』

『はい、我が主』

最後にリインフォースははやてに笑顔を見せる。

その笑顔は、僕が今まで見てきたどの笑顔よりも優しい、慈愛に満ちた笑顔だった。

『シャマル……………』

『……………はい』

再びリンカーコアの抽出が始まる。そして僕はゆっくりとリインフォースに歩み寄っていく。

『うっ、ひくっ……』

その顔は、もうボロボロだった。小さいながらも、男の意地で我慢しようとしていたけど……どうしても耐え切れなかった。涙が止めどなく溢れて、鼻水でぐしゃぐしゃな顔だった。

『本当にすまない、吉井明久……』

『あつ、謝る事じゃ、ないよ……』

嗚咽交じりで、僕はリインフォースに応える。

『だが私は優しいお前にこれから酷な事を……』

『優しく、なんで、ない……なのはや、フェイトや、はやての方が、ずっと……ず、っど……』

『アキ君……』

『明久……』

『アキ君……』

涙と鼻水を袖で拭くと、僕はキッと目の前のリインフォースを見据えた。

僕のその姿を見たリインフォースは、そのままはやて達のことを一瞥して……最期の言葉を告げた。

『主はやて……守護騎士達、それから勇敢なる者達……ありがとう、

そして…さようなら』

『~~~~~』

剣を、一閃。

目を閉じて、リインフォースのリンカーコアを僕はこの手で、切り裂いた。

直後。

パン！

その音と共にリンカーコアは破壊され、そしてゆっくりと彼女の身体は光となって天へと昇って行った。

「……………夢？」

ゆっくりと僕は起き上がる。

時計を見てみると、まだ夜中の二時だった。まだ眠る余裕がある時間だけど、今はそんな気分にはなれなかった。

ベッドから下り、自分の机に立ってかけている一枚の写真を手にする。

そこに写ってるのは、僕を中心なのは、はやて、アルフ、アリス、すずか、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、ユーノ、クロノさん、リンディさん、恭也さん、忍さん、美由希さん、桃子さん、士郎さん……………そして。

「フェイト……」

あの日、プレシアさんが亡くなった日……フェイトとプレシアさんの間に亀裂が入り、プレシアさんはそのまま虚数空間に落ちそうになった。

あの時、虚数空間に落ちそうになったプレシアさんの手を、二人の近くで見守っていた僕は無我夢中で掴んだんだけど……最期、彼女は僕にこういつてから僕に雷をぶつけて突き飛ばした。

『フェイトを、よろしくね』

八年経った今でも、僕はその言葉を覚えている。
覚えているんだけど……

「その相手と八年も会ってないんじゃないか……」

元々僕は海鳴市に住んでた人間じゃない。

『P・T事件』の時は管理局から逃げるために必死にデバイスを使つてどこへともなく飛んでいって偶然たどり着いただけだし、『闇の書事件』では、なのは達と合流した後、ヴィータ達との戦いが始まって、僕はクロノさんに必死に勉強を教わったり、訓練されたりで、彼女達とまともに過ごせた事……クリスマスの日以外、あまりないような気がする……その後はクロノさんに必死に管理局の一員となるために勉強ばかり教えられたんだっけ……で、結局数年間フェイト達とは音信不通。

「……………はあ」

会いたいなあ、みんなに……
窓から見た夜空……金色に輝く月が、僕にはフェイトの髪の色に見えた。

バカとデバイスと魔導師　くバカが奏でる絆の曲く

これは、一人のバカな少年と優しい少女達の物語……

P r e l u d e (後書き)

最初から重いですね……

ちなみに、内容をかなり端折っているには理由があります。
では、バカファンの方もあわせてよろしく願います！

第一話（前書き）

いよいよ、明久の物語が始まります。

第一話

「はぁ……………」

ゆっくりと初夏になりつつあるこの季節、ダンボールと畳の教室で僕はダンボールを壊さないように配慮しながらもたれつつ、ため息をついていた。

「はぁ……………」

「どうした、明久。さっきからため息なんて吐いて？」

僕にそう話しかけてきたのは、たてがみのような髪に野性味が溢れた顔つきの悪友、坂本雄二だった。

「別に……………ただ、雄二はいいなあって思ってさ」

「あ？何がだ？」

「すぐ近くに幼馴染がいて」

「それは嫌みか？お前はここの前の映画館で何を見てきたんだ！？」

雄二がなんか怒鳴りながら僕に近づいてくる。こいつには霧島翔子さん、っていう雄二なんかには勿体無いくらい美人な幼馴染がいる……………まあ、ちょっと激しい襲撃アブローチの数々で最近は少し戦慄を覚えるぐらいなんだけどね……………まあ、僕がしたかった話はそこじゃない。

「違うよ、そう意味じゃないんだ」

「じゃあ、どう意味だよ？」

「……約束をすぐに果たせられるからだよ」

「約束？」

「うん……」

八年前、プレシアさんと…そしてフェイトと交わしたもう一つの約束も僕は果たせていない。彼女をよろしく頼まれた僕は…その彼女を守ってあげるところか、一言も話せていない。正直、もし彼女の居場所を教えてくれる人がいたらすぐにでも飛んでいくのに……

「明久…まさかお前にも幼馴染がいるのか？」

雄二が訝しげに僕に尋ねてきた。まあ、この前こいつに幼馴染がいたからという理由で襲撃をかけたんだけど…あの時は美人の霧島が…つて言う理由より、雄二なんかに幼馴染がいた、つていう方向に腹が立つたんだよなあ……まあ、今となつてはどうでもいいか。

「うん…つて言っても小学三年の冬から会つて背骨が抜れて内臓が
圧迫されるううう
ツツツ！！！！！」

ぐおお！！なんだ！？急に背骨を雑巾のように絞られるような関節技をかけられたぞ！？こんな技、管理局の士官学校でも習わなかったぞ！？？

「アゝキいゝ、ちよゝゝゝと話を聞かせてもらえるかしら？」

しまった！逆効果だった！！

「アゝキい？その『彼女達』とは誰のことなのかしらあ？」

美波が猛獣のような鋭さを瞳に宿して僕ににじり寄ってくる。

「吉井君…詳しく教えてくれませんか？」

さらにその隣では目に瘴気でも宿しているんじゃないのか、って
思えるこのFクラスの紅一点の姫路瑞希さんが僕にゆっくりと近づ
いてきていた。どうやら彼女もすっかりFクラスという空間に馴染
んでいるみたいだ。

「(フォルト、なんとかならないの！？)」

僕の首にかけられているネックレス型のデバイス、フォルトに念
話で語りかける。

『(そう申されましたも……明久様はこの方たちに魔法を使えます
か？)』

頭の中に優しげな女の人の声が響いてくる。魔法を使えるかどう
かだと？そんなの決まってるよ。

「(姫路さんや美波以外にだったら使える)」

こいつらに情けなんて必要ない。僕の魔法で虚数空間までぶっ飛
ばしてやる。

『(ダメですよ、一般人にはできる限り我々の存在を知られてはい

けないんですから!!」』

フォルトが焦ったような口調で僕の頭に語りかけてくる。ぐう、
こういう時ほど規律というものが鬱陶しい!!

ともかく、魔法はそういう理由で使えないから……ここは……

「戦略的撤退!!」

荷物を引つ掴んで教室から飛び出す僕……だっただけど、突然襟
首を掴まれる。

「ぐえ!!」

こ、呼吸が……襟首が絞まったことによつて、僕の首が圧迫され
た。

くそう、誰だ!?!こうなったら真つ向から戦つてやる!管理局で
それなりに鍛えられた肉体をここで披露

「吉井、どこに行く気だ?」

「げつ、鉄人!」

「誰が鉄人だ、バカ者」

僕を捕まえた人物は、最悪な事に補習室の鬼、西村先生こと鉄人
だった。

「離してください、鉄人!このままじゃ僕の命が風前の灯のような
状況に陥るのは火を見るよりも明らかなんです!!」

「そんなことはどうでもいい」

あっさりとそう告げる担任に、僕は現在の教育制度はどんな風になってるか気になった。

「それよりも授業が始まるタイミングで鞆を持って脱走とはいいい度胸だな」

「違いますって！僕はただ」

「調度良い、新しい補習を考え付いたところだ。お前をその実験台にしよう」

「お願いですから人の話を聞いてください！！というより、生徒をサラリと実験台にしようだなんてどんな教

そこまで言った瞬間、僕は鉄人に連れて行かれた。

『『『……………』』』

『あいつ、今日はもう出てこれないかもな』

『ちっ、処刑は明日に持ち越しか』

『代わりに坂本を処刑するでしょう』

『なっ！冗談じゃねえええ』

『！！！！』

『何よ、アキのバカ。今なら素直に言うだけで腕の関節だけで済ませようと思ったのに』

『そうですよね、まったく吉井君の方こそ人の話をちゃんと聞かなきゃダメですよね』

『お主らがそれでは、たしかに逃げ出すのも解る気がするぞい……』

僕が連れ去られた後、そんな会話が あったのは僕の知る由もなかった。

「うう、酷い目に会った」

夕焼け空の下、フラフラと頼りない足取りで歩く僕。今日は訓練校に行くのは無理かなあ。

僕はこうみえても、リンディさんやクロノさんの下で管理局の職員として日々、働きながら学んでいる。クロノさんが僕に魔力の練り方や扱い方を教えてくれたり、捜査官として必要な事はなんたるかを色々教えてくれたりとかで、結構多忙な毎日を送ってたりする。ちなみに、この事を姉さんや母さん達は知らない。

なんというか、ちゃんと説明しても『あんだ頭大丈夫？一回力チ割った方がいいんじゃない？』なんていう反応が返ってくるだろうし……というか、そうハッキリ言われちゃったし………まったく、少しは士郎さん達を見習って欲しいものだ。あれこそ親の鑑というに相応しい人たちだよ。

『明久様、明久様』

「ん？どうしたの、フォルト？」

『クロノ様より通信が入っております。すぐに出てください』

「えっ！？マジ！？？」

マナーモードだったから気付かなかった！慌てて僕は携帯電話を取り出すと、そこには確かにクロノさんの別称である『KY』の文字が出ていた。通話ボタンを押して、電話に出る僕。

「はい、もしもし」

『吉井、何分待たせるつもりだ』

「すみません…マナーモードにしてたので気付きませんでした」

歩きながら僕は路地裏に場所を移動する。僕は一応、秘密のエンジニア。一般人を巻き込まないように配慮するため、出来る限り管理局からかかってくる通信は、人目につかないようにする必要があるんだ。

「それで…ひょっとしていつものやつですか？」

『そうだ。場所はメールで記しておくからすぐに迎え』

「了解！」

電話を切ると、五秒もしないうちにメールが来る。僕はメールを確認すると、デバイスを手に取り、走り出す。

「フォルト！」

『set up』

瞬間、僕の身体が紅色の光に包まれる。

その後、僕の格好が文月学園指定制服から、黒い服装に赤いスカーフを巻いた僕専用のバリアジャケットに変化する。刀型のアームズデバイスになったフォルトを手にすると、僕は目的の場所まで一気に飛んでいった。

「（…郊外の廃病院、か……………）」

すっかり日が暮れた中、結界を張った僕は廃病院の中を歩いていた。

「（なんか『あいつら』が現れる場所ってバラバラだよなあ……………）」

周りを警戒しながら僕は『あいつら』が出現する法則性を考えてみる。

『あいつら』が出てくるのは街中だったり、この廃病院のような郊外だったり、てんでバラバラ。だけど必ず『あいつら』が出てくるのはこういった人気の無い場所に限定される。それが人の手によるものなのか、それとも偶然…いや、これが偶然なはずはない。必ず何らかの必然性があるはず……………けれど手がかりになるものが今のところないんだよなあ。

『マスター、そのまま行きますと……………』

「えっ？（ゴスツ！）んぎゃあ！！」

『壁にぶつかります…て、もう遅いみたいですね』

は、早めに言っよ……。

『それにしても本当にマスターは推理の時だけには恐ろしいまでの集中力を発揮しますね』

「だけは余計だよ……だけは」

鼻を押さえながら僕は周りを見渡す。なんかいつの間にか別のフロアに移動してみたんだ…はあ、クロノさんにも言われたけど、僕ってこういう時になんで周りが見えなくなっちゃうんだろ？

ため息を吐きながら自分のいる場所を確認しようとしたとき、僕の目にあるものが飛び込んできた。

「これは…っ！」

目の前に拡がる。赤、赤、赤。

触れてみると、少し乾いてはいるけれど手にこびり付いた。赤い、液体。血だ。若干乾いている白い固形物と赤い固形物……つまり、骨と肉だ。

吐き気をこらえながら、近くに落ちている血がこびり付いたタバコを拾い上げる。

「街の不良の溜まり場…だったみたいだね」

『そうですね…おそらく偶然現れたあいつらに……』

「くそ！」

血が付いたタバコを投げ捨て、僕は歯を思いっきり食い縛る。何度もあいつらと戦ってきたのに、僕がもっと早くあいつらの足取りをつかめていれば……！！

『マスター、自分を責めてはいけません』

「でも、僕がもっとちゃんと……！」

『苦虫を噛み潰しているのはあなただけではありません』

「えっ？」

『おそらく管理局でも対策が練られているはずですよ。仲間をもてば、この事件、必ず解決できるかと』

「……………うん」

フォルトに諭され、僕はようやく落ち着きを取り戻した。そうだが、今はこんなところで悔しがつてる場合じゃない。悔しかったら動け、そして事件を解決するんだ！！

でもできるなら、応援に駆けつけてくれる仲間が彼女達だと嬉しいんだけどなあ……………

……………なんてばやいてもしょうがない、か。

「今は…ここにいる人たちの仇は取るよ」

僕の目の前に群がってくるように集まってくる『あいつら』。『あいつら』。黒い霧もやのような巨大な物体が目の前に現れる。赤い光が目のように

に灯り、その下にぞろりと生え揃った牙。

こいつらの名前は、エネミー。

クロノさん、曰く便宜上の意味でこの名前が付けられた名前だ。

「やるよ、フォルト!!」

『Yes, sir!!』

瞬間、僕はダンと床を蹴り上げて一気にエネミーとの間合いを詰める。左手で持っているデバイスの柄に右手を添え、エネミーの間合いに入ってた瞬間、僕は一気に抜刀する。

ザン!

音と共に刃をエネミーの靄のような身体を斬る。

確かな手ごたえと共に、エネミーの切り裂かれた場所から、黒い液体が血のように噴き出す。

オオオオオン

エネミーが一声鳴くと同時に、本来ある頭の場合から、無数の触手を僕目掛けて放つて来る。僕は『ミッドチルダ式』の魔法陣を展開させると、意識を集中させて一気に奴の触手目掛けて魔法を放った。

「クリムゾン・バスター!!」

発動させると同時に、紅い魔力弾が触手に向かって飛んで行き、炸裂する。だけどそれだけで全ての触手を撃ち落せなかったみたい

だ。何本か僕に向かって襲い掛かってくる。その先端は槍を思わせるように鋭く、それを僕の体に突き刺そうという魂胆なんだろうけど……

「そつは問屋が卸さない！」

僕の目の前に三角形の魔法陣……つまり『ベルカ式』の魔法陣が展開される。

本来ベルカとミッドの魔法は相容れない。それなのに、僕はその二つを使いこなす事ができる……これには一応、僕の中にある『アレ』が関係しているんだろうけど、今は関係ないかな。

刀の鯉口を指で少し押すと、鞘の中から紅い閃光が周囲の闇を切り裂くように輝いた。

そのまま僕は一気に駆け出し、エネミーの間合いに踏み込むと同時に剣を閃かす。

「けんきょうそつせん 剣響奏閃・八刃の舞」

チン、という音が病院の廊下に響く。

同時にエネミーが全身から黒い血を噴き出して倒れた。

これが僕の魔法。音速を超える居合いを繰り出し、鞘に刃が納まったときには既に相手は斬られている。それも一太刀だけじゃなく、すれ違った瞬間に僕はあいつを八回切り裂いた。だから八刃、つてね。

「ふう、まずは一体」

おそらくエネミーはこいつ一体だけではないだろう。最初僕が対峙したときは一体だけだったけど、徐々にその数を増やしていつか最近では二十体近くも見かけるようになった。

「（今回も骨が折れそうだなあ……）」

ため息を吐いてその場を立ち去ろうとした時だった。

『マスター後ろからエネミーが！！』

「なっ！」

慌てて後ろを振り向くと、そこには先ほどと同じ、黒い霧のような塊が集まっていた。しまった！まさかこの場にもう一体いたなんて！！

ダメージを予想し、ギリツと歯を食いしばって鞘を前に構える防
御の構えを取った瞬間だった。

「トライデントスマッシュャー！！！」

ゴッ！という音と共に、エネミーの身体が三叉の金色の閃光に貫かれた。

金色の…閃光……もしかして…

「大丈夫？」

「……………」

ゆっくりと、振り返る。

金色の長い髪をなびかせ、紅い瞳に桜色のくちびるが華やかに彩られた顔立ち。年不相応だけど、嫌味に見えない見事なスタイルの

体を黒いバリアジャケットに身を包んだ同い年くらいのこと…綺麗に成長した……

「フェイト……」

第一話（後書き）

一応、明久とフェイト達は同じ年という設定です。
今回は明久がベルカとミッドの両方の魔法を使いましたが、その理由はあとで解かります。

第二話（前書き）

なのは組と合流！さらに二人ほどバカテス側から加わります。

第二話

夢でも見ているんじゃないのか？

最初はそう思った。

でも違う。

「明久」

僕の名前を、彼女が呟く。

透き通るかのような綺麗な言葉が大気を伝わって僕の元へと響いてきて、それが現実だと教えてくれる。

「フエイト」

僕が彼女の名前を呟いた瞬間、彼女は宝石のように煌めく紅い瞳に涙を浮かべ、僕に向かって駆け出し、僕の身体に腕を回して抱きついてきた。

「明久あ！明久あ！！」

僕の胸で泣きじゃくる彼女。

ずっと

ずっと逢いたかった。

八年前、僕を管理局から匿ってくれた女の子。

八年前、僕と一緒にしばらく一緒に暮らした女の子。

八年前：僕が初めて守ってあげたいと想った女の子……。

「フェイト……」

抱きついてくる彼女の体を僕はそっと抱きしめる。
やっと出会えた。

嘘じゃない、幻でもない。夢でもない。

僕の腕の中にいるこの温もりが、現実のものだと証明していた。
一秒という時間がとてつもなく長いような感覚が僕達を包み込む。
濃密な時間に身を任せ、僕とフェイトは互いに触れ合「ドゴオオオ
オオオオオン！！」って何！？

突然響いた轟音に、僕らはバツと互いに体を離し、辺りを警戒す
る。

するとどこからか、懐かしい声が聞こえてきた。

幼い、勇ましい女の子の声が……この声って！？

「ひよっとして……ヴィータ!?」

建物を豪快に壊す破壊音と共に「どりゃああああ!!」という声
が続いていた。間違いない、こんな事するのはヴィータだけだ!
まさか彼女まで来てるなんて!!

「ヴィータだけじゃないよ……」

ニコリ、とフェイトはイタズラっぽく微笑むと、告げた。

「なのはにアルフ…はやてやシグナム、シャマルにザフィーラも…

「たまには連絡よこせよな！久しぶりだな、明久！！」

「なのは、はやて…ヴィータ！」

八年前よりも成長した（ヴィータはそのまんまだけど…）三人に出会え、僕は懐かしさと共に嬉しさが込み上げてくる………というか。

「はやて！歩けるようになっただね！！」

「せや！もう体もばっちり元気やで！！」

病弱で歩けず、車椅子の生活だったはやて…彼女が今、当たり前のように元気な姿で僕の前に立っている。夢なんかじゃない、紛れもない現実だ。こんなに嬉しいことなんてない。

「吉井、久しぶりだな」

「ふふっ、お元気そうだなによりです」

「シグナム、シャマル！！」

ピンク色のポニーテールを持った凛々しい顔立ちの女性、シグナム。その隣にいるのは優しそうな笑顔を浮かべた金色の髪を持った女性、シャマル。

「久しぶり、明久！」

「無事で何よりだ」

「アルフ…ザフィーラ!!」

獣耳の少女…フェイトの使い魔の狼、アルフにはやての家族であり、守護獣の青い狼、ザフィーラがそこにいた。

「みんな……………」

懐かしい仲間たちに囲まれ、僕は不覚にも泣きそうになった。こんなに温かな気持ちになったのは久しぶりだ……

「なーに、泣きそうな顔になってんだよ」

ヴィータが僕のわき腹を肘で軽く突付いてくる。僕はそれに苦笑を浮かべながら応えた。

「いや…みんなにまた会えて嬉しくて、さ」

「アキ君……………」

僕の言葉になのはが嬉しそうに笑顔を浮かべる。久しぶりの再会。僕達は懐かしさと喜びが優しく包み込んでくれる空間を、しばしの間楽しんだ。

「……………で、これってどついついこと?」

場所は変わりここは僕の家。

とりあえずあの廃病院にいたエネミーは、全部なのは達が倒したみたいで、結界を解除した僕らは一旦僕の家に来ることになった。一人暮らしにしてはかなり広いリビングだけど、僕も入れて九人（内二人は狼）にもなれば結構せまく感じるものだ。

「どういうことって？」

フェイトがソファーに座りながら、僕が淹れたコーヒーを飲みながら聞いてくる。

「どうやら僕の意図を伝えずに聞いてしまったみたいだ。いけないいけない、ちゃんと相手に理解できるように話さないと……」

「えっと……順を追って話すけど、とりあえず最初に何でこの街にフェイト達がいるの？」

「ああ、そのこと……母さんがね、『明久一人では荷が重いだろっから』って理由で、私達をこの街に派遣してくれたんだ」

「なるほど……確かにフェイト達なら僕と戦闘経験があるし、助っ人としてはこれ以上頼りになる存在はいないね」

「にやはは、なんか照れるね」

「事実だよ……でもそうなると危惧していた可能性が出てくるな……」

ため息を吐きながら僕はコーヒーを啜る。今の気分を表したかのように、少し苦みが強い味だった。

「危惧していた可能性とはなんだ、吉井？」

「うん…去年からこの辺りにエネミーが出始めた…っていうのは聞いてるよね？」

その言葉になのは達は頷く。

去年…僕が文月学園に入学する少し前からエネミーがこの街に出現し始めた。

管理局から頼まれた『もう一つ』の任務に加え、僕はクロノさんの下でエネミーの討伐と調査を任された。このもう一つの任務についても、なのは達は知っていたみたいだ。

「僕が危惧していた可能性…それは現状が悪化の傾向を辿る事だよ」

「悪化の傾向？」

「うん。エネミーの出現の数はここ最近、数をかなり増やしてきている。前回、僕は一人で約二十体近くのエネミーを相手にしたんだ」

「二十体も!？」

「大丈夫だったの!？」

「怪我、せえへんかった？」

フェイトとなのはとはやてが不安そうに僕に尋ねてくる。三人の優しさに暖かなものを感じながら、僕は笑顔で大丈夫だったよ、と返す。

「それで、ちょっと質問なんだけどさ…なのは達って魔力ランクはどのくらい？」

「私達？……Sランクだけど、リミッターが付いてるよ」

「僕はSS・ランク。当然ながらリミッターは付いてるけどね」

僕のランクの高さに驚いたのか、なのは達は鳩が豆鉄砲をくらったような顔になる。まあ、僕もこの歳でここまで自分の魔力ランクが高いなんて初めて聞いたときは驚いたけど……とりあえずその話題は置いておこう。

「それで、吉井。この質問の意味は何だ？」

ザフィーラが訝しげに尋ねてくる。

その問いに答える前に、僕はコーヒを啜った。この次はかなり長めな説明になるだろうから、少しでも喉は潤しておかないと……

「質問の意味なんだけど……リミッター付きとはいえ、僕は一応ランクSオーバーの魔導師。そして今回、みんながここに駆けつけてくれた事で確信した。現状は確実に悪化の傾向を辿ってる……それもランクSオーバーの魔導師を一気にここまでの戦力を加えないといけないくらいに……」

「なるほど……しかしそうなると、あまり悠長にしている暇は無さそうだな」

僕の言葉に全員が真剣そのものの顔つきになる。

事態は確実に悪くなっている方向に向かっている。しかし一向に証拠の一つも無く、手がかりも何一つ無いのが現状だ。

「だ、大丈夫だよ！これだけの数の仲間がいるんだよ？なんとかなるって！」

突然響き渡るアルフの声。それに続くかのようにヴィータが口を開いた。

「そ、そうだな！あたしらが加わるんだ！鬼に金棒ってやつだ！」

空元気、と言う訳でも無さそうだ。

二人の目には、本当に『なんとかなる』という強い意志があった。その強い意志を持った言葉は、僕達の心に強く響いた。

「そうだね、ヴィータちゃんの言うとおりだよ！」

「私も…みんながいれば大丈夫だと思うよ！！」

「せやな！それにこっちは前よりもずっと頼もしそうになったアキ君がいるんや！誰がこようと負ける気なんておきん！！」

なのは、フェイト、はやての三人がまるで確信を持ったかのような力強い言葉を言い放つ。

「うん…僕もこの『九人』がいればどんな壁だって乗り切れると思うー！」

根拠も何も無い。けれど、堂々と宣言できる言葉。

そうだ、確かに状況は悪いものなのかもしれない。けれど、それでも僕の前にはこれだけの数の仲間がいるんだ。恐れる事なんて無い。みんなとなら、どんな状況でも乗り越えられるはずだ……

「いいえ、違うわよ、明久君」

「えっ？」

どういうこと、シヤマル？

「実はなんだけど…後二人、ここに加わるらしいの」

「二人も！？」

えっ、マジで！？

あと二人も戦力が増えるなんて…でも、二人って誰だろ？
なんて考えていたときだった。

ピンポーン

「誰だろ、宅配便かな？」

「私が出ようか？」

そう言ってフェイトがソファから腰を上げる。けど、仮にもこ
こは僕の家。お客さんにそんな事はさせられない。

「いや、僕が出るよ。とりあえず適当にくつろいでて」

そう言つと、僕は玄関に足を運んだ。

さてと、誰が来たのかな？知り合いだったら悪いけど帰ってもら
おう。なんせ今は久々の仲間達との再会だ。できるなら水入らずに
してもらいたいし。そう思っていたら、またチャイムの音が鳴った。

「はい、どちら様ですかー？」

返事をしながら鍵を外し、ドアを開いた。

「よう、明久」

玄関に立っていたのは…僕の悪友、雄二だった。

ボタン、ガチャガチャ（ドアを閉めて鍵をかけ、チェーンを付けた音）

悪は去った。さて、みんなのところに帰ろう。

ドンドン！

『てめえ、明久！いきなり閉めてんじゃねえよ！！』

うるさい、この野郎。せっかくの旧友との再会をお前なんかに汚されてたまるか。

『……雄二、吉井は出ないの？』

なんだ？霧島さんまでいるのか？こいつめ、さては僕に見せつけようとして……ッ！！

『あの野郎…つたく、指示された場所がこいつの家だと知ったときは度肝を抜いたぞ』

『……私も驚いた、吉井も『デバイス』を使えるなんて』

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン！ガチャ！！

「き、霧島さん…今、なんて言ったの？」

聞き捨てならぬ単語に僕は冷や汗をかきながらドアを開けた。
頼む、聞き間違いであつて欲しい。
しかし現実というものは無情で……

「明久…マジでお前もデバイス持つてるのか？」

「ゆ、雄二もなの……？」

互いに冷や汗をかきながら僕らは睨み合つ。

霧島さんはともかく、よりにもよつてこいつが助つ人だなんて最悪だ。

「坂本雄二だ、よろしく頼む」

「……隣にいる坂本雄二の『妻』の霧島翔子」

「待て翔子、俺はそもそも容認していないぞ!？」

「……大丈夫」

「な、何がだ？」

「……雄二とは小細工なしの腕力勝負で結婚してみせる」

「結婚に腕力が必要なくおがあああああ!!こめかみが!!頭蓋が軋むウウウウウウ!!」

『 『 『 『 …… 『 『 『 『 『

二人による、ある意味個性的で強烈な自己紹介に、僕の昔馴染みである彼女達は絶句していた。

雄二と霧島さんが増えて、さらに狭くなったリビングで僕は二人にコーヒ―を淹れながらため息を吐いていた。

「明久、さっきからため息を吐いてるけど、どうしたの？」

横からフェイトが僕の顔を覗き込むように現れる。その時、髪からふわわりといい香りが漂ってきて僕は少しだけ緊張してしまった。

「うん…ちよつとね」

まさかこんな身近に魔導師がいたなんて…それも雄二なんか…
…ある意味、ちよつとシヨックでもあった。

「ねえ、あの二人って明久の知り合い？」

「うん、ブサイクの方は雄二って言ってね、一応は僕のクラスの代表」

「代表？」

フェイトが首をかしげる。

あーそっか…『代表』とか、そういうのは文月学園固有のものだったっけ。まあ、詳しい説明は後にするよ、とフェイトに言ったら解った、と言ってくれた。理解がある友達を持って僕も嬉しいよ。

「で、隣にいる美人の方は霧島翔子さん、雄二の幼馴染で、学年主席の人なんだ」

「学年主席って…じゃあ、学生の中で一番成績が高い人なの!？」

「うん…まあ、少しくせがあるけど………」

「……………あー……………」

フェイトがなんとも言えない表情で雄二にアイアンクローを続けている霧島さんを見る。さっきまで自分で妻と言っていたのに、その夫である相手に情け容赦もなく頭蓋を潰そうとしている姿を見ればそう思うだろう。新学期の頃、才色兼備と噂されていた霧島さんの実態を知ったとき、僕は思わず絶句してしまっただけだし。

「二人とも、そのくらいにして話を再開させよう」

二人の前にコーヒーを置き、僕は話を再開させようと促す。

「……………吉井、まだ終わってない」

「ごめんね、霧島さん。けど終わったら好きなだけ雄二を好きにしたいから」

「ちょっと待て明久!俺の許可も無しにそんなこと」

「……………ありがとう、吉井はいい人」

「どづいたしまして」

「おお……………いい……………」

すまん、雄二。お前の犠牲は忘れない。さてと、話を始めないと……。

「これからの僕らの方針なんだけど……やっぱりエネミーが出てこないと僕らは動きようが無いんだよね」

「……まあ、そうだな」

雄二が疲れた顔で頷く。

「俺も何度かエネミーと戦ったことはあるが、あいつらがどうやって出現しているのか、手がかりすらない状況だと、俺らから起こせるアクションはねえからな」

「えっ？坂本君も戦った事あるの？」

なのはが不思議そうな顔をして聞いてくる。

「ああ、どうも俺らはそれぞれ違った場所で戦っていたみたいだな……しかし解せねえな」

「何が？」

「そもそもだ、こんなに近くに魔導師がいるのに、なんで俺らは出会わなかったんだ？」

「確かに……」

雄二の言うとおりだ。そもそもこれ程近くに魔導師がいたっていつの間に、なぜ僕らは出会わなかったんだ？エネミーが出ているとは

いえ、少なからず現場で鉢合わせしてもおかしくは無いはずだ。
それが無いって言う事は…もしかしたら。

「人為的な何かがある、ということやな」

はやての言葉に僕は頷く。

「……ちよつと、管理局に問い合わせてみる…少し、時間がかかる
かもしれないけど」

「頼むよ、霧島さん」

「じゃあ、結果が出るまでこの件はここまですておこつ」

「そうだね、少なくとも得られるものはあつた訳だし」

このエネミー出現事件に人為的なものが関わっている、という可能性が高まったただけなんだけど、それでも一歩踏み出す事が出来た。それだけでも収穫だ。

「…にしてもだ」

「ん？どうしたの、雄二？」

「いや、お前がこうやって小難しい会議にお前が普通に参加できてる事に違和感があつてな」

失敬な。

「あのね、これでも捜査官としてクロノさんにずっと鍛えられてき

たんだよ？まあ、ほぼ部屋に缶詰みたいに閉じ込められて勉強させられたり、僕だけ特別メニューだ、って言っただけでひたすらガジェットの手を一人でしなきゃいけなかったりで大変だったけど……」

『『『……』』』』

僕の言葉にその場にいる全員が僕の方を見る。どうしたの？

「えっと……明久はクロノに鍛えられてたんだよね？」

「うん。でもフェイト達のこととはあまり聞いてなかったな……聞いても『そんな暇があったら勉強してろ』って言われてさ……まあ、みんな頑張ってるわけだし、僕も頑張らなきゃーと思って必死に勉強してたよ」

「明久……お前……」

雄二がなんだか哀れみに満ちた視線を僕に向けてくる。何！？本当になんなの！？

「えーっと、アキ君」

なのはが苦笑いを浮かべながら僕に尋ねてきた。

「アキ君の両親って、アキ君が魔法に関わってる事……知ってるの？」

「ううん、知らないよ。教えても『はあ？あんたついに頭壊れて幻覚でも見たんじゃないの？』って言われるのがオチというか、そう言われた……デバイスを展開させようとも思っただけど、無駄だろうと思っただけくらいだし」

果たしてクロノの運命はいかに？
次回に続かない！！（某禁書のノリで）

「さてと、とりあえずエネミーを感知したら必ず連絡しあって近くにいるメンバーと合流する事。以上、解散！」

雄二が閉めの言葉を言い、そのまま立ち上がると、もの凄い速度で家を出て行った。その後、霧島さんが『……逃がさない』と言って雄二の後を追っていった。さらばだ、我が悪友よ。骨は拾ってゴミの中に入れておいてやるう。

「さてと、それじゃあ私たちも帰らせてもらおうわ」

「えっ？帰るって…どこに？」

「実はな、この近くに私たち用にリンディさんが用意してくれた家があるんや」

「そこで私たちは暮らすんだよ。ついでに、アキ君の学校に通う事になったんだ」

「そうなの！？」

これは驚きだ。なのは達がこの街に住むのはなんとなく想像してたけど、まさか僕らが通っている学校と一緒に通う事になるなんて……なんていうか、とっても嬉しいや。リンディさんには感謝しな

いと。

「じゃあね、アキ君。また学校でな！」

「じゃあなー！」

「失礼しました」

「また会おう」

「また明日ね、アキ君、フェイトちゃん、アルフちゃん！」

口々にそう言って玄関から出て行くのは達。

また、明日……か。

またなのは達からこの言葉を聞けるなんて……なんだか凄く感慨深い……ん？

あれ？なんか違和感が……

「あの……明久……」

背後から澄んだ声が響く。振り返ると、そこには……フェイトがいた。心なしか、その顔は少しだけ赤くなっている。その後ろではニヤニヤと笑っているアルフがいた……って、どうしたの？

「あれ？フェイト、どうしてここにいるの？みんなと一緒に帰ったんじゃないの？」

「えっ……あ、明久は何も聞いてないの？」

「何が？」

「私、今日から明久の家にホームステイすることになってるんだよ？」

「彘？」

瞬間、僕は自分の時間が止まったような感覚に陥った。
え？今、彼女……なんて言った？

「ほ、ホームステイって……マジで？」

「う、うん……母さんがここに泊まったら？って言っただよ……一応、明久の両親にも了承は得てるんだよ？聞いてない？」

「ううん、全然」

母さんなら、息子の了承なんて知ったこっちゃないと思っている
だろうし、今更驚くことではない。

というか、リンディさんは一体どうやって母さんに了承させたんだらう……管理局流の話術交渉で丸め込んだのかな？

「いや、交渉に『ピーーーーーー（とにかく凄まじい金額）』円払
う、って言ったらあっさり了承してくれたみたいだよ」

「大人って汚い……！」

アルフの言葉に僕は愕然とした。

「と、とにかく、よろしくお願いします……！」

「これから世話になるよ」

フェイトとアルフが笑顔で僕に話しかけてくる。これから彼女達と一緒に生活していくんだろうと思うと、八年前の時の事を思い出すなあ。

そう思うと、少しだけリンディさんには感謝したい気持ちが湧いてきた。まあ、裏で汚い大人の欲望を感じたりはしたけど……
これから大変なことがたくさん起こるのは火を見るより明らかかなんだけど……

「あー……うん。よろしく！」

とりあえず今は彼女達との輝かしい共同生活に胸を躍らせることにした。

第二話（後書き）

フェイトと同棲……………果たして、明久の運命は？

第三話（前書き）

同居生活が始まった次の日です。

第三話

そろそろ文月学園の清涼祭が近づいてきた今日この頃。
僕、吉井明久の心臓は朝っぱらからドキドキしていた。

「……………なんだって、こんな早い時間に？」

目覚まし時計を見てみると、まだ朝の五時だった。まだまだ余裕のある時間だけど、この高鳴り続ける心臓のせいで、二度寝は困難を極めていた。

「……………しょうがない、起きてよ……………」

ため息を吐きながらベッドから降りる。

「さてと、何で時間を潰そうかな……………そうだ、ゲームでもして……………あっ」

そこまで呟いたところで気付いた。

そうだ…今、この家にいるのは僕だけじゃなかったんだ……………。

「フェイトとアルフが昨日から一緒に同居してるんだった……………」

うう、昔馴染みが近くにいるせいで早く起きた、なんて子供じゃないんだから恥ずかしいなあ……………うっ、考えるとまた心臓がドキドキしてきた。と、とりあえず冷たい水を顔にかけて、気分転換でもしよう。

部屋を出て脱衣場にある洗面台に向かう。

ふあ、とあくびをしながらドアを開けると…脱衣場に置かれてい

る籠の中に置んだ衣類とバスタオルがそこにあった。

(あれ?なんでこんなところに……っ!!)

最悪な事態を想像し、僕は慌てて脱衣場から出ようとした……けど。

ガチャリ

「ふう……………」

僕が脱衣場を出る前に……長い金髪から雫を落とし、全身に一糸すら纏っていないフェイトが浴場から出てきた。

「……………」

時が止まる。

だが次の瞬間には時が動き出していた。

フェイトは顔だけでなく全身を茹タコのように真っ赤にすると、近くにあったバスタオルを手に持って……

「きゃあああああああああああああああああああああああ
あ!……!」

「ごめ、ばふっ!……!」

僕の顔にバスタオルが飛んできて視界が奪われる。でもバスタオルだから別に痛くもなるともないや。フェイトみたいな美少女の裸を見てこの程度で済むなんて僕は運がいいほうなのだろうか……?いや、今はこんな事を考えている場合じゃない。

バスタオルが顔にかかっているせいで、視界は見えないけど、このまま後ろに下がってドアを閉めれば……

「ふえ、フェイト！？なんだい、今の悲鳴は！？（ドン！）」

「つて、うわぁ！？」

突然響き渡るアルフの声と共に、背中を強く押された。

急な事に対処できず、僕はそのまま思いつきり前に倒れて『むにゅん』つて……なんだ？このやわらかくて温かくて、いい匂いのすべすべした……。

「あ、あう、あう」

「あつ……………」

「……………えーっと……………」

……………
……………
……………

三者三様の沈黙が脱衣場を支配する。

この後、僕はフェイトから思いつきり平手打ちをもらい、まだ初夏だというのに頬に真っ赤な紅葉を作ることになり、脱衣場からアルフと一緒に追い出された。

……………朝っぱらから、色々不幸だ。

……………」

「……………」

現在の時刻は七時四十分にさしかかるであろう、この時間。

僕らは一応、学生（本職は時空管理局の魔導師）なので、この時間は学校に登校するのが常識だ。

爽やかな朝の澄んだ空気を肺一杯に吸い込む。うーん、なんだか甘い香りがするなあ。

初夏の柔らかな日差しを浴びながら僕はこの早朝という時間を堪能していた。

「あ、あの……明久」

「ん？何、フェイト？」

僕の隣には誰もが見目麗しい少女と称するのに相応しい美少女、フェイト・T・ハラウンが少しだけ申し訳無さそうな顔になっていた。

ちなみに、僕はその顔をまつすぐには見れていなかったりする。理由？察してくれとしか言いようが無いよ。

顔を見れば思い出されるのは、わずか数秒しか見ていないというのに、しっかりと僕の記憶に焼きついて消す事ができない、というよりはほぼ永久保存でもしておきたいようなセクシーシーン。

この早朝という時間を堪能している理由は、その煩惱を少しでも晴らすための行動なのだ。

「その…朝は、ごめん」

「あ……い、いや！それを言うなら僕の方も謝らなきゃ！！本当にごめん！まさかあんな朝早くにフェイトがシャワーを……」

「わっ、わああああ！それ以上言わないで！！」

真っ赤になったフェイトが、両手をブンブン振ってあわてる。

ちなみに、早朝の時間にフェイトがシャワーを浴びていた理由は、どうも僕と同じらしく、朝早く目が覚めてしまい、中々寝付くことができず、シャワーでも浴びてリフレッシュでもしようと思ったかららしい……そのシャワーが調度終わる頃に僕が入ってきたという……なんて間が悪いんだろう、僕は。

う……なんかまたあの時の光景が脳裏に……って、イカンイカン！
！色即是空、空即是色！落ち着け僕、こんな朝早くから煩惱に目覚めるな！！

自分の中で煩惱と戦いつつ、これ以上泥沼にならないように僕らはいったん深呼吸する。

「と、とりあえず……この話はこれで終わりにしよう」

「そ、そうだね……」

「それじゃあ、学校に行こっか」

「うん」

フェイトが僕の隣に並んで歩き始める。

青空の下、美少女と一緒に登下校。

うーん、まさか僕がこんなギャルゲの主人公みたいなシチュエーションを現実でするだなんて……人生、何が起こるか本当に解らないや。

ドキドキドキドキ

先ほどから心臓がやたら高鳴っている。

チラリと隣を見ると、そこには笑顔を浮かべながら文月学園の制服を着ながら登校するフェイト。そんな嬉しそうな笑顔を見ながら隣を歩いてくれているというのは、男として幸せなことだ。でもこの心臓の高鳴りはそれとは少し種類が違うような気がする。一体なんなんだ？この胸の高鳴りは……ん？美少女………緒の登校………雄二だった場合………なるほど、解つたぞ。

「明久、なんか顔色が悪いけど……どうかしたの？」

「あー、うん。ちょっとね……でも別に具合が悪いって訳じゃないから大丈夫だよ」

「そう？でも明久のあの食生活を見たらその可能性もあるような気がしてきたんだけど……」

「うっ……」

昨晚、フェイトに僕の食生活について聞かれたら、滅茶苦茶怒られたんだっけ……まあ、その後、二人一緒に近所のスーパーに買い物に行つて、久しぶりにまともな食事を食べたっけ……それで、今日は久しぶりにお弁当を作ったんだ。フェイトの分と、僕の分。フェイトはなんだか悪い、と言っていたけど、食べてくれる人がいるのって、なんだか自分一人の分を作るよりもずっと楽しいんだよね……あ……。

まあ、その話はいったん置いておこう。

「大丈夫だよ。これでも一時期、塩と砂糖を食べて過ごしていたからね」

「食べるじゃなくて、舐めるが正しい表現のもので過してたの……？というか、魔法の訓練のときはどうしてたの！？」

「クロノさんからまかないを貰ってなんとか訓練を乗り越えてたから問題は無かったよ？」

「ああ、そう………今度は私が明久の食事管理しないと（ボソッ）………」

フェイトがなんか小声で呟いていたけど、スルーしよう。さてと……そろそろ校門が見えてきたな……。そう考えるだけで僕の胸はさらに高鳴った。これから始まるであろう、僕の輝かしい青春に僕の胸が鼓動を奏でている理由の一つだ。そしてもう一つ……こっちが大部分を占めていたりする。

『『『異端者発見！！』『』』』

ほら、来たよ。僕の胸の大部分を占めていた連中が。

「ちいっ！見つけた！！！」

「えっ！？明久、どうしたの！？」

僕はフェイトの手をつかむと、急いで走り出す。

『おのれ吉井！誰だ、その美少女は！？』

「そんな美少女と一緒に登校など、許しておけん!!」

「異端者には血の制裁を!!」

「逃がすなあ!討ち取れえ!!」

「我が軍の力を彼奴にみせるのだ――!!」

「首を取れ!取ったものには褒美(エロ本)を遣わす!!!!」

「『うおおおおおおおおおおお!!!!!!!!
!!』」

「痛みを味わいながらじわじわと地獄に送ってくれる!」

「吉井明久を灰に!吉井明久を塵に!吉井明久殺しの紅十字!!」

背筋が凍るような叫び声を上げながら様々な武器を持って追いかけてくる。というか、途中の奴らは、僕を敵の総大将か何かにしたかった?それと最後、君はルーンが刻まれたカードで炎を操る魔術師か何か?

「あ、明久!?あの覆面の人たちは何なの!？」

「フェイト、今は黙って僕に付いてきてくれ!!」

彼女の手を離さないようにしっかりと握り締め、僕は学園に入る。フェイトは今日が転校初日な訳だし、文月学園に入ってから最初に行くのは職員室のはず…職員室ならば奴らの手も届かない!!なんととしても生き延びてやる!!

「はあ……はあ……」

「ぜえ、ぜえ……」

なんとか嫉妬に狂ったクラスメイトから逃げ延び、僕とフェイトは職員室の中に逃げ切る事が出来た。まだ朝早い時間だったから、それ程登校している生徒も少なかったのが幸いしたみたいだ。

「吉井、テストロッサ、朝から騒々しいぞ」

さすがに騒ぎすぎたせいなのか、女の先生に注意されてしまった。

「あつ、すみませ……ん？」

「なんだ、人の顔をじろじろと……」

僕は目の前にいる、竹刀を片手に担いでいるピンク色のポニーテールをした巨乳でジャージを着た昔馴染みの女性の姿に固まった。

「……何やってるの、シグナム？」

ヒュン！シュパツ！ シグナムが僕に向かって竹刀を振るい、僕が白刃取りした音

受け止めた両手にももの凄い衝撃がきた。あ、危ない…危つく僕の脳天に突き落とされるところだった……って！

「いきなり何すんの、シグナム!？」

「先生と呼べ、吉井」

……はい？

「いや、戦いでは確かに先制はあるのみだけど」

「明久、それまったく違う『せんせい』だよ」

……いや、今のはただの現実逃避なんだけど……
まさかとは思うけど……

「……シグナムが……この学校の先生？」

「そうだ、私は今日からお前のFクラスの副担任となった。担当は体育と補習室だ。これからよろしく頼むぞ」

「あ、うん……じゃなくて!！」

えっ!?! シグナムが僕のクラスの副担任!?! しかも鉄人と同じ補習室担当!?!???

「しかし私の竹刀を受け止めるとはな…鍛錬は怠っていないようだな、吉井」

「あはは、まあね。みんなを守れるくらい強くなるために、結構鍛えてたから……じゃなくて!！」

「吉井、朝から騒ぎすぎだぞ。一体どうした？」

不思議そうな顔で僕をみつめるシグナム。

いや、僕としてはこの場に貴女がいるほうが不思議で仕方ないんだけど……。

なぜここにシグナムがいるのか、その話を元に……って、そういえば話すら始まっていなかったんだっけ……なんて考えている途中、職員室のドアが開かれ、外から白衣を身に付けた金色のシヨートヘアーの女性が……って……！！

「あら、明久君。おはようございます」

「なんでシャルマまでここにいるのさ

！……！！」

「吉井、朝から喧しいぞ（ゴスッ）」

冷静さを取り戻したところに、再び度肝を抜くようなイベントが待っていたとは想像も付かなかった。

そしていつの間にか背後に立っていた鉄人に頭を殴られた。

「なんでって……はやてちゃんから何も聞いてないんですか？」

「え？いや、何も……」

僕の言葉に、シャルマだけでなく、シグナムとフェイトもどこか納得したような……あるいは、『ああ、またか』的な感じの雰囲気のため息を吐いていた。

「（あのね、私たちは管理局の権限でこの学校に教師としているの（

「
シヤマルが僕に念話で語りかけてくる。
なるほど、管理局の権限……って、それって偽造免許なんじゃ……
なんて言っつられないか。状況が状況だし。少しでも仲間を一箇所に
集めさせておくのが目的なのか。
とりあえず、これでなんでこの場にシグナム達がいるのかは解つた。」

「はあああああ……………」

解つたと同時に僕は深いため息を吐いた。

「失礼しまーす。今日からこの学校に転向してきた八神なんやけど……
おっ、アキ君！」

「邪魔するぞー……って、どうしたんだ、明久。朝から疲れた顔してんなー」

ため息の元凶である昔馴染み、はやてが文月学園の制服を身に付けて職員室に入ってきた。隣には同じように文月学園の制服を着たヴィータがいた。なるほど、ヴィータはシグナム達と違って背が足りないから、教師ではなく学生にしたのか……。

「どないしたん？朝からえらく疲れた顔してるで、アキ君」

「はやて、どうしてシグナム達が学校にいるって教えてくれなかったの？」

「ん？ああ、そのことな」

僕の言葉にはやてが一瞬だけ考え込むような仕草をした後、ニヤリとしてやったり、と言ったような顔つきになる。まさか……。

「その方がおもしろいからに決まってるやん」

やっぱりか……はやて、前はあんなに優しい少女だったのに……
八年前とは違う意味で成長していた昔馴染みに、僕はその場に頂垂れてため息を吐くしかできなかった。

「これより、異端者・吉井明久の審問を行う」

フェイト達と職員室で別れた後、教室に付いた途端、僕の周りには覆面とマントを身に付けたクラスメイトに囲まれる羽目になった。しまった！すっかりさっきの騒ぎでこいつらの事を失念していた！！

「罪状、吉井明久は今朝方、見目麗しき美少女と仲睦まじく登校していた…これに相違ないか」

『『『相違ありません』』』

「吉井明久、何か言い残す事は無いか？」

「なんで尋問の前に刑が下る直前の台詞が出るの!？」

前から思ってたけど、この審問会色々とすっ飛ばしすぎだと思っ。

「判決、死『ちょっと待ちなさい』む？」

助かった！誰かは知らないけど僕に助け船を

「アキ、見目麗しき美少女って誰なのかしら？」

「お話、ゆっくり聞かせてくださいね」

そこにいたのは怒髪天をついている美波と、闇の書も真つ青なくらいの禍々しいオーラを身にまとった姫路さんだった。

どうやら僕に渡されたのは助け船じゃなくて天国行きの船らしい。

「姫路様、島田様、今は異端審問会の中で。どうかお引取り願いたい」

どこぞにいる貴族に仕える執事みたいに突然恭しくなる須川君。

足元を見てみると、まるで地震でも起きているかのように震えている。周りを見れば彼だけでなく、他のメンバー全員が体を震わせていた。

ふっ、君達なんてまだいい方さ。

僕なんて、そのオーラを真正面から喰らっているおかげで震えすらできない。

「ダメよ、今すぐアキを引き渡しなさい」

「そうですよ、私たちは明久君に話があるんですから…：そうですよね、明久君？」

邪悪なオーラと大気が震えるほど殺気を放っている姫路さんと美波。その後ろでは、僕が逃げ出さないように入り口を押さえてい

る異端審問会……。

前門の美波と姫路さん、後門の異端審問会。

まずい……どっちに向かっても僕の生き残れる道が無い。

ぐっ……このままでは……そうだ、異端審問会の注意を少しでも逸らすんだ。出入り口さえ確保できれば、あとは職員室にでも逃げ込めばいい……そうすれば、鉄人か……あるいはシグナムと一緒にこの教室に戻ってこられる。

考えはまとまった。後は行動するのみ。

「あつ！雄二が霧島さんと手をつなぎながら登校している……！」

『『『何だと！！？！？』』』

チャンス！

今のうちに職員室まで一気に駆け出し……そう思う前に僕の両肩関節がしっかりと取り押さえられていた。

「アキ、どこに行こうって言うの？」

「しょ、職員室に忘れ物を……取りに行く……だ、け………」

ぐおお！肩が！両肩が……このままじゃ外れる……！！

肩の激痛に耐えながら僕は必死に二人に言い聞かせる。

「嘘ね」

「嘘ですね」

考える間もなく僕の言葉を否定する二人。え？少しは考えてもいないんじゃないの！？

「アキ、いくら逃げ出そうと思ってるからって、職員室はないんじゃないの？」

「そうです、まだ更衣室の方が信憑性はあります」

「僕はどんな奴だと思われてるの！？」

クラスメイト女子のあんまりな言葉に僕は涙しそうになった。ぐっ…まさか彼女達の転校初日が僕の命日になるだなんて……

「何をしている、お前ら席に着け」

気が付けば朝のホームルームの時間になっていた。

鉄人の一喝により、騒ぎは終息した。

普段は暑苦しいだけの存在だが、この時ばかりは鉄人がギリシヤ神話に出てくる神に思えた。

段ボールの机にそれぞれ着席するのを確認すると、鉄人は咳払いをした後、話し始める。

「あー、今日はお前らに重要な知らせがある」

重要な知らせ？それって…ああ、副担任のシグナムのことか。

確かに重要な事だ。特にクラスメイトは発狂するぐらい喜ぶだろうな……

そう言えば、フェイト達のクラスってどこだろ？

彼女達の学力は知らないけど、少なくともFクラスは無いだろっし…ひよっとしたら、全員Aクラスかな？

なんて考えていた僕だけど、次に出てきた鉄人の言葉には思わず耳を疑った。

「喜べ、今日から我がFクラスに副担任と『転校生』が来ることになった」

.....はい？

え？今、こいつなんて言った？

「八神先生、入って来てください」

「うむ」

鉄人の言葉に従い、ジャージに竹刀片手のシグナムが教室に入ってくる。入ってきた瞬間、教室中の男子から『おお！！』などという声が響いた。

教卓の前に立つと、シグナムは思わず目が引くぐらい大きな胸を張って口を開く。

「今日からこの学校に赴任した八神シグナムだ。担当は体育。Fクラスの副担任としてお前らを西村先生共々鍛えていくつもりだから覚悟するのだな」

シグナム、それ脅しになってない？

まあ、この学力最低クラスの事だからなあ……シグナムみたいな堅物がそんな連中の担任になったんだ。これからバリバリしごかれる事は火を見るよりも明らかだ。

「ちなみに私は補習室も担当している。もし私の前で戦死して逃げ出そうという愚か者がいた場合は……吉井、ちよっと前に出る」

「え？うん」

シグナムに言われ、僕は前が出る。

するとシグナムは僕にどこから取り出したのか、厚さ数センチぐら
いはある木の板を僕に渡した。何これ？

なんて思った瞬間、シグナムが竹刀を上段に構え、そのまま勢い
よく振り下ろしてきた。

「ッ！！」

慌てて僕は木の板を両手で突き出し、その板で竹刀の一撃を防い
だ。

ゾーン！！空気が切断される凄まじい音がFクラスの教室に響く。
その後、パカンという間の抜けた音が響くと同時に、僕の持つて
いた木の板が真っ二つに割れていた。

何！？これ、竹刀だよね！？竹刀なのになんで剣みたいに真っ二つ
に斬れるの！？

「この剣技をもってしても連れて行くので…肝に銘じておけ」

『『『『イエス・マム！！』』』』

ひきつった笑みを浮かべるクラスメイト達。

そりゃそうだ。

こんな人間技じゃない威力の太刀筋を見せられて驚かない人間な
どいない。

「いやあ、助かります八神先生…こいつらときたら補習の最中でも
平気に逃げ出そうとするものですからね」

「ふっ、我が剣が必要となったらいつでも呼んでくれ」

鉄人の言葉に、竹刀片手で答えるシグナム。
なぜだろう…その竹刀がどうしても真剣に見えて仕方ない。

「さて、続いて転校生の紹介だ。入って来い」

ガラリ、と引き戸が開かれる。

そして…中に入ってくる彼女達を見て僕は…いや、教室中の男子
が息を呑んだ。

最初に入ってきたのは、茶色の髪を二つに結った美少女、なのは。
次に入ってきたのは、僕の家で同居する事になった美少女、フェ
イト。

その次に入ってきたのは、今朝の職員室での騒動の元凶になった
美少女、はやて。

最後に入ってきたのは、はやてを守護する騎士の一人で、美少女
…ではなく、美少女のヴィータ。

まさか昔馴染みのほとんどが同じクラスになるとは思ってもいな
かった。

僕が思わず苦笑した時だった。

『『『『』』』』』
oo
oo
oo
oo
oo
oo
oo
oo
oo

「高町なのはつていいいます。海鳴市から来ました。これから一年、よろしくお願いします!」

そう言つてペこりと頭を下げるのは。

続いてフェイトが前に出る…その時、僕と目が合いニコリと笑みを浮かべた。

「フェイト・T・ハラオウンつていいいます。なのはと同じ場所から来ました。ちなみに、そこに座つてゐる吉井明久君と、私たちは昔馴染みの親友です。みなさん、よろしくお願いします!」

そう言つてフェイトが頭を下げた…タイミングを見計らつてクラスメイト達が僕に向かってカッターを投げつけてきた。い、今の避けなかつたら確実に首に刺さつてたよ……………

なんて僕が冷や汗をかいてると、突然ガタガタという音が響く。音のした方に振り向くと、そこには教卓を持ち上げたヴィータの姿が…………つて、何やつてんの!?

「おら、てめえら…何、明久に向かってカッター投げてんだ?」

ドスの利いた声でカッターを投げつけてきたクラスメイトをにらむヴィータ。

「あたしは八神ヴィータ。そこにゐる吉井明久の仲間であり、後ろにゐるはやてを守る家族だ。あたしの仲間や家族に手え出してみる…………ぶつ潰してやる」

言いながら教卓を持ち上げ続けるヴィータ。

そこでグラーフ・アイゼンを使わないのはせめてもの情けなのか

……
なんて思ってたら雄二がすくりと立ち上がる。

「あー、八神：ヴィータだな？」

「あつ、そうだけど？」

雄二は昨日会ってるけど、二人ともクラスメイトの前では初対面を装っていた。

まあ、昨日あっていた…なんて話したらまた余計な騒動を巻き起こすのは間違いないし、賢明な判断といえるだろう。

「とりあえず教卓を置け。話が進まんし…何より教卓を武器に使うな」

おお、珍しい。雄二が正論を言ってるよ。

「けどよお、あいつら明久を」

「解ってる。だが教卓を武器に使うのは間違いだ」

うんうん。そうだね。

「使うなら金属製のバットにしろ」

『『俺らを叩きのめすのはいいのかよ！！？！？』』

そのとおり。

教卓なんて使ったら先生達が困るもんね。

「解ったよ。ちえ」

ヴィータが舌打ちをしながら戻っていく。

その姿に苦笑いを浮かべていたはやてだったが、気を取り直して前が出る。

「私は八神はやて、なのはちゃん達と同じところから来たんや。ついでに、そこにいるアキ君とは知り合いや。これからよろしくな！」

にこやかに、元気に自己紹介するはやてに今まで殺伐とした雰囲気、少しだけ緩和される。はやて…正直、助かったよ。

僕がホッと息を吐いた…途端に再び背中に凄まじい悪寒が走る。

振り向いてみると、そこにはまるで般若のような鋭い視線で僕を見つめる姫路さんと美波がいた。

(アキ？これってどういうこと？)

(ゆっくり、しっかり、一字一句魂魄を込めて話してくださいね)

どうしよう、今すぐ逃げ出したい。

果たして、僕の輝かしい青春の行方はいかに？

次回に続く！！

第三話（後書き）

次回はFクラスでの日常を描こうと思います。

第四話（前書き）

Fクラスでの日常です。

第四話

なのは達が僕らの教室に来てから五分後……これから彼女達との青春の日々が待っていると思うと、僕、吉井明久は胸が躍るような気分になった。

けれど、それは少し後になりそうだ。

現在、僕は尋問されていた。

目の前にいるのはツリ目をもの凄く鋭くしている猛獣のような殺気を辺りに振りまいている美波。もう一人は虚ろな視線で僕に呪いをかける勢いで邪悪なオーラを漂わせている姫路さん。なぜだ、闇の書の方が怖いはずなのに、あれと対峙したときよりもずっと怖いのは気のせいなのか？

「アキ、これはいったいどういうこと？」

「正直に話してくださいね」

「しょ、正直って言われても……か、彼女達とは昔馴染みだけだよ」

「本当に？」

美波が疑いの目で僕を見る。なぜ？

「吉井君、それは本当なんですか？」

姫路さんが瞳から禍々しい光を放ちながら僕に問いかけてくる……

…ははっ、おかしいや。さっきから体が金縛りにかかったように動けない。

「う、うん…小学三年生の時に知りあって…それから昨日まで音信不通だったんだけど…」

「それなのにどうしてその子達がここにいるの？」

美波の言葉に、僕はため息を吐いた。わるいけど、その言葉には答える訳にはいかない。

ここは管理外世界。魔法の存在は秘匿にしておかなければいけないし、僕らはそれを迂闊に誰かに話してはいけない義務を持っている。とりあえず何か言い訳を考えないと…:…と違ってたとき、ふと僕は疑問に思った。

「…というか、二人とも何で僕に聞いているの？普通にフェイト達に聞けばいいと思うんだけど……………」

「うっ！」

僕の言葉に二人が何か言葉に詰まったような反応をする。

これは…論破できたってことなのかな？まあ、だったらなんで二人がこんな尋問みたいな行動を取ったのか尋ねて…みようと思ったけど、去年から美波には散々な目に合わされてるし、姫路さんもFクラスに（悪い意味で）馴染んできちゃってるし、下手な刺激は逆に事態を悪化させてしまうから、やめておこう…:…僕も大分捜査官としての勘が働くようになったかもしれない。まあ、その成長がこんな生命の危機のような状況が促しているだなんて悲しすぎるけど。

「じゃあ、この話はお終い。そろそろ授業が始まるし、席に着こう

「よ」

「わ、わかったわよ」

「はい」

僕に言われて、二人ともしぶしぶ、といった様子でみかん箱の机と、自分の席の座布団に座る。相変わらず僕らの教室って凄いよなあ……こんな教室じゃあ、体が弱い人はすぐに病気に……。

僕は一つの可能性に思い当たり、近くで僕らのやり取りを見ていたヴィータに視線を向ける。

「……………（ねえ、ヴィータ）」

念話で彼女に話しかける。

「（ん？なんだよ）」

「（こんな教室の設備じゃさ、はやて…また具合悪くしちゃうんじゃないかな？）」

「（っ！！たしかに…………）」

僕の言葉に、ヴィータが驚いたような顔になる。

その言葉に頷いてから、今度はヴィータにつないだまま、雄二に念話で話しかけてみる。

「（ねえ、雄二。ちょっと相談があるんだ）」

「（なんだ、明久）」

「(あと少しで清涼祭の時期でしょ?)」

「(ん? ああ、たしかにそうだが?)」

「(それがはやてのこととどう関係あるんだよ)」

ヴィータが焦ったような口調で僕に語りかける。その焦りは、はやてのことを大事に思ってるからこそなんだろう。

「(清涼祭の売上金でさ、ここの設備少しでもよくできないかな?)」

「(設備をよくするだ? …… まあ、できなくもないが ……)」

「(本当か!?)」

雄二の言葉に、ヴィータが光を見た、と言わんばかりの表情になる。僕も雄二の言葉に、少しだけ安心した。清涼祭の売り上げで設備が少しでも良く出来るのなら、それに越した事は無いもんね。

「(さてと、そうなるかどうかやって売り上げを手に入れるか考えないと …… ありがとう、雄二)」

「(おう、貸し一つだけ。後でジュースおごれよ)」

なんて言ってきたけど、ここは頷いておこう。雄二の助言が無かったらきつと困っていただろうし、雄二も僕とヴィータのやり取りでなんとなく理由が解った感じだったみたいだから、きつと力になってくれるだろう。そう思えば百円ぐらいの出費なんて痛くも無い。

本当に痛くもかゆくもあるのは……。

『吉井殺す』

『吉井殺す』

『吉井殺す』

『吉井射殺す』

『吉井刺し殺す』

これから異端審問会で物理的にありえそうだ、ということだ。

というか、みんなさつきから僕を殺す発言しかしてない！なんか背筋から寒気のようなものをさつきから感じまくってるし！！

『吉井滅多刺しにしてから五体をバラバラに解体して埋めてやる』

『炎よ。 吉井明久に苦痛の贈り物を！！』

『吉イイイイイ井くウウウウウン！！！！』

『十字架は吉井明久を拒絶する』

『優先する。 吉井明久を下位に。 みかん箱を上位に』

「ちよつとお！？途中から禁書的な魔術を使い始めている人がいるんだけど！？つてうわぁ！炎が飛んでき…うお！危なっ！！」

飛んで襲い掛かってくる十字架やみかん箱を避けまくる僕。途中

からなんか質量兵器を持ち出してくる連中がいたり、魔術：という名の手品（炎ならガソリンをまいて火をつける等）を使って僕を殺そうと躍起になる連中の手から必死に逃げる。

「てめえら……いい加減にしろおおおおお！！！！！！」

『ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！』

キレたヴィータが教卓を振り回して異端審問会の連中をなぎ払い始めた。おお、助かった……と思ったのも束の間。

「ぶぐらっ！！！！」

「あ」

数秒後、僕の頬に教卓の角がめり込み、僕は壁まで吹っ飛ばされて意識を失った。

ヴィータ……相変わらずのバカ力だ……ね……。

『『『『『明久（アキ君）』』』』』

！！！！

意識を失う直前、彼女達の叫び声が聞こえてきたのは気のせいか……。

「うっ……酷い目に会った」

「大丈夫、明久？」

「あー…ごめん、明久」

今の時間は昼休み。僕は四時限目まで保健室で過ごす羽目になり、目覚めたあとモヴィータの一撃を受けて虫歯みたいに腫れた頬にはパッチが張られていた。

「別にいいよ、それよりもご飯食べよ」

そうやって僕は笑顔を浮かべて鞆から今朝作ってきた弁当を取り出す。教卓でのヴィータの攻撃なんて、アイゼンでのラテーケン・ハンマーの一撃に比べたらまだ可愛いものだ。

「そうだね」

「せやな」

「おう！」

「うん！」

僕の言葉に反応してか、なのは達も鞆から弁当箱を取り出す。とはいえ、食べる場所がみかん箱の上だとなんだか少し場所的にあれかもしれない……。

「なんだ、お前らも弁当なのか？」

「あれ？雄二もなの？」

雄二の手には一つの…一般的にドカベンと呼ばれるとても大きな弁当箱が握られていた。どうやらこいつも今日は弁当らしい。というより、いつも思うんだけどこいつの食事が凄まじすぎるのはなぜだろう？フードファイターでも目指してるの？

「目指してねえよ。それより、こんなぼろい所より屋上でも行こうぜ。そっちの方が心地よく飯が食えるだろ」

「それもそうだね。あつ、ムツツリー二達も食べる？」

「……………（コクリ）」

「ふむ、なら同席させてもらおうかの」

「みんな、ムツツリー二達も混ぜるけど、いい？」

「私はいいよ」

「私も！」

「うちもかまわんで」

「別にいいぜ」

「よし、それじゃあ行こうか」

ほこりっぽい教室で食べるよりも、開放感溢れる屋上を望んだ僕は、さっそく屋上へと向かおうとした。

「あ、あの明久君達……………」

「ん？」

突然呼び止められ、僕は振り返る。

そこには顔を少し赤くしてもじもじと可愛らしい動作をしている姫路さんと、むすつとした顔つきになっている美波がいた。どうしたんだろう？何か用事かな？

「あの、私たちも一緒にお食事に入れてもらってもいいですか？」

ああ、なんだそんな事か。断る理由も無いので、僕は当然了承した……良かった、腕間接を持っていかれるような内容じゃなくて。

僕は心の中でそつと胸をなでおろしたのだった。

「……翔子、なんでお前がここにいる」

「……夫の隣に妻がいるのは、常識」

「あはは、なんだか面白そうだから着いてきちゃったよ」

途中で合流した霧島さんと工藤さんと一緒に昼食をとることになった僕ら。工藤さんとはやては気が合うというか、同類というか……まあ、出会った瞬間になんだかまるで旧知の友のように仲良くなっていた。

ちなみに二人の会話を聞いたのか、ムツツリーニは鼻から血を流していた。

「うーん、風が気持ちいいなあ」

頬をなでる初夏の風が気持ちいいのか、フェイトは大きく伸びをしなから堪能していた。その際、風が強いせい、スカートがはためいていて、ムツツリーニはそれを凝視していた。………なんだろう、それをやられると少しだけ腹が立ったのは……。

「ほら、早くご飯食べようよ」

「あつ、そうだね」

僕の言葉に反応し、各々が持参してきたお弁当を広げる。

同じ家で住んでいる僕とフェイトの弁当はエビフライの卵とじ、ピリ辛風味の野菜炒め、肉じゃが、そして自信作の鶏の五目ご飯だ。今日は朝早く目が覚めたから、ここまで手の込んだ料理が作れたんだよね。

「おお、明久の弁当のくせに美味そうじゃねえか」

「……………手の込んでいる」

「冷めておるはずなのに、食欲をそそるものがあるの」

「あはは、まあね」

お弁当って言うのはどうしても冷めてしまうものだから、今回はそれを視点に入れて、冷めても美味しいように工夫したんだ。

「本当…美味しそうね……………」

「はい…美味しそうですね……………」

姫路さんと美波が僕のお弁当箱をじっと見ていた。どうしたんだろっ？

「ねえ、アキ。誰に作ってもらったの？」

「へ？」

「吉井君、一体誰に作ってもらったんですか!？」

「いや、これは僕が作ったんだけど……………」

「嘘ね」

「嘘ですね」

どうして僕の言葉は毎度毎度あっさりと一蹴されるんだろう。
しかしこのまま引き下がるわけには行かない。僕にも一応は料理人としてのプライドがある!

「いや、これは本当に……………」

「い・い・か・ら・答えなさい!！」

「明久君!誰に作ってもらったんですか!！」

「いだだだだだだだっ!!!！」

反論しようとしたらアイアンクローを受けていた。どんな罪人で

も、尋問でいきなりアイアンクローさせられたら話せるものも話せないと思う。

「あ、明久！？二人とも、それじゃあ話せないから！」

「とうか、二人とも全然聞かないよね！？話し合わないと何事も解決しないよ！」

フェイトとなのはの言葉によやく僕はこめかみの痛みから解放される。うう。まだ痛いよ……。けれど美波と姫路さんの二人は今だ納得していないような感じだ。

「だ、だって…アキに料理なんかできるわけないもの。それなのに正直に言わないから…」

酷い言われようだ。

すると、はやてが僕の不満を察してくれたのか、説明してくれた。

「あのな、アキ君はこうみえても料理が得意なんやで。私も何度か参考にさせてもらうくらいやし」

「そう？僕も結構、はやての料理には参考にできる点が合ったけど？」

「いやいや、私なんてまだまだだや。小学三年でラーメンを麺から出汁まで作り上げることが出来るのはアキ君だけやと思うで？」

その言葉になのは達がうんうん、と頷いた後その時の味を思い出したのか、うつとりとした表情を浮かべた。フェイトにいたっては昨日食べたの美味しかったなあ…などと呟いていた。そんな表情を

されると、料理人冥利に尽きるっていう言葉が浮かぶよね。

「マジかよ…明久、お前それはある意味凄いぞ」

「……………天才の領域」

「たしかにそれは凄いのう……………」

さらに雄二やムツツリー二に秀吉まで僕の料理の腕に驚いていた。いやいや、そんなことはないって。さて、姫路さんや美波はどんな反応を……………。

「……………」

「……………」

二人とも石像のように固まっていた。え？そんなにショッキングだった？

すると美波がゆっくりとした動作で手を伸ばし、僕の弁当から玉子焼きをひょいっと取っていった。

「ああ！美波、いきなり何を！！」

「……………」

しばらく口の中で咀嚼していた美波だけど、飲み込んだ後、地面に両手をついて頂垂れていた。あれ？おかしいな…自信作だと思ってたのに……………。

「……………こんなことって……………女のプライドが……………」

「み、美波ちゃん!??どうしたんですか!??やっぱり不味かったんですか!?!???」

「え?そんなことないけど?」

言いながらフェイトは僕が作った弁当を食べながら幸せな表情を浮かべる。

フェイトの言葉に反応したのか、姫路さんも僕の弁当からおかずを一つ持っていつて食べる。どうでもいいけど、僕の了承とかそんなのって無いの?

「……………」

そして姫路さんも美波と同じように床に両手をつけて頂垂れた。
何?本当になんなの?

「……………吉井、私にも一つ」

「僕にもくれないかな?代わりにおかずと一品交換で」

「あつ、それやったら私も頼むわ」

「私も!」

「んじゃ、俺も便乗させてもらおうわ」

「ならばわしも」

「……………俺も」

言葉を交わしながら僕達はおかずを交換する。

うん、バラエティ豊かになって美味しそうだ。こうやって友達同士でおかずを交換して談笑しながら食事をするのって学生の特権だよな。

そして僕のおかずを食べた人の感想はというと……………。

「ほう、これは美味しいな」

「……………美味しい。うちのコックにしたいくらい」

「……………美味しい」

「たしかに美味しいのう」

「凄いね〜吉井君。これ、本当に美味しいよ！」

「にやはは、アキ君の料理の腕、かなり上がったみたいだね」

「そうだね！あの時も美味しかったけど、八年前よりも美味しい！」

「う〜ん、やっぱりアキ君の料理は美味いわあ」

「くう〜〜〜つギガ美味え！！はやての料理もギガ美味いけど、明久の料理もギガ美味え！！」

そう言っつて笑顔になるみんな。

やっぱり料理っつて言うのは他人に作っつてあげるのが一番だよな。

この笑顔のためにこそ、頑張れるというか。

ちなみに美波と姫路さんは未だに復活していなかった。

二人には悪いけど、昼休みの時間は限られているので、僕はみんなから貰ったおかずを食べる事にする。

「うん、はやても腕を上げたね。この唐揚げ、とつても美味しいよ」
「ありがとな！」

ああ、穏やかだ。

澄み切った初夏の空。心地よい風。美味しい弁当を囲んで楽しく談笑する仲間達。

さつきまでかなり殺伐としていた雰囲気から一転して、この平和で穏やかな昼休み。僕は幸せを感じながらこの時間を少しでも濃密に過ごそうと思った。

すると、今まで頂垂れていた姫路さんがガバリと起き上がる。ん？一体どうしたんだろう。

ゾクリ！！！！

瞬間、僕らの背筋に痛みを感じるほどの寒気が走る。

それは僕だけではないらしい。雄二やムツリーニ、秀吉までも恐怖に戦慄する表情になっていた。ま、まさか……姫路さん……。

「ジツハワタシ……」

おかしい、震えが止まらない。

なんだ、この感じ……虚数空間に引き込まれる方がずっとマシだと感じられる気配だ……。

ギョツ!!

隣ではフェイトが顔面を蒼白にして僕の腕にしがみついていた。フェイトだけじゃない。なのはやはやて、ヴィータまで顔を真っ青にしていた。え?どうしたの?四人とも、姫路さんの料理は今回が初めてなはず……………。

「あ、明久…………なぜか、私達…………このお弁当に命の危機を感じるんだけど」

「(う、うん…それにこの感じは…………)」

「(せや…もう何度も体験している…………)」

「(シャマルの時と同じ気配だ!!)」

念話で僕に語りかけてくる彼女達。

そして納得してしまう。そういえばシャマルも姫路さんレベルの料理人だったってことを…………だからみんな反応したんだ…体が、すっかりその恐怖を覚えてしまっているから。

「オベントウヲツクツテキタンデスケド…………」

そう言って弁当箱のふたを開ける姫路さん。

中から現れたのは見た目美味しそうな可愛らしいオーソドックスなお弁当。

僕らは最初これに騙され、あっさりと命を刈り取られた…………そのせいか、見える。その弁当から放たれる禍々しい気配を!命を根こそぎ刈り取るであろう刃が!歪められた空間から現れる悪霊の腕が!くっ…………体がバインドにかけられたように動かない!!

そして、死神は無情にも僕らに告げる……………

「モシヨロシカッタラメシアガツテクダサイ」

逝って来い、と。

『『『』』』……………逝たきます』』』』

葛藤の末、僕らは死神の誘いを受ける事にした。

見た目一番よさそうな玉子焼きを選び、僕はそれを口に運ぶ。

「っ！！！！！！」

口の中に異物が入った瞬間、僕の目の前は暗転し、一瞬だが死んだ爺ちゃんや婆ちゃん、リンフォースが見えた気がした。く、口に入れただけでこの破壊力か…………っ！！

「……………（ギリギリギリギリ）」

周りを見ると、雄二はプチトマトを口に入れて、へたを持ったまま白目を向いて首を三百六十度回転させていた。何！？プチトマトってただ単に添えるだけのものだよ！？それが何をやってたらそんなエクソシストみたいな現象を起こすわけ！？

「……………（ビリビリビリビリ）」

コロッケを食べたムツリーニは床に倒れ、その体を痙攣させて

いた……おかしい、ムツツリー二の体から電気のようなものが見える。

「……かつ、こほっ……」

「……（シューーーー）」

「……（ぐったり）」

「……（カチンコチン）」

「……（ドロリ）」

サラダを口にした秀吉は首をかきむしり、まるで難見沢症候群にかかったような感じになっていたし、フェイトはご飯を口にした瞬間その可愛い口から煙を上げていたし、なのははエビフライを食べて頭からキノコを生やして倒れたし、はやては僕と同じ玉子焼きを口にしたはずなのに、僕とは違って体が石化していたし、見えなかったけど、何かを口にしたヴィータは両耳から半透明で緑色の液体を噴き出して轟沈していた。えっ！？本当に何を食べたのヴィータ！？

「み、みんな……うっ！！」

なんて驚いていた僕だったけど、うっかり口にしていた玉子焼きを一噛みしてしまう。

瞬間、僕の上半身の各所が突然裂傷し、そこから噴き出す血……ごはっ！！な、なんて破壊力だ……というか、どんなものを入れたらこんな結果が……。

ふっ……そろいもそろって僕らって……本当に、バ……カ……

.....。
青空を見ながら、僕らは仲良く逝った。

こうして、僕らも含めてフェイト達は転校初日から保健室に世話になることになったのだった。

第四話（後書き）

姫路さんの手料理は相変わらずの殺人兵器…おそろく、シャマル共々これからもガンガン出てくるでしょう。

第五話（前書き）

あの惨劇から数日後……彼らは今。

第五話

「……雄二」

「なんだ、翔子？」

「……フェイトや吉井が進んでいるってこと、知っている？」

「ん？あー……そのことか。まあ、知っているが？」

「……私たちも、負けてられない」

「そうだな、明久の野郎はバカの癖に魔力ランクがあのでSSだもんな。俺らも負けてられない」

「……そうじゃない」

「それに他の連中もどいつもこいつもSランクだ。俺らも一応、Sランクとはいえ、あいつらの足を引っ張るようなことはできねえかな」

「……雄二」

「それに知ってるか、翔子？あのバカは『紅の魔剣』なんて異名まで持ってるんだぜ？あの能天気な面からは想像できない頭蓋が締め付けられええええ
！！！！」

「……雄二、重要なのはそこじゃない」

「いや、これから先のことだから重要だろうが……」

「……私が言いたいのはそのじゃない」

「あん？」

「……フェイトは、吉井の家に住んでいる」

「まあ、形としてはホームステイだがな。それがどうした？」

「……だから私も雄二の家に、ホームステイする」

「待て翔子、色々すっ飛ばしすぎだ」

「……問題ない。フェイトは普通に暮らしている」

「あれは学校公認だからだ！普通に高校生が同棲してるってのは、色々と問題があるんだよ！！」

「……大丈夫、問題は無い」

「あ？どういうことだ？」

「……なのはとはやて達は、普通に同棲している」

「性別を考えろ！あれは女の子同士だから免除されてるんだよ！！男女が一緒に暮らせるのなんて、色々と問題があるから学校が納得するわけねえだろうが！！！」

「……雄二は意地悪」

「俺は当たり前的事しか言ってるねえだろうが……」

「……でも吉井達は同棲してる」

「明久達のは色々と言があって、同居してるんだろ…多分だが……」

「……訳？」

「それがなんなのか解らないがな。そういえばあいつ、ロストロギアを体にかけていたって言ってたな……それが関係しているのか？」

「……違う」

「あ？なんでそう言い切れるんだよ」

「……フェイトは、リンディ艦長の義理の娘」

「だからなんだ？」

「……吉井は、その人と昔からの知り合いみたいだから……」

「……明久の奴、外堀を少しずつ埋められていってるのか…哀れな奴だ」

「……だから、私たちもやるべき」

「はっ？いや、だから無理だと言っててるだろうが！大体そんなん許可できるわけ……」

「……大丈夫」

「あ？」

「……お義母さんには、もう許可を貰っているから」

「お袋お

っっ……!!」

あの騒動から三日後。

土曜日に入り、学校が休みになった僕らは一時、故郷である地球から離れ、ミッドチルダに来ていた。別に遊びに来たというわけでは残念ながらも。ではなぜ地球から離れ、ここに来たのか？

それは僕らの戦力を把握したいからだ。

雄二や霧島さんの実力のデータは、手元にちゃんとあるけど、やっぱり実戦でしつかりと把握しておきたいと……その……シグナムとフェイトが言ったので、こうしてやってきたのでした。

ちなみに、万が一エネミーが出る可能性があるのです、なのはにヴィータ、シャマル、ザフィーラ、アルフは地球で待機しておいてもらっている。

エネミーとの戦闘は三日続く事もあれば、五日間パタリと音沙汰が無い時もある。油断はできないんだけど、その相手がいつ現れるのかまったくタイミングがつかめないのです、正直精神的に来るものがあったりする。

……話がずれたね。

今、僕達がいるのは模擬戦会場。

周りは巨大なビル群に囲まれ、いつでも模擬戦を始められるようになっているんだけど……。

「……………」

なぜかその会場でデバイスを展開して黒服に赤いスカーフを巻いたバトルジャケットを身に付けた僕と。

「~~~~~」

嬉しそうな表情で黒いバトルジャケットを身にまとったフェイトがいた……どうして、こんなことに……。

それは一時間前に遡る。

「うーん、クラナガンに来るのも久しぶりだなあ」

管理局員の制服を身に付けながら、僕はそう言って体を伸ばす。街並みは向こうとあまり変わらないけど、技術的にはこっちの方が上なんだよね。パソコンのキーボードは宙に浮いてるし、他の物だってかなり違ってている。僕らの世界から見ればフィクションの中だけの存在の近未来的な街並みに、少しだけ僕は興奮していた。

「はあ、やっぱりこっちの世界の技術はすごいよなあ……………」

「だな、向こうではまだまだ実現できないもんが多いが、こっちに

くればそれが当たり前前つてのが多いからな」

僕の言葉に管理局員の制服を着た雄二が同意していた。

やっぱり雄二も僕と同じように興奮しているみたいだ。男としては、多少なりともSFチックな近未来に憧れをもっているものだから、このミッドチルダの世界は、僕ら男子の理想郷とでも言えよう。

「二人とも、何をしている。時間は限られているのだから、早く目的地に向かうぞ」

雄二と話をしていたら、シグナムに呼び止められた。

そうだった…一応、こっちには仕事の一環で来ているんだった…
…やれやれ、まだまだ僕も公私の切り替えが出来てないみたいだ…
…。

「二人とも、早く行こうよ」

フェイトも呼んでいるので、僕は手を振って応え、急いで向かおうとしたんだけど…あれ？雄二と霧島さんがいない……辺りを見渡してみると…。

『……雄二、あのマンションはどう？』

『あ？何がだ』

『……将来の家として』

『……そうか』

『……うん』

『高そうだけど頑張れ。俺が住む家はもっと安そうな物件を検討してみるわ』

『……今のは、許せない』

『ぐがおおお　　！！待て！待て、翔子！！』

霧島さんの手が雄二の頭を鷲掴みにし、雄二は傍から見ても痛々しげな悲鳴を全力で上げている……道行く人はその光景にドン引きしていた。

どうしよう、もの凄くあの二人に関わっちゃいけないような気がするのは気のせいかな？

否。

これは一般的な観点から見ても、十分に正常的な判断だと僕は自分に言い聞かせ、そのままシグナムとフェイトとはやてのもとへと駆け出した。

『あ、明久！？てめえ、逃げ出してんじゃねえ！！おい！そこにいる思慮深さが感じられない顔をしているのは俺の連れだ！頼むから連れてきてくれ！！』

『……雄二、浮気は許さない』

『今の発言にどこをどう解釈すればその言葉が出て来るんだ……あがががが！さっさと助ける明久あ　　！！』

『！』

『……雄二、私達が暮らす物件を見に行こ』

そのまま霧島さんは雄二を連れてどこかへと行ってしまった。

『『』』……………『』』

まあ、近い未来確かにこつちで生活することになるんだろうけど……二人とも、今日こつちに來た理由解ってるのかなあ？

「吉井、先に行つてくれ」

そう言つてシグナムが騒ぎ続けている二人の元へと歩き出す。

「ごめん、シグナム…僕の悪友が、迷惑かけるね……」

「何、気にするな。今の私は管理局員であり、同時にお前達の教師でもあるのだ……担当の生徒を面倒見るのは当然の義務だ」

理解ある教師の言葉に僕は感動しながら、あそこで騒いでいるバカな悪友を任せることにした。遠くから『俺が悪いのか！？』と驚愕に満ちた叫び声が聞こえてきた気がするけど、とりあえずスルー！

「ありがとう、シグナム。それじゃあ先に行つて」

「なに、気にするな。後で私と一戦交えてくれるのならな」

「やっぱり悪友だからね！僕が二人を連れてくるよ！！」

わざわざ担任の手を煩わせるほどのことではないので、僕は笑顔で二人を追うとしたんだけど……………。

ガシッ！

なぜかフェイトに肩をガッチリと握られ、二人を追う事ができな

くなつた。

「あの、フェイト？」

「なに、明久？」

「僕…二人を追いかけないといけなただけど……」

「大丈夫だよ、シグナムがもう行ったから」

あら不思議。

さっきまですぐ近くにいたシグナムがもう既に雄二たちを追ってはるか遠くへ行っていた。

とりあえず、これで僕とシグナムの模擬戦は決まったも同然だった……うう、シグナムのレヴァンティンの炎は正直トラウマなんだよなあ……八年前、モロにくらってビルの壁に叩きつけられながら地面に落下していった記憶が蘇ってくる……。

「いやあ、なんかこつち来てもあのテンションってある意味尊敬できるわ」

「ですー」

そう言つて苦笑いを浮かべるはやてと…その隣で浮いている三十センチくらいの小さな少女はリンフォース？。通称リンだ。最初の自己紹介の時には見かけなかったけど、後々で聞いて驚いた。

どうやらまた、はやてのイタズラ心が発動したいみたいで、最近ではそれに慣れてきてしまっている自分がいて、微妙に複雑な気分です。

まあ、それは良いとして、現在僕はフェイトに手を握られて歩い

便利な場所だ。僕もここで何十体のガジェットと戦ったのを覚えている。

そして雄二と霧島さんの実力を測るために来たのに、なぜか僕とフェイトは目の前で対峙していた。

「さあ、明久。準備はいい？」

「うーん……………」

正直、あまり気が乗らない。

この前久しぶりに再会した昔馴染みと、それも女の子に剣を振るうなんて…なんというか、もの凄くやり辛いというか…まあ、向この僕になればそんな関係ないんだろうけど…でも…それでちよつと涙目になった感じも…って、何考えてるんだ僕は!?

まったく、そもそもあいつが霧島さんに拉致られなければフェイトと戦うなんてことには……………。

「なんだ、明久？お前らも模擬戦やるのか？」

「あ、雄二……………」

僕が心の中で愚痴ってたら、雄二と霧島さんがいつの間にかここに来ていた。まったく、ようやくここに来たか……………そうだ！この状況を利用しよう！

「ねえ、フェイト！今日は雄二と霧島さんの実力を測りにきたんだよね？」

「そうだけど？」

「うんうん、だったら」

『だったら2対2の模擬戦を行えばええんとちゃう？』

はやてえ
っ!!!

なんてことを！せっかくフェイトと模擬戦をやらないうちに配慮しようと思ってたのに
！！なんて思ってたらはやてから念話がかかってきた。

「あー…アキ君、悪いんやけど…フェイトちゃんと模擬戦やってくれへん？」

「(なんで?)」

「(フェイトちゃん、どうもシグナムと同類になってきつつあるんや……)」

なんて悲しいことなんだ……八年という歳月は、人を変えてしまふには充分すぎる年月なのだと、僕はこの時学んだ。

「(せやけど…フェイトちゃん、アキ君と模擬戦をするの楽しみやったみたいやから……)」

「(……)」

僕との模擬戦が楽しみ、か。

やれやれ、できるのならもっと違うものを楽しみにして欲しかったよ……。
でも。

「（解ったよ）」

その言葉で、僕の迷いは消えた。
だって楽しみにしていたって言うのなら、それを無下に断るのなんてできないもんね。

「フェイト、本気で行くよ？」

「うん！望むところだよ！霧島さん、準備はいい？」

「……問題ない、いつでもいける」

そう言っつて紺色のバリアジャケットを身に付ける。その後霧島さんの手には、西洋の騎士が馬上で使う長大なランスが握られていた。先端の方は薄くなっていて、突くだけでなく、斬るという戦い方も可能なデバイスだった。

「……ゲイヴォルク、準備はいい？」

『yes・my load』

デバイス特有の機械音声を確認すると、霧島さんは長大なランスを軽々と片手で振るう。その後、三角形の魔法陣が浮かび上がった……以外にも、霧島さんはベルカ式の魔導師みいだ。

「雄二、戦闘態勢！！」

「解ってる…戦^やるぞ、イージス！！」

『了解です、坊ちゃん！』

雄二の言葉にデバイスが応え、雄二の体が光に包まれ……………ん？

『坊ちゃん！？』

「……………」

赤を基調としたバリアジャケットを身に付けた雄二が、なんとも言えない複雑そうな表情をしている。それより今…なんか雄二なんかには大変似つかわしくない単語が出たような気がするんだけど…。

『どうしたんですか？皆さん』

「あ……イージス、少しだなあ……………」

『はい、何でしょうか坊ちゃん？』

「それ言つの、止める」

『無理です、坊ちゃんは坊ちゃんですから』

「……………はあ」

雄二がなんだか疲れた表情でトンファアを握っていた。

僕は雄二の手に握られている武器を見て、思わず意外だな、と思つた。

トンファアは制圧と無力化に特化した武器で、攻撃方面というよりは、むしろ防御に特化している武器だ。僕の知り合いにも、トンファアタイプのデバイスを扱う人がいたけど、まさか雄二もトンファ

ーを使うなんて……。

「雄二ってトンファーを扱ったね」

「ん？ああ、色々試してみたんだが……こいつが一番しっくりきてな」

「へえ……雄二って、見た目攻撃専門って感じだから防御の方なんて考えてないと思ってたのに……」

地球じゃ『悪鬼羅刹』なんて異名をつけられるぐらいだから、僕は攻撃に特化している武器を選ぶと思っていたから、トンファーなんて武器を雄二が使うなんて、と内心驚いていたら……。

「……翔子から身を守るために必要だったからな……」

「……………」

あら不思議。さつきまで意外でしょうがなかったのに、今の一言であつという間に納得できてしまった。

見ると、フェイトも苦笑いをしながら目を逸らしていた。多分、この様子を見ているはやてやリイン、シグナムも僕と同じ心境なのだろう。

気まずい、なんだかも凄く気まずいぞ……。

「……………」

霧島さんはみんながなぜ黙っているのか解っていないみたいだ。いや、原因は一応君にあるんだけど……でもそれを言うのもなんだかなあ……。

なぜか模擬戦を始める前に一気に脱力してしまっている僕らだっ

た。

『ぼ、坊ちゃん！大丈夫です！！坊ちゃんの身は、私が守りますからー！ー！』

「それ止める、イージス」

さつきからちよいちよい入る雄二のデバイス、イージスの坊ちゃん発言。これもやる気を下げ要因になっているんだよね……。いやだつて、雄二が『坊ちゃん』だよ？

もの凄く似合わないから、普段なら大笑いするところなんだけど………なんとか、やる気に拍車がかかっている時にやられると、一気に脱力する。

「………なんか、すまん」

雄二も自分のデバイスのせいなのは解っているみたいで、疲れた表情でため息を吐いていた。まずい、このままじゃ今日は解散という可能性もある。

僕らは、雄二と霧島さんの実力を測るためにわざわざミッドまで来ているんだから、ここで何もしないで帰るなんて………というのはさすがにできない。

『あー、みんな？私からいい案があるんやけど？』

スピーカーからはやての言葉が漏れる。

ナイスはやて！なんとしてもこの状況を打開できる案を

『今回の模擬戦、勝った方が負けた方に好きな命令を一つできる！
っていうのはどうやる？』

.....。

あれ？なんかデジャブ？い、いや…これはほんの少し前にFクラスとAクラスの試召戦争であったような……。
というか、はやて！なんだその罰ゲームみたいな提案は！？いや、間違っではないけど、そんなもので僕らがやる気を見せると……
…っつて、うおおおお！??

突然背筋に凄まじい寒気を感じ、僕は驚いて飛びのいた。

「……フェイト」

「霧島さん…ううん、翔子！」

「「頑張りましょう！！」」

向こうではフェイトと霧島さんが、傍から見ても解るぐらいのものの凄いやる気を見せていた。

目の錯覚なのか、二人の目が光を放っているように見えるぞ……。

「明久！この勝負、何が何でも勝つぞ！！」

「ゆ、雄二！？どうしたの、急に！？」

隣では先ほどとは打って変わって凄まじいやる気を見せている雄二がいた。

「この勝負…負けたら確実に俺の人生を一生左右する事になる！だ

からお前も全力を出せ！なんとしてもこの勝負、勝つー！」

おお、ここまでやる気を見せている雄二を見るのは試召戦争以来だ。というか、試召戦争以上のやる気を見せてない？あと、冷や汗もの凄いよ？

とはいえ、僕もそれなりにやる気にはなっていた。

自分が罰ゲームを受けたくないのもあるし、それに……………。

「雄二、もし勝ったらどうするの？」

「翔子に一ヶ月…いや、半月…一週間…三日……………一日でもい
いから、俺の家に来るなという！」

今、もの凄く譲歩してなかった？

というか、さっきからの凄く冷や汗をかいているけど、その汗は一体どうしたの？

「……………翔子にさっきのことを伝えて半殺しにされる自分が想像で
きたんでな……………」

「なるほど、よく解ったよ」

こいつは本当に苦労している。

「ちなみに、半月では上半身の皮膚をはがされ、一週間では脳が圧
迫されるぐらいの握力でアイアンクローをかけられ、三日だと腕間
接の大半を外され、一日だと五指を外すだけでなんとかなると思っ
た」

「まあ、それくらいが妥当だろうね」

美波や姫路さん辺りで仮定しても、それくらいがベターだと思う。
さてと、もしも僕が勝ったらフェイトにないを頼もうかな……

「……………（じゅるり）」

「おい、明久！なにを想像してるんだ！？」

「はっ！僕は何を！？」

雄二に言われ、僕は意識を取り戻す。

あ、危なかった…危うく夢の世界にトリップするところだったよ。

「お前は何を想像していたんだよ……………」

「えっ？い、いや！別にムチと縄…なんでもないよ！！！」

「おい！今一瞬、聞き逃してはいけないような単語を耳にしたぞ！
というか、お前ってそういう趣味だったのか！？」

「べ、別に普通だよ！うん！！！」

「ムチと縄で何かするのが普通なわけあるか！！お前とは一年来の
付き合いだが、今の言葉には正直引いたぞ！！！」

うつ…さすがに悪鬼羅刹と呼ばれた雄二も僕のあれはちょっと引
くか……やっぱり世間一般ではこの趣味はあまり良心的ではないみ
たいだ。

……………つて、あれ？

「ねえ、雄二……フェイト、鼻血を流してない？」

「あつ？何を言ってる……」

僕の指を指す方向、霧島さんの隣ではムッツリーニみたいにフェイトが鼻血を流していた……な、なんか足元に血溜まりできてない！？

「え、えへへ……あ、明久を好きに……あつ、ダメだよ明久。好きにするのは私なんだから……ああ、でも……明久あ……あつ、うう……え、えへへへ」

「……フェイト、大丈夫？」

霧島さんが鼻血を流しているフェイトに近づいてそう言うけど、フェイトは鼻血を流したまま、もの凄い幸せそうな表情のまま固まっていた。気のせいかな、手に持っているバルディッシュが冷や汗を流しているように見える。

……フェイトが僕らの世界に戻ってくるのは、それから十分近く過ぎた後だった。

ムッツリーニにいつもやってあげている輸血をフェイトに済ませようやく僕と雄二VSフェイトと霧島さんの戦いが始まったのだ。た。

というかフェイト、一体何を想像したの？

第五話（後書き）

次回、明久&雄二VSフェイト&霧島の熱いバトルが始まる！！
一人は楽しみにしてきた事を叶えるために、一人は彼女の想いに応えるために、一人は長年抱いてきた願いを叶えるために、一人は人生の危機を感じながらそれを回避するために……様々な思いが、今……炸裂する！

『……………模擬戦、開始』

『って、なんで君がいるの—————!??』

『……………それは次回のお楽しみ』

第六話（前書き）

意外な奴が登場。 明久&雄二VSフェイト&霧島戦です！

第六話

『レディー……ゴー!』

はやての合図と共に模擬戦が開始した。

「翔子!」

「……了解」

フェイトの言葉を合図に二人がこちらに向かって走ってくる。

フェイトと霧島さんは、今回初めてコンビを組んだはずだ。なら最初は僕達を分断して、一対一の状況にして攻めてくるはず。それならば!!

「（雄二、きつと二人は……）」

「（ああ、おそらく俺達を分断しようとするはずだ……）」

やはり雄二と僕の予想は同じみたいだ。

そうなる……おそらく次も僕と同じ考えに違いない。

「（なら俺達はあっちにあってこっちにないものを使えば言いだけの話だ!……）」

彼女達に無くて僕たちにあるもの。

それはコンビネーション。

魔法を使つての戦いは初めての僕らだけど、こいつとは幾度と無く本物の死線を潜り抜けてきた。僕らのコンビネーション……見せ

てあげるよ。

「行くよ、フェイト！」

「来い！翔子！！」

「……言われなくても」

「勝負だよ、二人とも！」

僕らとフェイト達の距離がどんどん縮まっていく。僕らはそれを冷静に見ながら、タイミングを計る。

後三秒、二秒、一秒……今だ！

「雄二！」

「明久！」

来るべき時は来た！僕らは目で合図すると同時に

「ここは任せた！！」

告げると同時にバックステップ。

霧島さんの実力を測るために、雄二、この場は耐えてくれよ……つて！

「雄二！お互いに相手に任せてどうするのさ！！」

「いや、ここは明らかにお前の出番だろ！俺はこの場では翔子として戦った事がないんだぞ！？」

「それを言うなら、僕だってこの場ではフェイトとしか戦ったことが無いよ！！」

「このバカが！今重要なことは、相手の実力を測る事だろ！！」

「解ってる！だからそのトンファーを使って僕の盾になってよ！その間に僕が霧島さんの実力を測るから！」

「いいや、お前が体張って盾になれ！俺はその間に態勢を立て直し、じっくりとテストアロツサの実力を測る！！」

「誰が相方を平然と捨て駒にするお前なんかの盾になるものか！！」

「その台詞そっくりお前に返してやる！！」

「言ったな！？上等だ！表出る！！」

「はっ、バカが！返り討ちにしてやる！！」

僕は雄二に一気に接近して鞘から刃を抜刀、雄二に剣閃を放つが、雄二はトンファーを使ってそれを防ぐ。その後、雄二はパンチの応用でトンファーを放ち、僕は体を捻ってその一撃を避ける。

「やるな、明久…だがこいつならどうだ！イージス！カートリッジロード！！」

『…… explosion』

ため息混じりのような機械音声がデバイスから響くと、トンファ

ーの一部がスライドし、そこからガシャンという撃鉄音と一緒に薬莢が蒸気と一緒に放出される。

魔力を跳ね上がらせるカートリッジシステム…やっぱり雄二も持っていたのか。僕はとっさに危険を察知して雄二から離れる…瞬間、雄二がニヤリと笑った!?

「短慮だぜ、明久!」

『arrow form』

嫌な笑みを浮かべたまま、雄二は両手に持ったトンファアのグリップをレバーみたいに前へと動かし、そのままグリップの先端同士をくっ付ける。

それによつて現れたものは、機械で出来た…弓。

雄二の前にミッド式の魔法陣が展開される。同時に僕は自分のミスに気付いて舌打ちした。とっさだったとは言え、雄二が遠距離系統の魔法を使うとは考えも…いや、そもそも戦闘に余計な先入観と固定観念を用いた事自体間違いだつた。

見た目とは裏腹に雄二はかなりの知将だ。

試召戦争で味方を状況に応じて正確に動かす将の役割を持っているあいつのことだ…遠距離攻撃を使ってくることだ…ってあり得るのに、そのことを一切考慮しなかつた。

完全に僕のミスだ。

「つくそ!」

悪態を吐きながら僕は態勢を立て直そうとするが、その前に雄二は青い魔力で出来た矢を手に持ち、同じように魔力で出来た弓弦ゆみづなに指をかけ、矢を僕に向かって放っていた。

が分断し、そこから銃口が顔を出す。
同時に『俺』は周囲に魔力の弾丸を形成し、双銃を向かってくる矢
に向かつて構える。

「クリムゾン・バスター！！」

ドドドドドッ！！紅い弾丸が一斉掃射される。

同時にトリガーを何度も絞る。

反動と共に、銃口から魔力で出来た弾丸が放たれ、俺に向かつて
迫ってくる青い矢に放つ。

ドン！！という爆発音の後、三つの青い矢と複数の紅い弾丸が相
殺される。

ふう、と一息吐くと俺は地面に降り立ち、雄二を見てニヤリと笑
う。

「よう、こっちの俺は初めてだよな、雄二？」

俺の言葉に、雄二が目を大きく見開いて俺を凝視していた。さす
がの雄二も、今の俺の姿を見れば驚くのは当然、か。

「お前…明久、なのか？」

訝しげに俺を見る雄二。

まあ、大抵の奴は初めて俺を見るとそついった顔になるがな…。

「ああ…そつだ」

ニヤリと笑みを浮かべ、俺は告げる。

「俺は吉井明久のもう一つの人格だ」

「なんだと!？」

俺の言葉に、雄二が驚愕する…まあ、当然の反応だろう。

「…嘘って訳じゃなさそうだな…さっきまでと普段ぜんぜん雰囲気
が違う……」

「だろうな…まあ、こっちの俺になるのにはちょっとした条件があ
んだよ」

「条件だと?」

「俺の人格が変わるのは『鞘から剣が抜かれた時』なんだよ。居合
いをベースに使ってんのは、戦闘中に性格が変わって味方が動揺す
るのを防ぐためだ」

まあ、居合いをベースにしているのはそれだけじゃないがな。と
付け加えた後、俺はデバイスを構え、不適に笑った時だった。
スピーカーからはやて達の声が漏れてきたのが耳に入った。

『驚きですう、明久さんの雰囲気ガラッと変わりましたですう』

『リインは初めて見るんやったな。あれはアキ君のもう一つの人格、
通称『抜刀』モードや!』

『……………そのまんま過ぎる気がする』

『細かい事気にしたら負けやで、康太君』

とスピーカーからもの凄く聞き覚えのある声が……って！

「「なんでここにムツツリーニがいるんだよ！」「」

俺と雄二は全力でスピーカーに向かってつつこむ。本当になんでお前がここにいるんだよ！？」

『……俺も、一応魔導師』

「マジで！??」

ぜんぜん聞いてないぞ！?というか、なんで俺の身近には魔導師が三人もいるんだよ！

『……情報を集めるのに必死だったから、挨拶にいけなかった』

「情報？何か手に入れたのか、ムツツリーニ？」

ムツツリーニの言葉に、俺は僅かばかりに期待のこもった声でムツツリーニに尋ねる。ムツツリーニの情報収集能力は並大抵のものではない。普段はエロ方面にしか使われてないけど、その能力は様々な面で役に立つはずだ。

『……今のところは、何も』

「……そ、そうか……雄二、お前……ムツツリーニが魔導師だったって

ことは？」

「一応は知っていた……というか、今回の件にはムツツリーニは関わらないと聞いていたんだが……」

確かにそうだ。

俺の家に集まったとき、二人ほど加勢に来る、と聞いたのを俺は覚えている。それなのにそこにさらに増援？一体どういうことだ？

『……………俺が志願した。おそらく、俺の力が必要になるだろうか』

「…ムツツリーニ」

今の言葉には正直、かなり感動した。

ありがとう、ムツツリーニ……………これからよろしく頼むぜ。

「さてと、話がまとまったところで……………始めようぜ、雄二」

「…そうだな…なんか今のお前となら結構ウマが合いそうだな」

そう言ってニヤリと笑いながら俺と同じようにデバイスを構える悪友。

「そいつは同感だな」

たしかにこっちの俺なら雄二とは気が合いそうだな。
自然と頬が緩む。

俺達は互いに睨み合いながら…笑っていた。

「言つとくが雄二、こっちの俺は容赦つてもものを知らねえぜ」

「そりゃ面白え。俺も容赦つてもものを知らねえからな」

拳銃ガンズモードから切り替え、剣の状態に切り替えると、柄の先端を
接合させる。出来上がったのは長い柄の両端に刀身を持つ剣…ダブ
ルセイバー。

本当なら刀の方が使いやすいんだが…またあの矢を放たれるかも
しれねえから、こっちで対応するしかない。

「行くぜ、雄二!!」

「ああ、上等だ!!」

俺達は同時に大地を蹴り、一気に肉薄すると互いの獲物を打ち合
わせ始める。

槍を使う要領で刃を突き出す。刃はトンファーで受け流されるが、
すかさず柄を回転させ、もう一つの刃を前方に押し出す。だが雄二
は俺が次々と繰り出す剣戟をトンファーで防ぎ、弾き、受け流し、
そして反撃を仕掛けてくる。ちっ、やっぱ強えな。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお!!!!!!」

なんてやっている時だった。

「……バルディッシュ」

『Plasma Lancer』

「……ゲイヴォルク」

『stab freeze』

「ファイヤ！」

「……ファイヤ！」

「あゝ」

トトトトトトトトトトトツツッ！俺達がバカをやっている間に、
フェイトから槍状の閃光が、霧島から氷の槍が投擲された。

その瞬間、俺のフォルトと雄二のイージスが光りだす。

『protection』

慣れ親しんだ機械音声と共に、俺達の目の前に紅い障壁と、青い障壁が目の前に展開される。金色の閃光と、氷の槍が障壁に激突し、数秒の均衡の後、彼女達の魔法が弾き飛ばされる。

「フォルト!？」

「イージス!？」

『二人とも、喧嘩は後にして下さい』

『そうですね、今は戦いに集中してください……でなきゃ坊ちゃんの人生は……』

「よしやるぞ、明久！防御は俺に任せろ！！」

「へっ？あ、ああ……」

イージスの言葉を聞いた瞬間、雄二は冷や汗を流してトンファーを構える。……そう言えば賭けをしたの、すっかり忘れてたな。

……まあ、その前に色々あったから仕方ないとは思うけど。

二人の魔法を防ぎきったバリアーは消滅し、俺達は前へ駆け出す。

「（雄二、フェイトはスピードと攻撃に特化している戦いをするぜ）」

「（翔子も似たようなものだが、あいつの攻撃方法は厄介だ。テスタロッサの攻撃を防ぎつつ、翔子を先に潰すぞ）」

霧島の攻撃が厄介？

それは一体どういうことだ、と雄二に尋ねようとしたが…その前に霧島が先にアクションを起こした。

「……ゲイヴォルク、カートリッジロード」

『explosion』

西洋ランスの柄から葉莖が発射される。その行動に、次の霧島の攻撃に備えて俺は身構える。

「……吹きすさぶ雪」

凜、と霧島が俺達の故郷である地球の、それも日本の歌謡を口に

する…西洋ランスを手にとって日本の歌謡を歌うのはなんとというか
アンバランスだよなあ…と苦笑してしまったが、近くにいた雄二が
慌てた口調で俺に向かって怒鳴り散らしてきた。

「バカ野郎！早くその歌を止める！！」

「は？」

いきなり何を　　と　　思　　つ　　て　　俺　　は　　ハ　　ッ　　と　　し　　た　　。

今は模擬戦の真つ最中。

この状況で戦闘に無駄な行動をする人間などいない。……さっきま
でお前らやってたじゃないか、という言葉は無しな。頼むから。

慌てて俺は銃口を霧島に向けるが、気付いたときには遅かった。

霧島はゆつくりと槍の先端を

「……安楽に導くは刹那の軌跡か」

『blizzard parade』

ゴツツツツ！！空気が爆ぜる音と共に、霧島が…こちらに向か
つて突撃してきた。しかも、霧島が手に持つ槍の表面に氷が纏わり
つき、ただでさえ大きな槍がさらに巨大になっていた。その状態で
霧島は俺たちに向かって突進してきた。

「なんだそりゃ！？」

思わずツツコミを入れてしまったが、目の前に迫ってくる巨大な
氷柱から逃げようと俺はとっさに空中へと逃げる。霧島の突進攻撃
はそのまま俺の真下を通過していくが、あれだけ巨大な氷柱が間近
に迫っていく様は、俺に恐怖を覚えさせるのに充分だった。

なんだあの滅茶苦茶な魔法は！？などと口中で叫ぶが、危機が去った事に内心少しだけ安堵していた……が。

「後ろだ！早く避ける！！」

「は？……のわっ！！」

『 protection 』

雄二に叱咤され、俺はとっさに障壁を目の前に展開させる。

瞬間、障壁に巨大な氷の槍が突っ込んできた。

「ぐっ……」

ひやりとした感覚が体に満ちる。後数秒遅かったら確実にやられていた。

内心、恐怖を感じつつ、なんとかそれに耐える俺だったが、目の前の紅い障壁と拮抗している巨大な氷の槍の持ち主である霧島は無表情のままだった。……むしろそっちの方に俺は恐怖を感じた。

しかし同時に違和感も覚えた。

先ほど、俺は確かに今の一撃を回避したはず。ならば、どこかで激突音が聞こえてもおかしくは無いはずだ。それなのに、霧島はそんな音を立てた様子も無く、俺に向かって攻撃を仕掛けていた。一体どういうことだ？まさか方向変換でもしたっていいのか？

だがそんな暢気なことなど考えていられる状況ではなかった。俺の障壁に少しずつだが亀裂が入り始めた。このままでは後数秒も経たないうちに砕け散るだろう。

「くっ！フォルト！！」

障壁を消し、高速移動魔法を使って槍からなんとか逃れる。

だがやはり少し無謀だったようだ。いくら高速で移動する魔法とはいえ、至近距離から高速で突っ込んで来る物体から逃れるのは少し無理があったようだ。槍がかすった左腕を押さえて顔をしかめる。掠っただけでこの威力か…いくら非殺傷設定があるといっても、まともにくれば内臓がいかれる可能性があるぞ。

霧島がフェイトの隣で停止し、その場に留まる。おそらくは今の魔法を説明しているところだろう…調度いい、この間に雄二とも少し作戦を練っておくか。

「明久」

俺の安否を気にしてか、雄二が空中に飛んできて俺から二メートル程離れた位置で停止する。

「大丈夫だ…っていうか、霧島のあれは何だ？」

「あれは翔子の得意魔法、ブリザード・パレードだ…あいつは氷の魔力変換を持っててな、そいつを使った魔法だ」

ブリザード・パレード…吹雪の行進、か。

猛スピードで突っ込んでくる長大な氷の槍の一撃…くらったら確実にアウトだな。

さらに雄二は続ける。

「更に相手に攻撃を避けられた時、あいつは空中に氷の道を生み出して、その上を滑って方向変換もしてくるようにしている」

成る程な。俺がさっきの一撃を受けそうになった理由はそこか。しかし空気中に氷を生成してその上を滑って体を反転させるなんて無茶な上に肉体的負担もでかいはずだ…それをやってのける霧島は化け物か？

「対抗策は無いのか？」

俺は今日が霧島との初戦闘だから、あいつの魔法に関して知識はほとんど無い。そうなる唯一知識がある雄二に頼るしかない。

「三秒でもいい、あいつの突進が止まる隙を生み出せないか？」

「出せる」

そう、平然と雄二は言ってきた。

ニヤリと笑みを浮かべながら雄二は堂々と宣言した。

「俺なら、あいつの動きを止めることが出来るぜ」

「…そうか、なら俺は必ず霧島を仕留める!」

そして俺達はその作戦を念話で簡潔に決める。異端審問会の連中から逃げ延びるには、土壇場でこのくらいのスピードで作戦をまとめるくらいしないと生き残ることはできないからな。

時間にしてわずか三十秒。

それだけで俺達の作戦は決まった。

「頼むぜ、相棒」

「おう！」

告げると同時に俺達は動き出した。

雄二が戦闘を走り、俺がその後に行く。

先ほどの喧嘩で、雄二との戦闘能力は大体把握できた…結果、俺は雄二よりも素早く動けることが解った…とはいえ、一撃の強さなら向こうの方が上だけど……。

「来たぞ、明久！」

雄二の言葉どおり、俺達の前方から金色の魔力弾が俺達に向かって飛んできていた。俺は今までダブルセイバーだったデバイスを元の状態…つまり、刀と鞘の状態に戻す。

「モード・ダークリパルサー！」

『dark repulsor』

機械音声と共に、デバイスが双刃剣から刀と鞘に変形する。確認すると、俺は刀身を鞘に収める。

そして…『僕』は速度を速めて一気に金色の魔力弾に向かって飛ぶ。

「だあああああああああああああああ！！！」

刀に魔力を込め、僕は魔力弾に向かって抜刀する。剣が魔力弾に触れた瞬間。

パン！という甲高い音を立てて魔力弾が霧散する。

続けざまに僕は次々と放たれてくる魔力弾を打ち消していく。

これが僕の真骨頂。AMとは違う、純粹に魔力そのものを打ち消すことが出来る僕のレアスキル『破邪』の力。この力を扱うのは、刀が必ず必要になる。その理由は、刀には魔を祓う力があると伝えられているのに関係しているらしい…詳しくは解らないけど。

刀に魔力を送ると、刀身は破邪の力を手に入れ、魔力で作られた様々なものを切断する…といっても、実際に断ち切るには僕の腕次第なんだけどね。まだまだ剣士として未熟だから、強い魔法　スターライトブレイカーとか　は拮抗するのが限界だし、霧島さんのようなベルカ式の魔法は純粹な実力勝負になってしまうから、こちらが打ち負かされてしまうことだってある。

「だあああらっしやあああああああ!!!」

最後の一つを切断し、僕らは一気にフェイト達に向かって接近するが、その前に……。

「blizzard parade」

ゴツツッ!!再び爆発音が響き渡り、霧島さんが僕らに向かって特攻してくる。

先ほどの攻撃はおそらく時間稼ぎ。霧島さんのあの魔法は発動までそれなりに時間がかかるから、それを埋めるためにフェイトが放ったものなのだろう。……なんて考えているうちに、霧島さんが僕らとの距離を詰めてくる。

この一撃も僕の『破邪』で防げればいいんだろうけど…そんなことをすれば確実に僕の腕が悲惨な末路を迎える事になるだろう。

…それに、この魔法に対抗するのは僕じゃない。

「雄二!!!」

「イージス！！カートリッジロード！！！」

『explosion』

雄二のトンファーから葉莢が飛び出し、雄二の魔力が一時的に跳ね上がると同時に、雄二は前に躍り出てトンファーを構える。

「アイギス・ウォール！！！」

雄二が叫んだ瞬間、雄二の前に壁のように巨大な魔力で形成された盾が現れる。見た目だけでも、充分堅そうないメージがあるその盾は、霧島さんの槍の一撃を真正面から受け止める。

ゴガガガガガガッツツ！！！！凄まじい激突音が響き渡る。二人の魔力が拮抗しているのだろう。青と紺色の二つの魔力が辺りを照らす。

雄二と霧島さんは、いつもこの魔法で勝敗を決めているらしい……防ぎきれば雄二の勝ち。貫けば、霧島さんの勝ち。どちらが勝つかは二人の運と実力次第の大勝負……正直に言つと、悪友として見届けてやりたいけど……。

「行け！明久あ！！！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

雄二に背中を押され、僕はフェイトに向かって一気に飛翔する。

辺りが二人の膨大な魔力によって目隠しされているせいか、フェイトは僕の接近に一瞬だけ反応が遅れる。

「フォルト!!」

『explosion』

僕はカートリッジをロードすると、フェイトの前…十数メートルぐらい離れた位置で停止した。

フェイトは僕の行動に、首を傾げる。

「…どういづつもり、明久？」

警戒を含んだフェイトの言葉。

まあ、今のは確かに上手くいけばフェイトを確実に倒せたかもしれないチャンスだ。それをわざわざ棒に振って、僕は一つの提案を出す。

「フェイト、僕と決闘スタイルで勝負してほしい」

「…決闘スタイル？」

「うん」

頷くと僕は先ほど飛ばした後に、キャッチしておいた薬莢をフェイトに見せる。

「これを弾いて地面に落ちた瞬間スタート。お互いの最強魔法を放ってどちらかの魔法が相手の魔法を打ち破ったら勝ち、っていう一発勝負」

僕の言葉にフェイトは一瞬だけ、ポカンと間の抜けた顔をする。

その後若干呆れが入ったような口調でフェイトは口を開いた。

「明久…本当にどういづつもり？」

そう言っただけで今度はジト目で僕を見るフェイト。

さすがに本当の意味を言っわけにはいかない。……なんといつか、もの凄くこっ恥ずかしいから。

「ただの気まぐれだよ」

「嘘でしょ」

『嘘やな』

『嘘ですー』

フェイトだけでなく、僕らの様子を見ているはやてやリンにまであっさりと言破される。さすが昔馴染み。八年経っても僕の事をよく解ってるみたいだ……なんかこれ以上言い訳を続けても無駄っぽいし、ここは正直に白状した方がいいかもしれない。念話ではやてに聞こえないようにして、フェイトに語りかける。

「（実は…その……）」

「（？）」

うっ、なんか顔が熱くなってきたぞ…でも言わないとなあ……。

「（その…フェイトに向かって剣を振りたくないっていうか…その、斬りたくないっていうか……）」

「え？」

「そ、その…模擬戦だったのは解ってるんだけど、それでも…その…僕は…フェイトを傷つけない。だから、今回だけでいいから、お願い」

「明久……………」

頬を染めたフェイトが嬉しそうに…本当に心の底から嬉しそうな笑顔を浮かべる。なんていうか、さっきまでちゃんと模擬戦をやるぞ！と思ってたんだけど、いざフェイトに向かって剣を振ろうとしても、どうしても躊躇ってしまうんだよね……………。

いつかは慣れないといけないんだろうけど（それも嫌だけど）、せめて今回だけはこの決闘スタイルで勝負を決めたかった。

『……………やれやれ、アキ君らしい理由やなあ』

「うわっ！？はやて！？？」

突然スピーカーから漏れてきたはやての言葉に、僕は心底驚いた。なんで知ってるの！？

「明久、途中から念話で言っの忘れてるんだよ」

「げっ！？」

えっ！？何それ！？？それじゃあ僕はその恥ずかしい台詞をよりにもよってあのイタズラ好きはやての前で堂々と言っちゃった訳！？うわあ、最悪だ！！絶対にいじられまくる！！

第六話（後書き）

レアスキル『破邪』

生まれながらに明久のが持つ能力。刀があれば、そこに魔力を送り込めば、全ての魔法を打ち消すことが出来る。しかし、魔法を断ち切れるかどうかは、明久の剣の実力次第になる。

もしかしたら次回から霧島雄二になっているかもしれないね。

「なつてたまるかあああああああああああ！！！！by悪鬼羅刹」

第七話（前編）（前書き）

日曜日編、前編です。

第七話（前編）

バカテスト・英語

以下の英文を和訳してください。

I'm fond of crime novels!

フェイト・T・ハラオウンの答え

『私はミステリー小説の大ファンです』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『私は推理小説の大ファンです！ ちなみに僕はホームズが好きです。特にボヘミアの醜聞や恐怖の谷や踊る人形……』

教師のコメント

正解ですが、裏面までびっしりとコナン・ドイルの作品のタイトルを書かなくても良かったと思います。吉井君は最近少しずつ成績が伸びてきているので、大変いい傾向だと思います。

ちなみに私は最初の作品、緋色の研究が好きです。

土屋康太の答え

『
』

教師のコメント

鼻血で回答がまったく見えませんが、君が何を想像したのかは容易に想像できます。

初夏が近づいてきた今日この頃。

今日は日曜日。全国の学生は基本的に休みの日の朝、日差しを浴びながら『俺』こと吉井明久は少しばかり緊張していた。

ん？僕の方じゃないのか、って？

その理由を説明するには、昨日の事に振り返らなければならない。

〈回想〉

『デート？』

『うん、翔子と話し合って、それにしようって決めたんだ』

携帯電話から聞こえるフェイトの声に、僕は首を傾げる。

霧島さんに思いつきりぶっ飛ばされた後、一分ぐらい気を失っていた僕だったけど、目を覚ました後に、シグナムとの模擬戦が待っていて、肉体的にも精神的にもボロボロの状態のまま、僕らは家に帰宅した。

しかしなぜかフェイトは僕の家に帰らず、『今日ははやての家に

泊まる』といって、僕は首を傾げながら、それがなんなのか解らないまま、アルフと二人で夕飯を済まし、いざ寝ようとした時にフェイトから電話がかかってきた。

内容は例の模擬戦の罰ゲーム。

どちらかが勝つたら、負けた方に好きな事を一つだけ命令できるという条件を賭け、僕らは戦ったんだけど、結果は奮闘空しく僕らの敗北。

そのことを知った雄二は『嫌だ…婿入りは嫌だ…嫌だああ!!』と半ば発狂しかけ、そのまま窓からダイブしそうだったので、慌てて懐に護身用として忍ばせているスタンガンで雄二の意識を絶つこととでなんとか事なきを得た。

「それって…明日?」

『そうだよ、集合場所は…えっと、ラ・ペデイス…だっけ?その前で待ち合わせだよ』

「それはいいけど……だったら同じ家から出た方が良かったんじゃないの?僕ら一緒に住んでるんだからさ」

同棲…もとい、ホームステイしている訳なんだから、わざわざ違う場所から向かう必要なんてあるのかなあ?と思っただら、電話の向こう側から可愛らしい笑い声が聞こえてくる。

『ふふつ、解ってないなあ、明久は』

「えっ?」

どづいどづいと?

『デートでね、待ち合わせは大事なものなんだよ。』

待ち合わせが大事なもの…そういうもののかなあ？

でもフエイトが大事だというのだから、きつとそうなんだろう…

あつ、だから今日はわざわざはやての家に泊まりに行ってるのか。

デート…か。

姫路さんや美波と三人で出かけた時はある。けど、あれをデートといえるのかどうかは解らないんだよなあ…途中から清水さんが乱入して滅茶苦茶になって、なぜか僕は女装する羽目になったし、鉄人にはなんか変な誤解をされそうになっちゃったし…。

…やめよう。これ以上考えているとあの時の苦勞が蘇ってくる…。

『それじゃね、明日だよ』

「あつ、うん」

通話が切れ、電子音がスピーカーから鳴り響く。携帯を充電器にセットしてからベッドの上に横になり、今日のことを少し振り返ってみる。

なのは達の報告によると、今日エネミーは出なかったみたいだ。

それはいいことなんだけど、夜中に出てくる可能性が無いとはいえないから、僕の睡眠は基本的に浅いものだった。いつあいつらが出てくるか解らないから、正直結構キツイ日々だったなあ…けれど最近は少しだけどゆつくりとした睡眠をとれる日がある。

それはなのは達が来たおかげでもあるから、交代制になってからというもの、肉体的にも精神的にもかなり楽になったから、正直に言えばかなり感謝している。

「あれ？」

ふと僕はさっきのフェイトとの会話を思い出した。
フェイト、待ち合わせの時間…伝えてないような……。
僕の疑問に答えるように携帯が鳴り響いてきた。電話の着信音が
若干ながら慌てたような音だったのは、多分気のせいじゃないと思
う。

フェイトサイド

「じゃ、じゃあ、待ち合わせの時間は十時半だよ」

息を切らせながら、私は明久に待ち合わせの時刻を伝える。あ、
危なかった…危つく待ち合わせの時間を伝えずに眠るところだった
……。

『了解。次からは忘れないようにね』

「あう……」

明久の言葉に私は思わず言葉を詰まらせてしまった。
うう、私ってばいくら明久との初デートだからといって少し浮か
れすぎてたかも……。

『それじゃあね、フェイト。明日は楽しみにしてるよ』

「うん！」

通話を切り、はやてが用意してくれた布団の上に横になる。
頬が、熱い。

きっと今の私の顔はもの凄い笑顔で、きっと顔色は真っ赤なんだと思う。

……無理もないよね、だって私にとって明日は初デート。

なのは達と一緒に明久と出かけたことは何度か会ったけど、二人つきりで出かけるなんてことは今まで一度もなかった。

……少し緊張してるけど、それ以上に私は明日どんな風に明久と一緒に過ごそうか、とても楽しみだった。

本当は現状を考えると、そんな暢気な事を考えている場合じゃないのだと思うけど、そんな中で、こうした平穏で幸せを感じることに、私は愛おしさを感じていた。

胸の中に暖かなものを感じながら私は眠りに付いた。

だからこそ、私はこの時気付かなかった。ドアの向こうで私を覗く瞳に……。

明久サイド

「……早く起きすぎた」

現在の時刻は四時半ジャスト。

まだまだかなり余裕がある時間帯だけど、もしかしたら寝過ぎる可能性があるかもしれない、などと考えてしまつたととも二度寝なんてできなかつた。

ベッドから下り、僕はパジャマを脱ぎ捨てると、ジャージに着替える。

こういう時は体を軽く動かして時間を潰すのが一番。そう思った僕は長年愛用している鞆に納まった木刀を手に持つと、部屋を出ようとドアノブに手を伸ばす。……その時、ふと部屋の隅に置かれていた長年愛用してきた『あるもの』に気付く。

そういえば、エネミーが出てからあまりあれを使ったことはないような気がする……久しぶりに使ってみようかな？と思ったけど、アルフが寝ているので、あまり大きな音を立てる訳にはいかないし……アンプとヘッドフォンを使えば……いや、それでも狼の使い魔であるアルフのことだからきつと耳に入ってくるだろうし……しようがない、これ エレキを弾くのはまたの機会にしよう。

僕は後ろ髪を引かれるような思いで部屋を後にした。

朝早くの公園にたどり着く。

そこでは既に早起きのおじいちゃん、おばあちゃんが集まって太極拳のようなものをやっていた……健康のためにやっているんだろうけど、太極拳って実は残酷な必殺技のオンパレードなんだよね……例えば首をねじ切る技とか……っと、朝からこんな物騒な話題はやめておこう。

おじいちゃん達に短い挨拶を交わした後、邪魔にならない場所に移動すると、僕は木刀を手にし、一息で鞘から抜刀し、大気を切断する音を響かせる。

それを何度か繰り返すと、僕は昨日の模擬戦のことを思い出す。

昨日初めて知った雄二と霧島さん、そしてムツツリー二の戦い方。雄二は近距離、遠距離、どの方面から攻められても対応できるような戦い方をし、さらに鉄壁の防御を誇る技を駆使してくる。

近距離に踏み込めばトンファーを自分の腕のように自在に操ってこちらの攻撃を捌き、遠くから砲撃魔法を放てば頑強な防御魔法を使って防ぐ。こちらの攻撃を防ぎきった後は、強烈なトンファーでの一撃、あるいは弓に変形させての遠距離攻撃を仕掛けてくるという、オールラウンドな戦い方をしてくる。

霧島さんの戦い方は、最初ヒット&アウェイの戦い方をするものだと思っただけど、そうじゃなかった。

巨大な槍を使つての突進による圧倒的な特攻。槍を使つての遠距離からの投擲。これらだけでも充分脅威だというのに、霧島さんは巨大な槍を使つて、まるでマシンガンのような連続突きを放つてくる…と、後で映像データを見て知った。

一見すると防御をまったく考えていないように見えるけど、氷の魔力変換を使つて、防御壁や空中での高速移動の補助などをして弱点を補っている。

多分だけど、二人とも様々な場面を想定し、自分の力をどんな場面でも生かせるように工夫しているんだと思う…：さすがクラス代表。ん？それは関係ないって？知らん。

最後にムツツリー二。

ムツツリー二のデバイスはライフルで、それを使つての精密射撃がムツツリー二の得意分野：らしい。詳しくは解らないけど、多分かなりの腕前なのだろう。

いずれにせよ、三人ともかなりの実力者。

僕も遅れを取るわけには行かないので、今日は普段やらない攻撃方法：居合いをベースにした戦いではなく抜刀した状態での攻撃を練習してみようと思った。

「ふっ！」

鞘から抜き放ち、『俺』は刀身を水平にするように構える。

普段、あまりこちらの俺にならないようにしている理由は一つ。突然性格が変わったことによつて、戦闘中に味方の動揺を防ぐ事にある。

戦闘とは、常に集中力との勝負になる。わずかに集中力が乱れる事によつて、それが敗北につながる事だつて充分ありえるからだ。だからこそ、俺は出来る限り剣を鞘に納めた状態で戦う事を自分に課してきた。

だが恐らくこのままではダメなのだろう。

戦闘とは常に変化するもの。様々な場面での確に動けてこそ、戦闘を優位に運ぶ事が出来る。呼吸を整え、目を閉じる。

視界を閉じる事により、自己への意識を向けやすくしていく。

キイイイイイイン

思考が、加速する。

周りから、雑音が遠のいていく。

最初は人の声が。

次は朝の街中の喧騒が。

次は鳥の声、草木の音、風の音、次々と俺の周りの音が聞こえなくなっていく、最後に残ったのは、トクントクンと一定感覚のリズムを刻む俺の心音と呼吸によるプレス音だけになる。

これで完全に俺の意識は外界とは遮断された。

イメージする。

相手は昨日戦った雄二。

トンファーによる堅強な防御、そして隙を見つけ出した瞬間に放ってくる攻撃。距離を取ると放たれる正確無比な弓矢による一撃。目を、開ける。

視界に入ってくるのは、先ほどの公園だが、一つだけ違うところがある。

それは俺の目の前には、自分の想像で生み出した仮想の敵がいるというところだ。雄二の姿を型としたんだが、全身が黒子のように真っ黒で、その手にトンファーを装備し、肩の辺りに無数の矢が入っ

た筒を背負っていた。

イメージとしてはトンファーを扱う弓兵といったところか。……実際にそんな武器を使ってくる弓兵がいたら笑いものだな。

目の前にいる雄二の全身が黒いのは、おそらく俺がこれを雄二ではない、と否定しているからだろう。

俺と雄二が戦い始めてまだ日がそこまで経っていない。

お互いの戦闘スタイルがそこまでハッキリしている訳ではないから、正確なイメージとしてこの場には現れていないのだろう。だからこそ、相手が雄二の姿をしていても、全身が影のように黒い。

だが今はこれだけで充分だ。

慣れてない剣を扱う身としては、このくらいが相手として調度いい。

剣を顔の横に水平にするように構え、右足を前へと軽く開く。

「っー」

一息で一気に接近する。

上段から首元へ狙いを定めた横薙ぎの一撃。しかし相手はその一撃をトンファーで防ぐ。

ガキーン！ 仮想の撃鉄音が脳内に響く。

腕には防がれた手応えはないが、俺の感覚では、今の一撃は確実に雄二なら防いでいると理解しているせいか、防がれた瞬間には俺の腕は一瞬だが仮想のトンファーによって動きを止められる。そして、俺の動きが一瞬だが止まった瞬間に仮想の雄二は俺に向かってトンファーを突き出してくる。俺はとっさに体を後方へと反らしてギリギリ鼻先をかするような形で避ける。だが雄二は避けた俺にさらに追撃を仕掛けてくる。俺は半ば地面を転がるようにして猛攻の嵐から逃れるために一度距離を取る。

瞬間、仮想の雄二の武装はトンファーから弓へと変わり、矢を弓に番えて仮想の雄二は次々と俺に矢を発射してくる。

その攻撃から逃れるために…俺はあえて雄二に向かって踏み込んだ。

弓から矢が発射されるタイミングや位置を、相手の視線や、体の動きを見てから判断する…視線は俺の眉間に向けられていた…そして相手の矢を持つ指が微かに動いた瞬間、俺は右手を閃かめた。

バシッ！という音と共に眉間に向かって飛んできた矢が粉々に打ち砕かれる。

ナイス、と脳内で自分に賞賛を贈ると同時に俺は次々と放たれていく矢を右手で次々と弾き飛ばしていき、仮想の雄二に一気に接近していく。

剣に魔力を込める　当然、これも想像だが　刀身に魔力が送られ、剣が紅く光りだすと同時に、地面を踏み砕かんばかりに一気に加速して仮想の雄二の胸の中央に直突きを繰り返す。

星流一閃。せいりゅうめう 全力の加速を使って相手を貫く技だ。

その一撃は見事に仮想の雄二の胸板を貫くことが出来た。剣は根元まで貫通している。確実に俺の勝ち…と解った瞬間、仮想の雄二の体は霧のように霧散した。

周りの情報が、戻ってくる。

風の音が、周りの喧騒が、俺の脳へとダイレクトに送り込まれ、あまりの情報量の多さに俺は軽い眩暈を起こしてその場に座り込んだ。

「……………なんとか、勝てたか」

汗が頬を伝い、ジャージの袖でそれを拭う。

今回はまだ俺のイメージが不完全だったからこそ、なんとか勝つ事が出来た。

もし俺のイメージがもう少し精密だったら…あるいは現実で戦っ

ていたりすれば…高確率で雄二が勝っていたに違いない。最初から居合いをベースにした剣術で戦っていたりすれば、それなりにいい勝負をしただろう。

やはり俺は居合いで戦う方に慣れすぎていた。

別にそれは悪い事ではないのだが、鞘に剣が納まっていない感覚に違和感を覚えているせいか、どこか体の動きがぎこちないと感じる。しばらくの課題はこのぎこちなさをなくす事に専念することになるかもしれない。

そこまで思案した時、俺の頭に白くてふわふわとした柔らかい布が被せられた。手でそれを取ってみると、それは汗拭きタオルだった。

「……？」

訝しげにそれを見てみると、肩をポンポンと軽く叩かれる。振り返ってみると、そこにいたのは俺の悪友…一見すると美少女のようにしか見えない美少年(?) 秀吉だ。

「おはようじゃ、明久」

「おはよ…って、なんでこんな朝っぱらに公園にいるんだ、秀吉？」

「毎日の日課で、ランニングをしておったのじゃ。そっちはどうしたのかの？」

「今日は早く起きすぎてな、体を動かそうと剣を振っていただけだ」

「……ん？なんか違和感が…」。

秀吉は俺の隣に座ると、俺の手の中にある木刀を見てから言う。

「先ほどの相手は、お主の動きから察すると…トンファーと遠距離系統の武器…となると、雄二かの？」

「ん？ああ。と言っても完全にあいつのリズムを完璧に捕らえてる訳じゃないから、レベルがあいつと比べて低くな…ん？」

「またしても違和感…というか。」

秀吉：「お前、なんで雄二の戦闘スタイル知ってるんだ？…とそこまで考えた時に俺の思考は一つの結論に達した。」

「…なるほど、お前も魔導師ということか」

「ため息を吐きながら俺は頬杖をつく。」

「秀吉は少しだけ驚いた顔をする。おっ、結構珍しいな…こいつが驚いたような顔になるのって。」

「なぜ解ったのじゃ？」

「雄二の戦闘スタイルを知ってるところからだ」

「「じゃが、それだけではわからんじゃろ？他にも理由があるはずじゃ」

「は…まあ、たしかにあるけど…とりあえず、今一番の理由として」

「「…最近、結構身近な人間が魔導師だったってというのが多かったからな」

「…なるほどのう」

口ではそう言っているが、実は結構さつきからヒントはあった。

「ヒントじゃと?」

「ああ」

俺は秀吉に俺が気付いたヒントを教えてやった。

まず最初に秀吉が俺の剣の腕を見ても驚かなかったところ。あれは多分最初から俺の使う魔法を知っていたからだろう。さらに性格が一時的とはいえ、変化している知り合いに、普通に話しかけてきたところから推測すると、おそらくムツツリー二辺りから聞いた事なんだろうな。

雄二は俺が魔導師だということを知らなかったみたいだし、そうなると思報活動に優れているムツツリー二が魔導師だったのなら、そこから味方である秀吉に伝わるのにそこまで時間はいらさないだろうからな。

「お前が魔導師ってことは、姉の方…木下優子も魔導師なんだろう?」

「そうじゃ…といっても、姉上の魔法はあまり戦闘には向いておらんんだ」

「現場は弟で、姉は会議室タイプって感じか?」

半ば冗談のつもりで言ってみただが、秀吉は俺の言葉に苦笑する。

「お主の予想通りじゃよ。現場での捜査はわしで、姉上は部署の方といった役割となっておる」

……マジで当たるとは思わなかった。

正直に言うと、新学期の試召戦争で秀吉が姉に連れて行かれてそのまま戻ってこなかったところから、俺は木下姉もそれなりの実力者だと思っていたんだが……どうやら、弟が姉に苦勞するのはこの家でも同じということのようだ。

「……しかし出会ってから数分でそこまで解るなど、凄い推理力じゃないの」

「まあ、推理の事に関してはな」

……これが少しでも勉強の方に向けられるのなら嬉しいのに……と俺は少々、自嘲も混じったため息を吐いてしまう。

「しかし本当に性格がガラリと変わっておるのう」

「まあな、これもムツツリーニか雄ニから聞いたことなのか？」

「うむ、ムツツリーニが教えてくれたぞい」

「なるほどね」

こいつの情報の出所はやっぱりムツツリーニか……まあ、ある程度予想はしていたけど。とりあえずいい機会だからついでに色々と聞いておこう。

「秀吉、とりあえず質問いいか？」

「む？それは構わんが……どうしたのじゃ急に？」

「まあ、色々だね…とりあえず質問1だ」

「むっ？一つではないのかの？」

「ああ、一つ目だけど…今現在、この街に来ている魔導師は俺達以外に知っている奴はいるか？」

「ふむ…とりあえずはわしが知っている中ではもっおらぬはずじゃ」

「その理由は？」

「わしとムッツリーニはミッド出身での、家族は全員向こうにおる」

「ふうん…となると、お前も『あれ』を調べるためにいるのか？」

「あれとは…エネミーのことか？それとも…」

「エネミーじゃないほうだな」

「ふむ…なるほどのう…じゃがなぜわしらは…」

「あ…その件についてはまた後でにしよう」

そうやって俺は無理やり話題をかえる事にする。

管理局から別々の部署で送られてきた理由の訳なんて、どうせくだらない答えが返ってくるのは間違いないだろうし。

「二つ目の質問だ。お前のデバイスを見せてくれないか？」

「よいぞ」

そういうと秀吉は手首に巻いている琥珀色の宝石があしらわれたチエーンブレスレットを見せる。それを確認すると、俺も首に下げている紅い宝石が装飾されたデバイス、フォルトを見せる。

「これがわしのデバイス、クラウソラスじゃ」

……………なんでケルト神話のヌアザが持っている武器の名前が付けられてるんだよ。

「お前も剣を使うのか？」

「剣？いや、わしが扱うのはナツクルじゃが？」

……………なんで剣の名称が籠手についているんだよ。

思えば俺の周りのデバイスの名前にも、結構こっちの世界の神話に出てくる名前が使われてるんだよなあ…クロノのデュランダルトか、シグナムのレヴァンティンとか、雄二のイージスとか……………。

そついや、霧島のデバイスもゲイヴオルクっていう名前だったな……………多分あれはケルト神話のボルグ・マク・ブアインが作り、後にクー・フリーンの手に授けられた「心の臓を喰らうもの」という名前を持つゲイ・ボルグからとったんだろつな。

……………まさかとは思うけど、槍での超投擲魔法…なんてのを身に付けているんじゃない…など一瞬、無表情のまま槍を投擲する霧島の姿が目に見え、背筋に寒気を覚えてしまった。

『明久様、明久様』

「ん？どうしたんだ、フォルト？」

『急いだ方がいいですよ、現時刻、九時です』

「げっ！！」

やべえ……ちよつとのはずだったのに、すっかり時間を忘れて訓練と秀吉との会話に夢中に時間を忘れていたみたいだ。

「悪い、秀吉！話の続きは学校でな！！」

「う、うむ」

そのまま俺は一気に家へと駆け出し、腹を空かせているアルフに適当に朝ごはんを作り、シャワーを浴びた後、服を着替えて財布と携帯を持って外に出かけたのだった。

それから今現在に至る。

慌てていたせいか、鞆を公園に忘れていき、今も抜刀状態の性格のままだった。

ガラスに映る自分の姿を見て、少しながら自己嫌悪する。

黒生地シャツにワインレッドのノースリーブフードパーカーを羽織り、ダークブルーのゆったりとしたジーンズというデートにしては少々ばかりラフすぎる格好をしていた。

もうちよつとマシな格好にすれば良かったのではないか、と今更ながら後悔の念に襲われ、俺はため息を吐いた。

「……………」

本当はデートをやってる場合ではない。

俺達は死人が出ている事件にかかわっている……それも、一年という長い時間をかけてこの事件を追っているのだ。

この街に潜んでいるエネミーという謎の怪物。そして…その背後に潜む人間。

黒い思惑が潜むこの街で、俺達は必ず見つけ出して捕まえなければならぬ……時空管理局執務官として。

「……そういえば、結構苦労したっけな」

執務官試験にはなんとか一発で受かる事が出来たけど、それまでの勉強がとにかくしんどくて大変だった。おそらく、これまでの人生の中であそこまで必死に勉強したのは初めてであろう…まあ、試験が受かったあの日以来、勉強なんてやってたまるか！と思ってまったく勉強をしていなかったせいかな、通常の基本的学力が一気に低下していたりする。

そのことに自嘲気味な笑みを浮かべ、背中を壁に預けて空を見上げる。

本日は見事なまでの快晴。

色々と気がかりな事はあるが、たまには体と心を休ませる日だってあってもいいのかもしれないと思いつつ、先ほど買った缶コーヒを口に含みながら俺は本日のメインヒロインを待つ事にした。

第七話（前編）（後書き）

今回から秀吉も魔導師として参戦するので、戦闘パートまで楽しみに！

ちなみに、彼以外の魔導師は登場する予定は今のところないです。

第八話（中編）（前書き）

今回は、前半が少しだけシリアスです。

第八話（中編）

管理局アンケート

どのような訓練が必要なのか、みなさんの意見を取り入れてみようと思いますので、ご協力ください。

『あなたが戦闘に必要なものをお答えください』

吉井明久の答え

『信頼』

教官のコメント

『チームプレイで最も必要なものですね。仲間との連携はどのような場面でも必要なものなので、この回答はとても参考になります』

土屋康太の答え

『セクシー…女性戦闘員のバリアジャケット強化』

教官のコメント

『最初に何を書こうとしたのですか？』

坂本雄二の答え

『いのちだい 霧島翔子』

教官のコメント

『途中で文字が途切れて血が張り付いているのが気になります』

桜色の花びらが徐々に姿を消していき、逆に新緑が木々に彩り始めてきた季節。

そろそろ半袖の季節かな？と暖かさが増してきた初夏の日差しを体に浴びつつ、俺は手にした携帯で時刻を確認する。

「……………もうそろそろ、か」

現在の時刻は十時半になる数分前…待ち合わせの時間まで余裕はあるが、俺はせっかくの初デートなのだから、待たせるわけにはいかないと思って余裕を持って家を出た。

はい、嘘です。本当は時間をあまり確認せずに家を出てきてしまったので、待ち合わせの五十分前にここに到着していたというだけです……………若干ながら自己嫌悪。

ため息を吐き出しつつ、彼女がここに来るまで、退屈を紛らわせるために俺は懐のメモ帳を取り出して思い浮かんだメモディフリーズを書き込んでいく。

「君と作った……………口ずさむ……………響かせる」

俺は数年前からギターを愛用している。

どうもロストロギアを取り込んだ影響のせいか、音楽で非凡な才能を発揮させてしまい、小遣いを貯めてエレキのテレキャスター、アンプ、ヘッドホン等を購入し、さらに自作の歌詞を作ってみたりしていた…といっても、完全に趣味だから別に全国でヒットを目指そう！などという事は考えていない。

それに、俺の目標は別にある。

音楽はあくまで趣味だから、誰かに聞かせてあげたり、聞いてもらったりするだけで充分だ。最近では、フェイトやアルフ、たまに遊びに来るのはや雄二とかにも聞いてもらっている。

音楽は楽しい。

そのことに気付かせてくれたのなら、これが俺の中に入っていることに感謝できる。

だが

「……………」

俺の中にある…このロストロギアの力は絶大だ。

下手に開放すれば俺自身が死に掛けない力すら有している。

このロストロギアの力を一度だけ使ってみた経験があるが、あれは異常だった。

一撃。

その一撃は音速を超えて放たれ、海面を引き裂き、海を…両断した。

あまりにも、異常な一撃。

そして。

俺は思わず左肩を握り締める。あの時の激痛が記憶に蘇り、それが仮想の痛みとして、襲い掛かってくる。

これは俺にとっては一種のトラウマだ……。
たった一度。

たった一度使っただけで自分の体がボロボロになる威力だったなんて……………」

幸い命は取り留めることが出来たが、三ヶ月の間、自分で体を動かす事がまったく出来なかった。

「……………」

左肩に触れてみる。そこに今でも残っている傷がある。

「フォルト…いや、キャリバー…俺はまだあれを使いこなせないのか？」

『…今の明久様ではおそらく、不可能でしょう』

「だよなあ……………」

予想していた答えでもあるのだが、俺はまだまだ弱い自分に対する嫌悪と、まだ使えないのかという焦燥と、そして使わなくていいと思って安堵している自分がいる。

暗鬱とした気分になり、ため息を吐く。

あの力はたしかに強力だ。

だが同時に凶悪でもある。

誰かが手綱を掴んでいなければいけない。

その誰かはもう決まっている。

だがそいつはまだ手綱を握って操るところか、握ることすら難しい。

「……………でも、握らなきゃいけないんだ」

握りたくない！

言葉とは裏腹に、俺の心の中では拒絶の叫び声が響いた。

「どっしたの？」

突然響いた言葉に、俺はびくりと体を震わせた。虚空を見つめていた視点がゆっくりとクリアになってきて、焦点が戻ると、その先には不安げな表情を浮かべたフェイトがいた。

「あっ、お、おはよう。フェイト」

「うん、おはよう……」

頬を指でかきながらフェイトと挨拶をかわす俺。出来る限り、不審に思われない行動を取ったつもりだったが、どうやら逆効果だったらしく、フェイトは気遣わしげな表情を浮かべていた。

「どっしたの？」

「……………」

再び同じ質問が彼女の口から響くが、俺は答えることが出来なかった。

俺の中にあるロストロギアは強大な力を有している。その力は使った張本人ですら死に掛けるほどの絶大な破壊力を持っているのだ。もしそれが彼女達に猛威を振るったとなったら、俺は……………。

ヤメロー！！

心が、叫ぶ。

だが俺の思考は止まらない。

連想、してしまう。

力を発動した自分。周囲に満ちる、膨大な魔力。次々と葬られていくエネミー達。その余波で全身から血を溢れ出させる、俺。

そして……俺の放った力によって引き起こされる最悪な……

ふいに頬に温かな手が触れてきた。

「え？」

「どうしたの？本当に、大丈夫！？」

フェイトが不安そうに俺に言葉を投げかける。

この顔に触れている温もりが、彼女の手だと気付いたときには、思わずその手を握り締めていた。

ゆっくりと、顔を動かしてガラスに映る自分の姿を見る。

そこには……まるで恐ろしいものでも見てきたかのような、なんとも情けない顔をしていて、さらに女の子の手に見っとも無く縋り付いている惨めな自分が、そこにいた。

「何か、あつたの？」

「……………」

言葉で答えず、俺は黙って首を横に振る。

これはただ自分で勝手に巻き起こした結果だ。勝手に妄想し、勝手に恐怖し、勝手に彼女達を空想の中で殺してしまっただけの話なんだから……………。

だから、本来ならこんな風に彼女の手には縋る権利なんて俺には無い。はずなのに。

彼女は優しく俺の右手を両手で包んでくれた。

虚脱した体を動かし、ゆっくりと彼女の顔を見る。
そこには、慈愛の微笑を浮かべた同じ年の少女がそこにいた。

「、」

その表情を見ているとスウ、と俺の中で蠢いていた得体の知れないドロドロとした感情が薄れていく感覚がした。

「『大丈夫、この手は僕がずっと握っているし、絶対に離すことなんてない』」

「!」

ふいに彼女の口から放たれた言葉に、俺は驚愕した。
その言葉はかつて俺が彼女に向かって言った言葉だった。

「八年前、私が母さんのところから帰ってきたとき…ボロボロだった私の体を明久は抱きしめて…それから、手を握って言ってくれた言葉だよ」

「………そういえば、そうだったな」

あの時、母親の元から帰ってきた彼女の姿があまりにも痛々しくて、彼女に問い詰めても答えてくれなくて…そんな彼女に俺は今にも壊れそうな彼女の体を優しく抱きしめ、その手を握っていた。

「なんだが、今の明久を見ていると…昔の私を思い出してね………それだ」

「『僕は君のことは何も知らないけど、何も知らなくてもいい。だ

けど』」

「！」

気付いたら、あの時の言葉の続きを口にしていた。

記憶の彼方にあつた言葉のはずなのに、不思議とすら言葉に出来た。

「君の傍にいて、君を支える」

特にタイミングを合わせているわけでもないのに、俺達は同じ言葉と同じタイミングで言った。たったそれだけの事が、今の俺にとってかけがえの無いと思えるほど嬉しい事だった。

俺の心に恐怖感は無かった。
変わりにあるのは、暖かくて心地良いものだけだった。

「ありがとう、フェイト」

「うん、どういたしまして」

そっと、ガラスを見る。

そこにいるのは先ほどの惨めな自分ではなく、いつも通りの笑顔を浮かべている吉井明久がそこにいた。

やれやれ、何をやっているのやら。

せつかくのデートだって言うのに、最初からこれじゃあ前途多難だな。

「せつかくのデートなのに、いきなり迷惑かけてごめん」

「ううん、大丈夫だよ…それより、もう大丈夫なの？」

そう言っただけで不安げな表情を浮かべるフェイトだったけど、俺はその頭を少し乱暴に撫で回してやった。

「ああ、甘えん坊の魔法使いが俺を癒してくれたから問題なしだよ」

「あ、甘えん坊!?」

心外だ、と言わんばかりの表情を浮かべるフェイトだが、実際彼女は結構甘えん坊な節が多々ある。俺はその表情を見て、ニヤリと笑う。

「あー、悪い。甘えん坊だけじゃなくて、寂しがり屋に怖がりでもあったなあ」

「あ、明久あ！」

顔を真っ赤にしてフェイトはパタパタと手を振ってくる。

してやったり、と心の中で思いつつ、俺は腹から込み上げてくる笑いをこらえつつ、恥ずかしがっているフェイトを見る。

やれやれ、お互いまだまだ子供だなあ。

先ほどフェイトに情けなく縋り付いてしまって、それが…なんというか、恥ずかしく思えて、思わずフェイトに意地悪をしてしまった…向こうの俺はこんな意地悪をせずに、もっと優しい…別のこととをやっているのだからうけど。

むくれ顔になっているフェイトの頭をポンポンと撫でてやると、突然するりと俺の腕に自分の腕を絡ませてきた。

突然の事に、俺はビクン!と体を一瞬だけ硬直させてしまい、それが彼女の狙いだったようで、彼女も先ほどの俺のようにしてやったり、と笑みを浮かべていた。

「もう本当に大丈夫そうだね」

「ああ、それじゃあ行くこうぜ」

「うん！」

そのまま俺達は歩き出した。

しかし後々に俺はこの時気付いておけばと後悔している。
背後から俺達を覗き見る不振な影に……………。

はやてサイド

おお、なんかええ雰囲気になったで！

最初はアキ君がどこか不安げな雰囲気を出していたみたいやけど、
今はそんな雰囲気なんてなさそうやな。うーん、初々しいカップル
っちゅうかんじやな。

「はやてちゃん」

「はやて〜」

「……………はやて」

「なんや？」

後ろからなのはちゃんとヴィータ、康太君がジト目で私を見詰めてくる。

けれど私はそんな視線を容易く受け流し、ニヤリと笑う。

昨日のフェイトちゃんは、傍から見ても解るくらい挙動不審やったし、夜寝る前、私はしっかりとこの耳で聞いたんや…フェイトちゃんにデートの待ち合わせをしようということに！

「ふふふ、フェイトちゃんとアキ君の初デート…しっかりと見させてもらうでー！」

「正直、私は気が乗らないよ」

「あたしは興味ねえんだけど」

「……………他人の幸せを見るのに興味なんてない」

などと口々に文句を言ってるのはちゃん達やけど、私には解る！
ヴィータは本当に興味無さそうやけど、なのはちゃんはさっきからチラチラとアキ君とフェイトちゃんの様子を見て、フェイトちゃんが幸せそうな顔をしたり、アキ君が笑顔を浮かべていたりするところを見ると、にっこりと笑顔を浮かべておるし、康太君は普段からその手に常備しておるデジカメ（ミッド製）で普段は見られないなのはちゃんや、フェイトちゃん、ついでに私とヴィータの私服姿をしつかりとデジカメで撮影しているっちゅうことぐらいお見通しや！

康太君に念話で話しかける。

「（どや？普段見られない表情を浮かべておる美少女を撮影する機会なんてめったにないやろ？）」

「（……………なんのことか、解らない）」

って結構天然な女たらしのところがあるから、無理もないけど。

『ああ！今、フェイトちゃんが吉井君の腕に思いっきりギュッと抱きつきましたよ！？』

『何ですって！？』

やれやれ、街中で大声出すなんて…いくら驚いているとはいえ、少しはマナーっちゅうもんを考え……。

『瑞希！！』

『美波ちゃん！！』

『今すぐ吉井君^{アキ}を殺^やりにいきましょう（いくわよ）！！』

「「「ちよっ！んまっ！！ってえ

！！！！！！」

あまりにもぶっ飛んだ言葉が耳に届き、私らは声にもならない叫び声を街中で上げてしもうた。

映画館

駅前にある映画館。

雄二や姫路達と何度か足を運んだことはあるが、こうしてデートとしてここに来るのは初めてで、少しだけ緊張してはいた。

とはいえ、それをフェイトに察ずられるなんてことはしないように、俺はさっさと話題を振る事にした。

「フェイトは何が見たいんだ？」

「うん、実はね前々から決めていた映画が……」

なんてそこまで彼女が言った瞬間だった。

俺とフェイトは目の前の異様な光景を見て固まってしまった。

いや、固まっているのはおそらくフェイトだけだろう。俺は二度目だからなんとかすぐにフリーズから脱出できたが、やはりこの光景からはどうしても目を逸らしたくなる。

そのままフェイトの手を引いてその場から離れようとしたが、向こうがこちらに気付いてしまった。

くっ………もつと早く俺がこの場から離れていれば………！

「よう……明久………」

「お、おう……雄二」

「……お早うフェイト、吉井」

「お、お早う……翔子」

鎖が繋がられている手枷を両腕にはめた雄二と、その鎖を握って至福の笑みを浮かべている霧島が、俺達の目の前にいた。よく見てみると、雄二は先ほどの俺よりも酷い表情を野性味が溢れた顔から浮かばせていた………こいつがこんな顔になるなんて………一体何があったのか、怖くて聞けねえ………。

「雄二…大丈夫か？」

「……男とは…無力だ」

ここまで憔悴しきってる人間を俺は今まで見たことがない。

「……雄二、何が見たい？」

「give me freedom」

直訳すると自由を下さい、か……同情の念が俺とフェイトから伝わってきたのか、気まずそうに雄二は俺らから視線を逸らしていた。対して、霧島はというと……。

「……そんな映画のタイトルはないけど……」

THE・天然スルー。

前々から思っていたが、霧島って結構天然っぽいところあるよな。雄二関係で。

「……じゃあ、とある禁呪の黙示録・完全版」

「待てそれ、四時間五分もあるぞ!!」

「……二回見る」

「八時間十二分も椅子に座ってられるか!!」

どんな耐久拷問だ、と思った時と霧島が次の行動に出た瞬間が同じで、俺は次の言葉が言えなくなつた。

「……大丈夫」

バチバチイ！！

霧島が懐からスタンガンを取り出し、それを雄二の首元に情け容赦なくぶつけた。辺りに雄二が浴びせかけられている電撃の閃光が飛び交い、周囲を照らしていた。

「ちよっ！待て、翔子お

づあ！！！！！！」

『坊ちゃ

ん！！！！！！！！』

雄二はしばらく電撃にもだえ苦しんでいたが、奇声を上げてその場に倒れこんでしまい、こいつのデバイスのイージスがマスターを思っけて叫ぶが、雄二はその声に反応する気配を見せずに力無く床に伏せていた。

「……じゃあ、二人とも」

「おっ、おう」

「うっ、うん」

グイッ、ツカツカ。

霧島は糸が切れた人形のようになった雄二をカウンターへと連れて行く。どうでもいいが、誰もこの状況につっこみをいれないのは何故だ。

「……学生二枚。二回分」

「はい、学生一枚、気を失った学生一枚、無駄に二回分ですね」

笑顔でスルーする店員。いや、せめてつつこめよ！客の状態がおかしいことぐらい指摘しろよ！営業スマイルもいいけど、非常時にまでスマイルでいられたらこっちとしては迷惑以外の何物でもないからさ！

「……………」

恐ろしきかな、霧島ハリケーン。

先ほどまで騒がしかったのに、それが過ぎ去った空間では微妙な空気が漂い始めている。

「行こうか…フェイト」

「う…うん」

顔が引きつっているフェイトの手を掴み、俺はさっさと映画を見てこの微妙な気分を払拭することにした。

せっかくの初デートなのに、色々前途多難すぎるぞ。

はやてサイド

「な、なんだっただらう、あれ？」

「私に聞かれても……………」

「あたしに聞くなよ」

「……………俺に聞かれても、返答に困る」

ほんま何やったんや、さっきのは？

翔子ちゃんってほんまに雄二君のこと好きなんか？あれがいわゆるヤンデレっちゆう奴か……………いやはや、恐ろしいものやな……………せつかくいいいムードやったのに、霧島夫妻が登場した瞬間あつという間にぶっ壊れてしもうた。
しかも。

「本当に仲が良いカップルですね〜」

「懂れるよね〜」

「いや、あれのどこが仲が良いっていうんだよ……………」

ヴィータのつつこみも耳に入っていない様子で羨望の眼差しを浮かべて夢見心地な瑞希ちゃんと美波ちゃん。いや、ほんまにあれのどこがベストカップルっていうんやろか？あれはもう尻に敷かれる、ちゆうレベルを超えてるで？のろけも何もないやん！どこぞのホラーサスペンスコミックみたいやで！！

「……………康太君、とりあえずアキ君達の方にサーチャーを飛ばしておいてくれへん？」

「……………了解」

そう言つと康太君はバッグの中からお手製のサーチャーを数個取り出し、透明にするとそれを二人の元へと飛ばしていった。これで二人の様子を見ることが出来る。

さて、問題は……………。

「はっ！見惚れてる場合じゃなかったわ！！」

「そ、そうですね！はやてちゃん達、二人がどこに行ったか知りませんか！？」

「私は全然見てへんかったで？」

「わ、私も！」

「あたしも見てねえよ」

「……………カメラの調整で忙しくて見てない」

「ああ、もう！こうなったら行くわよ、瑞希！！」

「そうですね！行きましょう、美波ちゃん！！」

釘が埋め込まれた金属バットを片手に（どつから持ってきたんやねん）二人は映画館へと突入していった。

はあ、まさかアキ君達のデートを見に來ただけなのに、二人のポディーガードをせなあかん状況になるなんて思わなかったで……………。

二人とも！どうか無事にデートを完遂してな〜。

第八話（中編）（後書き）

次回の投稿は結構間が空くかもしれません。

第九話（後編）（前書き）

ようやくテストが終わった……デート編、ラストです。

第九話（後編）

明久サイド（抜刀モード）

「はあ………」

「……………」

映画が終わり、俺達は余韻に浸りながら歩いていた。面白かった。もの凄く面白かった。

「いい映画だったな」

「うん！」

俺の言葉にフェイトは心から同意してきた。

フェイトが見ようといってきた映画のジャンルは恋愛。まあ、フェイトだって女の子なのだし、こういった類の映画は見てみたいだろう。俺は特に恋愛系ジャンルはあまり見ないのだが、取り立て今は観たい映画があるわけでもないし、彼女が見たいといっているのだから、俺は快く了承した。

俺達が見た映画、タイトルは『冬桜』

映画の舞台は現代の日本。

物語は生きる意味が見つけれられない少年と、決められた運命に戸惑う一人の少女の物語。

少年は生きる意味を見つけられず、ただ毎日を怠惰に過ごし、たった一人の肉親である姉に養われて生きていた。成績は悪くない、運動神経だって鈍くはない。けれど、彼にはどうしても生きていくという実感が湧かなかった。

このままではいけない。
そう思っているのに、どうしても生きがいを見つけられない。
そんな少年の前に、一人の少女が現れる。
月の光を背後から浴びている少女と少年の出会い。
そこから彼らの物語が始まった……………。

「面白かったなあ…特に最後の三十分は目が離せなかったな」

「うんうん！」

今だ興奮が冷め止まないのか、フェイトは思い出しでは恍惚とした表情を浮かべ、時折涙を拭っていた。あの映画は単純な恋愛だけでなく、家族の愛や仲間との絆も描いていて、たった三時間という時間で、何度も涙を流しそうになった。最後のシーンは感動モノだった。フェイトの隣だから涙を流さないようにしていた俺だったが、ラストシーンだけは俺も涙を流してしまった。

生きる意味を見つけることが出来た少年と、自分の運命を自分で見出せた少女。その二人を支え続けた家族の愛。あれで感動できない人間はいないはず。

なんというか、あれを見た後だと自分の世界観が変わって見える気がする。

今なら雄二が目の前で霧島とイチャイチャしていても笑って許してやれるような気がする。

それぐらい感動できる映画だった。

「あっ！」

「ん？」

突然俺の膝に軽い衝撃が加わる。下を見ると、マントを羽織った

小学生ぐらいの男の子がおもちゃの刀と鞘を床に散らばして尻餅を
ついていた。格好から想像するに、おそらくはこの映画館で上映し
ていた日曜の朝早くから放映しているヒーロー番組のコスプレなの
だろう。

「大丈夫？」

フェイトはそういいながら男の子を優しく立たせ、俺はその間にお
もちゃの剣と鞘を拾い上げるついでに、鞘を剣に納めて『僕』の状
態に戻ってみようと試して…あれ？

「あつ、戻れた」

「えっ？あつ！明久、普段の方に戻れたんだ」

「うん…ちょっと試してみたんだけど、成功したみたい」

おお、初めて刀以外でやってみたけど、こんなおもちゃの剣でも、
僕の性格って簡単に変わるものなんだなあ……なんて感心しつつも、
男の子におもちゃの剣を手渡しておく

「はい、次は気をつけてね」

「うん！ありがとな、カップルの兄ちゃん、姉ちゃん！」

「「なっ！??？」」

男の子の何気ない言葉に、僕は一気に顔を赤くした。

い、いきなり何言ってるの、この子　　!?!?

そのまま笑顔で母親と父親の元へと駆け出していく少年。

普段だったら微笑ましい光景で、思わず笑顔を浮かべてしまうはずなんだけど、今の僕らにそんな余裕はなかった。

か、カップルって……いや、フェイトと一緒にいてそんな風に見られるのは大変光栄で御座いますけどそこはかとなく嬉しいことではあるんで御座いますけどね！ん？言葉遣いが途中からおかしくなってるって？気のせい気のせい。

けれどそんなこと、僕と彼女であり得るわけがないというか、なんとというか、確実にそんなこと彼女が聞いたらきつと気を悪くしちゃったりとか……。

内心、冷や汗を感じながら隣にいるフェイトを見てみると……。

「か、彼女……私が……明久の彼女……え、えへへ」

……………あれ？

僕の予想と反して、フェイトは幸せそうな表情を浮かべていた。僕の今までの経験からして、こういった事態は必ずといっていいほど僕に被害が起きていたはずなんだけど……これは一体……もしかして。

これはもしかして、もしかするとだけど……。

フェイト、ひよつとして……僕の事が……

い、いやいや。確証もないのに何勝手に結論付けているんだ、吉井明久！

フェイトみたいなスタイル抜群で、性格も良い美少女が僕に気があるわけ……いや、でもそういった節は割りとあったような……いやいや、何をバカな……でも、いやいや、でも……ああ！頭がこんがらがってきたあ……！！

さっきから心臓が太鼓のように鳴り響き、息苦しさを感じているけど……でも、不思議と苦痛にならず、むしろそれが心地よいと思え

る自分がいて…ああ、なんだろう。この感情は……もしかすると
…フェイトもこの感情を胸に抱いているのかな？
よし、ここは男らしく聞いてみる事にしよう！

僕は深呼吸をすると、フェイトの前に立って彼女を真正面から見
据えた。

「ふえ、フェイト！」

「へっ！？は、はい！」

僕は彼女の瞳をまっすぐ見つめ、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「……………フェイト」

「……はい」

「……………」

「……………」

『 『 (ジー) 『 『 『

「……………」ご飯

「食べに行かない？」

「男らしさ？何それ、美味しいの？」

「えっ！？あっ、う、うん！そうだねー！」

互いに顔を真っ赤にしながら、僕らはぎこちなく歩き始めた。

周りから「なんだ」とか、「告るんじゃないのかよ」「や、「ヘタレ」とか聞こえてきたけど、僕はそれを華麗に無視する。ふっ、この程度で僕が動揺すると思っっているのか………べ、別にヘタレじゃないもん！

さっきまで腕を組んでいたのに、今はなんとというか…互いに意識しているせいか、相手の顔を見ることがすらままならなかった。

はやくサイド

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ！」

「させるかあ

！」「」

臨戦態勢に入ろうとする二人に、私となのはちゃんとヴィータが後ろから羽交い絞めにして、なんとか行動を阻止する。もう何度繰り返したかわからんで？

「離しなさい、なのはにヴィータ！」

「はやくちゃん、離してください！」

「離したら明久のところに行くだろ！？」

「そして確実にアキ君しめるやろ、二人とも！」

「そんなことしないわよ！浮かれまくってるアキにただ注意するだけよ」

その手に持っている大量に釘が打ち込まれた金属バットは、注意には絶対に必要のないもんやと思うで？

「二人とも、どうして止めるんですか？もしフェイトちゃんに万が一の事があつたらどう責任取るつもりなんですか！？」

「それはない！」

なのはちゃんと私は、ほぼ同時に瑞希ちゃんの言葉を否定する。

アキ君は確かにスケベなところもあるけど、そういつたことに関しては誰にも迷惑になるような事は絶対にやらへんって確信はある。誰かの為なら、当たり前のように体を張るアキ君のことや。

誰かの不幸にしかならへんことなんて、死んでもやらへんはずや。それを二人に説明してみたんやけど……………。

「何言ってるのよ！男なんてみんな狼なのよ！？ちょっと油断すればあつという間なんだから！！」

「そうですね、うつかりフェイトちゃんが吉井君に勘違いするような言葉を言っちゃって、そこから間違いが起きちゃったらどうするつもりなんですか！？」

二人ともさつきからこんなんばかりや。

恋は盲目、ってゆっけどこれはいくらなんでも見えてなぞ過ぎとちやう？

「つーか、お前らを行かせた方が絶対取り返しのつかないことになりそうな気がするぞ!」

ヴィータの言葉に一票や。

「どーがよー!」

「そうですね、失礼ですね!」

「そういうんだったら、二人ともその物騒なバットを置いていきなよ……」

なのはちゃんの言う通りや。それで打たれたら確実にお陀仏やで。ただでさえ殺傷力が高い釘バットを、金属製にしたんやから威力も見た目の物騒さも何倍も強化されとる。

というか、さっきから他の客からの視線が痛い……ああ、アキ君にフェイトちゃん……どうか無事にこの場から逃げ切ってな……。

明久サイド（通常モード）

ラ・ペデイス。

文月学園生徒御用達の店で、僕も何度か立ち寄ったことはあるんだけど……その度にある意味濃い体験を経験した場所で、僕らは昼食を取っていた。

「んっ、おいしっ!」

「良かったね」

フェイトがそう言って幸せそうに目を細めてカルボナーラを咀嚼する。うんうん、さすがは生徒御用達の店。悲惨な体験をした場所ではあるけど、相変わらざるの繁盛しているところをみると、あの時はきつとタイミングが悪かったただけなんだよね。

そう前向きに考えながら僕は注文したラザニアを口に運ぶ。うん、美味しい。

それから軽い談笑を交えながら、黙々と食べ進めていった僕らだったけど、フェイトはデザートまで注文していたみたいだった。

「どんなデザートなの？」

「ふふっ、来てからの楽しみだよ」

そういうフェイトの顔はどこか楽しげで…それでいて、頬がほんのりと紅潮していた。

なんだろう？と首を傾げていると、ついにそれが姿を現した。

「お待ちせいたしました。特性クリームソーダ・ハワイアンカップルモードで御座います」

「ブバア！」

僕が噴き出した水が、店内に綺麗な虹のアーチを描いた。

店員さんが運んできたそれは、どでかいカップにブルーハワイソーダが入り、その上にアイスが乗せられたクリームソーダだった。しかも、アイスの頂点には二つのストローが刺さっていて、そのストローはハートを描くように湾曲していた。

「ふえ、ふえふえふえフェイト！？なに、これ！？？」

「何って、ラ・ペデイスの人に聞いたおすすめの品だよ?」

それはカップル限定のおすすめだと思う。

それにしても、そのおすすめを勧めた店員さんの目は節穴だなあ。僕とフェイトじゃカップルに見えるわけじゃないか……明らかには僕の方がフェイトと不釣り合いつて感じだし。

目が節穴な店員さんは「ごゆっくりどうぞ」と、僕らに柔らかかな笑みを浮かべながらそのまま自分の仕事へと戻っていったけど、今の僕はぜんぜんごゆっくりできる心境ではなかった。

もしかしたら一人で全部飲むつもりなのかもしれない……なんて淡い幻想を抱いてしまっけど……。

「ほら、明久も一緒に飲も!」

フェイトはニコニコと笑いながらグラスをテーブルの中央に寄せていく。

「ふえ、フェイト?本気なの!?」

「えっ?」

「えっ?じゃないよ!だって……こういうことは、その……恋人とか、そういう人とやるもので………」

そこまで言った瞬間、フェイトが頬を赤く染め、そして……上目使いで僕を見つめてきた。うっ、な、なんか……それだけで僕の心臓のクロックが上がったような気がする。

フェイトはゆっくりと僕の方に身を乗り出し、小声で……僕だけにしか聞き取れないような声で僕にささやきかけた。

「……………だめ？」

「え？」

「私とじゃ、だめ？」

「フェイト？」

彼女の顔が次第に真っ赤になっていき、目の端にはつつすらと涙をためていた。

緊張、しているんだ……………。

彼女がこれから告げる言葉は、おそらく彼女の心の奥底から引っぱり出されてくるものだ。自分の内側にしまい続けてきた想いは、年を重ねるごとに重くなっていくもの。それを表に出そうとする行為は、とても辛くて、とても苦しいことだ。

でも彼女はその苦しみを必死に耐えて僕に曝け出そうとしている。フェイト・T・ハラオウンが僕だけに、自分の奥底を見せようとしてくれていた。

「私はね…明久のこと、ずっと…ずっと前から」

「……………」

もしかして……………これって……………告白？

彼女の口から告げられる前に僕の頭にそんな単語が過ぎったが、そんな甘い幻想は次の瞬間、どこからか飛んできた釘金属バットによって殺された。

「ほべしっ…！」

「あ、明久あ!??」

重量と速度、さらに鋭利な物質が合わさって強力な殺傷力を上乘せた強烈な一撃をもろに頭に受けた僕はその場に倒れこんだ。おかしいな…冷たいはずのリノリウム製の床が…なぜか、今はとっても生温かいや。

ああ、どうしてだろう…とっても眠いや。

薄れゆく意識の中で、僕は一つの結論にたどり着く。

結局僕が酷い目に会うのはデフォなんだということに……。

「あ、明久!しっかりして!明久あ!!」

「ああ…死んだおじいちゃんにおばあちゃんだあ……」

ぼんやりとした視界の中、僕は懐かしい人々と出会う。

「明久!?本当にしっかりして!!」

「やあ…元気だった?アリシアにリインフォース……」

それはかつて僕らと関わりを持ち、悲劇によって失ってしまった大切な人々との再会。これはきつと…神様がくれた、一つの奇跡なのだろう。

「色々と気になる人が出てきてるけど、とりあえず戻ってきて!明久あ!!」

「やあ…奇遇だね、雄二」

「なんで雄二君までそっちにいるの!？」

なぜかこの多次元世界で最もどうでもいいブサイクと出会ってしまった。

神様、別にこいつは今まったく必要ないので、とっとと地獄にでも送ってください。

「戻ってきて!なんか顔色がどんどん青くなってきたから!できるなら雄二君も一緒に戻ってきて!！」

「リンフォース……」

「えっ!?!どうしたの、明久!？」

「豆乳って美容にいいらしいね……」

「もの凄く今はどうでもいい情報だよ、それ!」

「……………」

「えっ!?!明久!?!ちょっと、何も言わなくなったけど大丈夫!?!起きて!本当に起きて!最後の言葉があれなんて嫌だよ!明久あ……………」

どこからか僕の名前を呼ぶ声が聞こえてきたのは気のせい?

はやてサイド

ヤバイ！

二人の甘々で見ていると思わず吐糖しそうな空間にプッチンときたのか、瑞希ちゃんと美波ちゃんが手に持っていた釘金属バットをアキ君に投擲しおった！！

とつさに瑞希ちゃんの方は、私となのはちゃんを取り押さえる事に成功した。むっ？これは中々の乳をお持ちやな…フェイトちゃんといひ勝負…いやいや、フェイトちゃんの方が大きさ的には少しだけ上やな。柔らかかさでは…ふむ、こっちの方がフェイトちゃんよりも柔らかい。むう、これは甲乙つけがたい感じや……。

「ああ！危ないアキ君！！」

「はっ！」

なのはちゃんの声で私はハツとした。

あかんあかん、ちよつと考えすぎてたみたいやな…この話題は後々康太君と一緒に談義する事にしよ。

美波ちゃんの方は…ダメや！間に合わんかったつか！！

美波ちゃんをヴィータが取り押さえた時には既にバットはアキ君の頭に命中していた。

あっ！アキ君の頭から噴水のように血が！！

「アキ君

！！！！！！」

そのまま床に崩れ落ちるアキ君。

ちよつ！？なんか受身すら取らんかったで！？アキ君、大丈夫なんか！？？

とりあえず、二人にはヴィータが鉄拳をかましたみたいやから、今は目を回して気を失っておるわ。本間にこの二人、アキ君のこと好きなんか？

……つて、なんかアキ君が虚ろな目でぶつぶつと虚空を見ながら
なんか言ってるで!?

「やばい、行くでえ康太君!」

「……………了解!」

私たちは普段から常備しておる緊急セットを片手に二人の元へと駆け寄る。

康太君は慣れた手つきでアキ君の頭に包帯を巻き、その間に私はアキ君の衣服を捲り上げて、意外に鍛えられている上半身をさらすと、その上にぺたぺたとAEDシートを貼り付ける。

「310、チャージ!」

「……………300、了解」

私が貼り付けている間に、どうやら康太君もAEDの準備を済ませていたみたいやな。そのまま私らはいったんアキ君から離れる。それを確認した瞬間、康太君はスイッチを押した。

「3、2、1!」

ピッ。バリバリバリ!!

「あばばばばばばばばばばばばばばらんちゅっ!!」

不気味な叫びと共に、アキ君は電撃を体に帯電したまま復活した。おお、良かった良かった。あと数秒遅かったら確実にアキ君逝ってたで……………。

額から汗を流しつつ、どこかホツとしたような表情でアキ君は呟いた。

「あ、危なかった……あやうくスト？でリインフォースに負けるところだった」

「いや、死に掛けた身で何やってんねん!!」

アキ君の開口一番の台詞に思わずつつこんでしもうた。

臨死体験から見事に生還して、第二の人生ライフの初めの一言がスト？って！古いわ！何であの世で懐ゲープレイしてるんや!?!しかもリインフォース！何ちゃっかりあの世ライフ満喫してんねん！幸せそうで何よりやけどな!!

「あれ？はやてにムツツリーニ、こんなところで何してんの？」

「くぐつ!!」

い、いえへん。

アキ君達のデートを尾行してたなんて口が裂けても言えるわけあらへん……。せやけど、なんてごまかしたらええんや？アキ君、捜査のことに関してはもの凄いくらい頭回るから、下手なごまかしはきかへん……。

というか……。

「その前に、そこで倒れとるフェイトちゃんをなんとかせな、あかん!!」

「へっ?って、フェイトお

!!!?

「アキ君！」

「はやて！」

そう思ったとき、私らに救いの手を差し伸べてくれる二人が来てくれた。

「なのは！ヴァイター！」

「大丈夫！？鼻血が見えたから、もしかしたらって思ったけど」

「くそっ！フェイトもムツツリーも瀕死じゃねえか！はやて、人工呼吸器を貸せ！あたしはムツツリー二の方をやるから、なのははフェイトの方を頼む！」

「任せてよ！」

よし！これで戦力は充分や…このまま一気に二人を蘇らせたる！

蘇れ…蘇るんや、フェイトちゃん！康太君

！！！！

明久サイド

「脈拍、安定したよ」

「呼吸も落ち着いてきたよ」

「顔色も大分良くなってきたな」

あれから数分。

僕らはなんとか二人をこの世に留める事に成功して一息つく。

ふう、なんとか輸血パックの量も二人が常備していた分でギリギリなんとか足りたみたいだ。

今日は格好つけようと思っていつも持ち歩いていた緊急セットを家に置いてきてたから、二人の参戦は本当に助かつ（シユカ！）へっ？何今の！？

右の頬をかすめた何かを探していると、どこからか聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「また会いましたわね、豚野郎！！」

「げっ！清水さん！？」

いつの間にか僕から数メートル離れた位置に、螺旋状のツインテールを持った少女、清水美春さんが、そこにいた。彼女の指の間にはナイフとフォークがクナイのようにはさまれていた……まさか、さっきのって……………。

「今日こそはあなたの命日ですわ！私の愛しの美波お姉さまを誑かす腐れ豚野郎はここでくたばりなさい！！」

そう言って清水さんはナイフやフォークを次々と投擲し始めた。

「さ、三人とも！とりあえず二人をどこか安全な場所に！！」

「わ、わかったよ！！」

「死ぬなよ、明久!!」

「余所見をするなんて、余裕ですわね!」

今だに気を失っているフェイトとムッツリーニを抱え、なのは達は店を出て行く…よし、これで二人の安全は確保された…けど。

「うわぁ!ちよっと別に僕は美波を誑かしてなんて(シユカカ!!)うわっ!今のかわさなかつたら失明して(シユカカカ!!)やめてえ
!!!」

聞く耳なんて最初から持っていない、とばかりに清水さんは次々とナイフやフォークを僕に向かって投擲してくる。次々と放たれてくるナイフやフォークを僕は必死にかわす。

「おのれ!とつとくたばりなさい、豚野郎!!」

「そうはいかない!!」

人体が持つ限界ギリギリの柔軟さを使って僕は放たれてくる刃物の投擲を避けまくる。

くう、だけど避けてるだけじゃ…すると、僕の視界に紙ナプキンに包まれた一本のナイフが目に入る。調度いい、あれを使おう!清水さんの攻撃をかくぐり、僕はテーブルの上に置かれていたナイフを手に取り、紙ナプキンから抜いた。

瞬間、『俺』の中にあつた何かがキレた。

「……………さつきから豚野郎、豚野郎って……………」

「？」

「ウゼエんだよ、この年内桃色百合畑の螺旋頭女がア

！！！！」

俺はナイフを両手に持つように構えると、清水が次々と放つてくるナイフやフォークを空中で全て叩き落していた。こんなもの、なのはアクセルシューターや雄二の矢と比べたら遅すぎる。

「と、突然なんなんですの……？気持ち悪いですわよ！」

俺の突然の変化にひるんだのか、清水は攻撃の手を緩めていた。今がチャンス。

「気持ち悪いのはてめえだよ百合女！一回精神科行ってきやがれ！！」

「私とお姉様の乙女の恋路を邪魔する豚野郎は黙ってなさい！！」

「乙女はフォークやナイフなんてもの店の中で投擲しねえよ！乙女とか言う前に常識ぐらい守りやがれ！！」

「死にやがりなさい、豚野郎！！」

「話聞けや！都合の悪いことは全部突き抜けていくのか！？この螺旋頭！」

「誰が螺旋頭ですか！？」

「螺旋頭じゃねえか！つうか、なんでそこだけ聞き取るんだよ！！」

ええい！さつきからせんぜん話にならねえ！！

清水は俺の言葉に耳を貸さずにどこに隠し持っているんだよ、つてつっこみを入れなくなるような量のナイフやフォーク、果てはスプーンまで投擲してくる。

ちくしょう！こうなったら特攻して頭をぶん殴つてやる！！

……………なんて俺が前へと踏み出そうとした瞬間だった。

「アキ！」

「吉井君！」

「姫路に美波！？なんでここにいるんだよ！！！」

雄二に霧島といい、はやとムツツリー二といい、今日はやけに知り合いと会う日だな。なんて頭の片隅で考えながら俺はナイフを振るう手を休めずに二人に向かって叫ぶ。

「二人とも、ここは危ない！早くこの場から逃げる！！！」

「そうはいきません！」

「そうよ！」

二人は強い意志を秘めた瞳で俺を見据えてきた。いつたい、どうしたって言うんだ？

「「フェイト（ちゃん）とのデートのこと、じっくり聞かせてもらいます（わよ）……！！」」

「今まったく関係ねえだろ、それ!？」

何でこの状況でそんなこと聞いてくるんだよ!？明らかにそんなことやれる訳ないだろ!

「さあ、じ〜〜〜〜〜っくり聞かせてもらっわよ、アキ!」

「ま、待（ヒュン!）おわっ!今はそんなこと言ってる時じゃ（ヒュン!）ねえだ（ヒュヒュヒュン）があ

「!!!!!!」

「はっ!お姉様!？美晴に会いに来てくれたんですか!？」

「げっ、美春!？」

おっ、投擲が終わった。今のうちに逃げよう。

清水：今度会ったら思いっきりその螺子が抜けまくった頭をぶん殴ってやる。

「吉井君っ!どこに行こうとしてるんですか!？フェイトちゃんとのデートのこと、ちゃんと答えてもらってませんよ!？」

「あ、アキ!どこに逃げようっていうのよ!！」

「お姉様

「!！」

ああ、カオスだ。

せっかくの休日だって言うのに全然休まった気がしねえ……。

そのまま店を出ようとしたんだが、その前にガシリと俺の腕が誰かに掴まれる。

「お客様、お会計がまだですが？」

「この状況でよくそんなことが言えるな、オイ！」

ナイフとフォークが飛び交い、壁や床に血痕（鼻血）がこびり付き、女子三人が騒ぎまわるといふ阿鼻叫喚な状況にも関わらず、通常時の接客をしてくる店員に俺は度肝を抜かされた。

とはいえ、払ってないのは事実なので俺はさっさと会計を済ませることにする。

「全部で合計三万八千五十二円で御座います」

「高え！」

あまりにも法外な値段に俺は再び度肝を抜かされた。

「お客様が本日台無しにした料理も込みとなっております」

「そこの螺旋頭が元凶だろうが！！」

さっきのカップルジュースの事といい、今といい、ここの店員は目が節穴な奴ばかりしか雇っていないのか！？

財布の中を見てみると、そこにいるのは諭吉が二人だけ。明らかに足りない……ちくしょう、このままじゃ……。

カランコロン

俺が冷や汗を流している時だった。誰かがこのカオス空間と化している店内に来店してきた。

「いらつしゃいませ、何名様ですか？」

「……カップル二人」

「って霧島!？」

来店してきたのは霧島と、若干皮膚の至る箇所が黒くなっていて、どこか焦げ臭さを漂わせている雄二だった。

……あれから雄二の奴、何があつたんだ？

「……よう、明久」

「お、おう……」

「男とは……無」

「それはもう聞いたぞ……」

生気が感じられない。もはや生きる屍と化したか。

だが今はそんな些末事は置いておき、とりあえず隣にいる霧島に声をかける。

「霧島!金持っていないか!？」

「……どうしたの、吉井？」

「訳は後で話す!今は一分一秒も早く行かなきゃ行けないんだ!!--
そのために金が必要なんだ!!--」

この際だ。恥も何もかもかなぐり捨ててやる。

俺は霧島の肩をつかみ、その瞳を真正面から見据えて告げる。

「頼む！金は後で返すし、利子で雄二を一日好きにしていいいから！」

「ぶっ！オイコラ明久、何勝手に決めてんだ！！！」

あっ、なんか知らないけど雄二に覇気が戻ってきた。良かったな。

「……吉井、お金は返さなくていいから雄二を……」

「解った！雄二を三日ぐらい好きにしていいいぞ！！！」

「待てや！さつきから本人を無視して何を勝手に」

「……ありがとう、吉井はいい人」

「オイイ
！！！！！」

雄二の弁解空しく、霧島は財布から一万円札を何枚も出して払ってくれた。すまない、霧島。この借りは必ず返す！

「ありがとう、霧島！！！」

「……吉井も、ありがとう」

礼を言うのはこっちだというのに、霧島はこんな俺に感謝の言葉を告げてきた……くう、なんて心の広い人だ。雄二なんかには勿体無いくらいだ。

「ありがとうございます！」

店員の声を聞き流しながら俺はそのまま走り出す。とりあえずは自身の安全確保からだ！フォルトを通じてバルディッシュか、なのはレイジングハートに連絡を……。

「あつ、待ってください吉井君！」

「待ちなさいよ、アキ！」

「お姉様

！！」

くそお！さつきまで清水がいい感じで壁になっていたって言うのに、その壁と一緒に追いついてくるなんて！！

内心で冷や汗を流しながら走る速度を上げようとした時だった。俺の隣を誰かが追いついてきた……って。

「雄二！？なんでここにいるんだよ！？？」

「うるせえ！」

「てめえ、さては霧島の所から逃げやがったな！」

あんな優しい女性から逃げるなんて信じられない。なんて腐った奴なんだ！！

だが今はこいつに制裁をしている暇はない。今はとにかく逃げることに集中だ！運が良かったな、雄二！！

「吉井君、今度は坂本君とデートですか！？」

「フェイトの次は坂本って訳！？どこまで節操がないのよ、アキ！」

「なんでそうなるんだよ!?!」

「こいつとデートだなんて胸糞が悪くなってくるような事誰がするか!！」

だが弁解している暇などというものもない。ちくしょう!

「……雄二、逃がさない」

「冗談じゃねえ!こんなところで俺の人生終わってたまるかあ!！」

「待つてください、吉井君!ちゃんと質問に答えてください!」

「待ちなさい、アキ!！」

「嫌だ!なんか解らないけど、待ったら確実に不幸な目に会いそうな気がするから!！」

ああ、なんでこうなったんだ!?

今日はフェイトとの初デートだっていうのに、途中からなんで地獄の追いかけっこに変更されてるんだ!?!今日は厄日なのか!?!?

だが相手はそこら辺にいる(?)女子高生。

自分達は訓練を受けた魔導師。

充分逃げ切れる可能性は極めて高いはずだ!

「捕まってたまるかあ」

「!?!?!」

「待ちなさ」

「い!?!?!」

結局、俺の予想とは裏腹に、日付が変わるまで俺達の追いかけては続いた。

……………最近の女子高生って……………怖い。

第九話（後編）（後書き）

大変長らく間が空いてしまいましたが、次回から清涼祭編に入ります。

第十話（前書き）

若干遅れましたが投稿します。

第十話

明久サイド

「失礼しましたー」

職員室から出てきた僕は、一つのを肩に担いでいた。

肩に担いでいるのは、僕が愛用しているエレキギター。学園祭の出し物の提案として、今日は特別に持ってきていた。

授業にはまったく関係の無いものなので、没収される前に担任である鉄人に事情を話して、この時間まで預かってもらっていたんだ。

ただ僕がギターを持ってきた訳を話したとき、やたら安心したような雰囲気を見せたのは気のせいなのかなあ？

まあ、それは置いていて。

文月学園は今、清涼祭という学園祭を開催する時期になっていた。

新学期最初の行事である学園祭は、世界的にも注目されている文月学園は、毎年多くの来場者が殺到している。学園側としても、召喚獣システムの宣伝として、新たなスポンサーを手に入れるための絶好の機会でもあり、こういった祭りごとに関しては出し惜しみはしていない。

現に我らがFクラスも、学園側が出す費用もAクラスと比べれば多少劣るけど、あくまで多少であって、通常の費用と比べると結構な金額が渡されている。といっても、無駄遣いされないように鉄人がきっちり管理してるけど……。まあ、それについては置いておく。僕の目的は別にある。

僕ははやての体調を気にして、劣悪な環境であるFクラスを少しでも学園祭で少しでも稼ぎを出して、設備を向上しようと考えていた。

廊下を歩きながら周囲を見渡してみる。

お化け屋敷にするために教室を改造しているクラスもあれば、焼きそばのために調理道具を手配するクラスなど、みんな清涼祭に向けて出し物を決めて行動しているみたいだ。

だというのに……うちのクラスは……。

「はあ…少しは真面目にやってほしいよ」

思わず愚痴ってしまう。

みんなが学園祭の準備をやっているというのに、うちのクラスだけは未だに出し物が決まっていなかった…さすがに今日くらいはちゃんと決めておかないとマズイ。

雄二だってそれぐらい解っているとは思っ…多分。

「？」

ため息を吐きながら歩いていた僕の耳に、ピアノによる合唱が聞こえてきた。

「この曲って……We are The world？」

『どこかのクラスが、クラス発表で歌うのでしょうか？』

首に下げているキャリ……フォルトが僕にそう聞いてくる。おそらくだけど、フォルトの言葉は合っている。

文月学園では出し物と一緒に、各クラスごとの発表が必ず毎年行われている。

出し物はさっき説明したみたいなお化け屋敷とか、喫茶店とか、そういうもの。

クラス発表って言うのは、クラスごとに決めた一発芸を披露する

もの。演劇や、お笑い劇、落語、あるいは…今聞こえているクラシックの合唱とか。

でも…なんというか……。

「ちよつと、音痴っぽいなあ………」

さっきから聞こえる歌声は、必要の無い部分で音程が上がったり、途中で途切れたり、なんというか…正直、微妙としか言いようが無い。それも全体的なものではなく、個人個人で不調な部分があるのが聞き取れる。まあ、誰かは離れすぎているから特定できないけど。それに耳を傾けつつ、音源である場所に歩いていくと、そこはAクラスの教室だった。

「相変わらず広いなあ………」

などとぼやきつつ、高級ホテルのような環境の教室を覗き込んでみると、そこにはピアノを弾いている霧島さんと、We are The Worldを歌っているAクラス生徒が数人いた。よく見れば、歌っている人の中には見知った顔が入っていた。

霧島さんが僕の事に気付いたのか、ピアノを弾いていた手を休めて僕のところに歩み寄ってきた。

「……吉井、どうしたの？」

「職員室に預けてたものを取りに行った帰りに、We are The Worldの曲が聞こえてきてね、気になったから来てみたんだ」

霧島さんは成る程、というと僕の周りを見渡す。

どうしたんだろう、などと野暮な質問はしない。これは彼女にと

つては重要なことなんだから。

「あー、雄二なら教室にいるよ。学園祭の準備でね」

「……そう、残念」

「今度雄二にあつたら言っておくよ。霧島さんが寂しがってるって」

「……ありがとう、吉井はいい人」

「それほどでも、じゃあ…練習頑張って」

「……吉井達も、頑張って」

霧島さんの言葉に手を振って応えながら、僕はFクラスの教室に戻った。

「ただいま」

「あつ、おかえり、アキ」

「美波、教室での出しも……あれ？」

教室に戻った僕は、一瞬目を疑ってしまった。
目をこすって再度確認してみる。

まず最初に目に入ってくるのは、相変わらずの劣悪な環境 御座とみかん箱に、ボロボロな天井、隙間風が入る壁 に置かれている教室、そしてみかん箱の机で窓の外を見ながらため息を吐いて

いる女子……フェイトになのはに姫路さんに美波を一瞥してから周りを
見渡してみても……。

「なんで教室に人がほとんどいないの？」

「あれだよ、アキ君」

なのはがそう言ってやや呆れたような口調で窓の外を指差す。窓
の外は調度グラウンドが見下ろせる位置にあつて、そこで何が行わ
れているかというところ……。

「プレイボール！」

野球が行われていた。

さすがはFクラス。学園祭の準備期間だというのに、まったく真
面目にやる気がないみたいだ。
しかも。

「さあ、来い！八神！」

「ふっ、勝負やで！須川君！！」

「お前の球なんか、場外に吹っ飛ばしてやる！」

「言ったな……その言葉、後悔させてやるで！」

「負けるな！はやてえ

！……」

僕がやる気を出して学園祭の準備をやるうと思っっている理由の中心人物であるはやと、僕の考えに賛同して、力を貸してくれている協力者のヴィータまでも一緒に参加していた。

「なんでさ……」

思わずどこかの剣製の男の口癖を呟く僕。

今から呼び戻しに言っても僕なんかじゃ力にならないだろうし……どうすればいいんだろう……。と、窓の外で行われている野球から目を離さないで思案しているときだった。

キャッチャーである雄二が、ピッチャーのはやてに何かサインを出していた。

ちよつと気になったので、僕の近くに置かれているムツツリー二のみかん箱の中から、双眼鏡を取り出してサインを見てみる。

雄二とは長い付き合いだし、サインの内容ぐらい解るだろう……えーっと内容は……。

『次の球は』

ふんふん。

『カーブを』

カーブ、を？

球種の指示だけじゃなくて、カーブの軌道も指示するのかな？

『バッターの頭に』

「「それって反則でしょ（やる）！？」」

思わずつつこんでしまった。

たしかにそれならバッターに打たれる事も無いけど、なにか違う気がする。

しかし指示を出した雄二は特に気にする事も無く。

「遠慮するな、来い！」

「遠慮するっちゅーの！」

立ち上がってバッターの頭の後ろにミットを構えていた。それも特に悪びれたような様子もなく、平然としている。

雄二、相変わらず面の皮が厚すぎる……一応管理局員なんだから、もうちよつと悪びれてほしい。

ため息を吐いて双眼鏡を外した瞬間、どこからか怒鳴り声のようなものが響いてきた。

「「貴様ら、何をやってるか！！」」

あつ、僕が行くまでもなかったみたいだ。

怒髪天をつくばかりの勢いで僕らの担任、鉄人 別名、西村先生 と、副担任のシグナムが、校舎内から走ってきた。あの勢いだと、確実に全員鉄人の鍛え上げられた体とシグナムの精錬された剣技でボコボコにされるだろうなあ……。

「げっ！鉄人！！」

「げっ！劉備！！」

「誰が鉄人だ、八神！」

「誰が三国志の英雄だ、坂本！」

二人して担任と副担任のあだ名を叫びながら逃走し始める。
ちなみに最近になってだけシグナムは劉備と呼ばれ始めたみたいだ。

鉄人の怒号と、シグナムの凜とした一声が響くたびにクラスメイ
トの悲鳴がグラウンドに轟きまくる。やれやれ、真面目にやらない
からこういった目にあうのに……普段、僕があっち方面にいるって
言うことは置いておこう。うん。

「おい、鉄人！俺達をこんなところで追ってていいのか！？」

この声…須川君？

「どういうことだ、須川！」

どうしたんだろう…今更悪あがきなんて見苦しいよ？

「主犯である吉井はとっくに校外に逃げたんだぞ！」

あの野郎、僕を人身御供にしたな！？

人を簡単に斬り捨てるなんて、なんて奴だ！さすがは異端審問会
会長様だよ！

「そっか須川、お前の言いたいことは解った」

「解ってくれて何よりです、鉄人」

鉄人は神妙そうな表情で頷いていた。鉄人の表情を見てか、周りの
クラスメイト達もどこか安心しきったような顔になっていた……

けど。

「お前がどうしようもないバカだと解った!！」

言い切つて鉄人は須川君の頭を鷲づかみにして空中へと持ち上げた。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ!！」

須川君の悲鳴が響き渡る。あれつて見た目に反してももの凄い握力で握られているから痛いんだよなあ……うん。

「て、鉄人!? 一体何を……」

「バカ者共が! 吉井ならさっきまで職員室でクラス発表の事について俺と話をしていたんだぞ!！」

「『『『そんなバカな!?!?!』』』」

クラスメイト達の絶叫が響き渡る。

そう、僕はついさっきまで鉄人と一緒にクラス発表の事について語っていた。しかも証人は僕と一緒にいた鉄人なのだから、僕を犯人に仕立て上げようとしても無駄なんだよね。
なのに……。

「騙されるな鉄人!」

「それはきつと吉井に似た誰かだ!」

『あの頭の悪い吉井がそんなことをするはずがない!』

酷い言われようだ。

「黙れ!お前らに吉井を批判する資格などない!」

シグナムの一喝によって黙る面々。美人が怒るのって怖いもんね。

「八神先生の言うとおりだ!さっさと教室に戻れ!!あのバカな吉井でも、しっかりと真面目にやっているんだぞ!!」

フオローになっていないような気がするのは気のせい?

魂まで届きそうな鉄人の恫喝を受けて、彼らはしびしび教室へと戻っていった。

「それじゃあ、押し戻されてしもうたし...とつと出し物について決めようや」

そういつて実行委員を任されたはやてが教卓の前に立っていた。

こういったことは代表である雄二がやることなんだけど...あいつめ、はやてに実行委員を任せると同時に自分はさっさと横になりやがった...一応、僕がやろうと思っていることについてちゃんと話しておいたって言うのに...!!

はあ、しょうがない...あとであいつに発破をかける方法でも考えよう。

ちなみに僕は書記を任されている。こういったことではやてに協

力できるのなら、出来る限り僕はやろうと思っっている……彼女の家族を殺したのは僕だから、出来る限り力になってあげないとね……
…。
っと、暗くなっちゃいけないよね。気持ちを切り替えて始めないと。

「それじゃあ、ちやっちゃと決めようや。クラスの出し物でやりたいと思うものがあれば、拳手頼むで」

はやてが告げると、何人かが手を上げた。全員がやる気なしって訳でも無さそうだ。

「はいっ、康太君！」

「……………写真館」

「……………なんか危険な香りがするんわ気のせいやるか？」

はやてが若干ひきつった様子で呟く。

確かに女子からしてみればムツツリーニの写真館は嫌なのかもしれない。けれど僕ら男子としては宝石箱のような空間だ。犯罪臭がブンブンするけどね。

「アキ君、一応候補やから書いてくれへん？」

「了解」

そういつて黒板に書くこととしたけど、はやてがちょっと待ってと言っ止める。

どうしたんだろう？

「アキ君、この際やからついでにタイトルも決めといて。時間短縮や」

「えっ!？」

それって…つまり僕のネーミングセンスが確かめられるんだよね？

「頼んだで。ほれ、次の人」

ぐう！反論は認めないつもりか！！

しょうがない…適当に浮かんだ名前を書くしかない……これでどうだ！

【候補？ 写真館『宝物庫』】

「横溝君」

「ウェディング喫茶って言うのはどうだ？」

「ウェディング喫茶？それってどういうのや？」

「ウェイトレスが、メイド服とかじゃなくてウェディングドレスを着ているんだ」

中身は普通の喫茶店だけど、これはこれで結構面白いかもしれない。

さてと、さっさと名前を書いておこう。さっきのは考える時間が少なかったけど、今度は多少マシなはず。

【候補？ ウエディング喫茶『Marriage Cafe』】

うん、我ながらナイスネーミングセンスだ。

それにしても短いチョークだなあ。書きにくくてしょうがないよ。

「はい、次」

「はい！」

「須川君」

次は須川君か…もしアイディアがろくな物じゃなかったら…その時は楽しみにしてくれ須川君。僕の愛剣を使って頭が割れる痛みと同時に素晴らしい世界へ君を誘ってあげるよ。

「俺は中華喫茶を提案する！」

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていう魂胆なんか？」

「いや、違う！俺の提案する中華喫茶は本格的な烏龍茶と、簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうっていうワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという」

な、なんかよく解らないけど、相当やる気みたいだ。

とりあえず聞き流しながら名前でも考えておこう。ええと、中華喫茶だから…よし、これで行こう。

【候補？ 中華喫茶『老飲飯店』】

Fクラスの雰囲気から、中国の老舗って感じに見せれば大丈夫だ

よね。

とりあえずこんなところかな……なんて思いつつ、振り返った瞬間。

バン！

大きな音が響く。はやてが教卓を思いっきり叩いた音だ。い、一体どうしたの？

「甘い！」

言い放つと同時にはやては強い視線でみんなを見据える。この感じ……まるで試召戦争の時の雄二みたいだ。

「みんな……さつきから甘すぎるで！こんなんじゃ他のクラスと然して変わらん！」

「そ、そうなの、はやて？」

美波が若干引き気味に言うけど、はやては大きく頷くと黒板を叩きながら熱弁を振るう。

「ええか！来客してくる人はみんな、刺激を求めてるんや！この学校は、召喚獣システムを導入している唯一の学園！来客してくる客の数は半端やない！！」

たしかに……文月学園はそれがウリみたいなものだし、来客する人も、召喚獣というおカルトなものを間近で見ることが出来るのを楽しみにしている人も多いだろう。

「じゃあ、もつと凄い出し物にするんですか？」

姫路さんが首を傾げながら質問してくるけど、はやてはニヤリと笑うと告げる。

「いや、私たちはここであえて『癒し』をテーマにしたものにしてみようと思っんや」

「「「は？」」」

Fクラス一同、思わずポカンとしてしまう。僕も同じように呆然とはやてを眺めてしまう。

はやての言葉は明らかに矛盾している。

来客してくる人たちは、みんな召喚獣システムという未知な物に刺激を求めてここに来る。

それでどうして癒しなんていう刺激とは対極なものを？

「みんなの疑問も当然や…けど考えてみるんや、新学期から少し経った時期は、誰もが疲れ始めてくる季節なんや」

「どういこと？」

「新しくスタートした時期、勢いよくダッシュしたのはええけど、慣れない環境で頑張ったりしていると、どうしても疲れてくる。少しでも気分を変えようと、こういったイベントに行ってみたりするけど、それでも精神的に疲れてたりする人が必ずいるはずや」

たしかに……心機一転、頑張るぞ！みたいな感じで頑張ってみたけれど、人間ってというのは正直な体をしているから、どうしても疲れが出てくる人がいるはず。今は学生っていう身分に『一時的』に属してはいるけれど、僕らだって社会人。解らなくはない。

「人間にとつての最大の癒し…それは睡眠。眠る前や眠りから覚めた直後つて、気持ちええやる？」

はやての言葉にうんうん、と納得するクラスの面々。
たしかに、まどろみの時間つてどうしようもなく気持ちいいんだよね。

「私が提案するのはそんな癒しを兼ね備え、尚且つ刺激を求めに来たお客様も満足出来る模擬店なんや…その名は……………」

勿体付けるようにはやてが一呼吸置く。

思わず生唾が出てきて、それをゴクリと飲み込む。一体どんなものなんだろう。

「題して、パジャマ喫茶や!!」

……………はい？

パジャマ喫茶？それつて…ただ単にウェイトレスがパジャマを着るだけの喫茶店なんじゃ……………。なんて咳こうとした時だった。

「……………なん、だと……………（ブシャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!）」

ムツツリーニが何を想像したのか、鼻血を噴き出してその場に倒れこむ。

えっ!?!今の会話にそんなに刺激が強そうなものあつたっけ？

「それつて単にパジャマを着ているウェイトレスがいるだけの喫茶

店なんじゃないの？」

僕と同じ疑問を抱いた美波が、鼻血を噴き出して倒れているムツツリーニを傍目に見ながら、訝しげにはやてに質問してくる。

けれどはやてはチツチツチと最近では若干懐かしく感じられるリアクションを取ると、胸を張って告げた。

「ええか、眠る前っていうのは、一番心を落ち着かせなきゃいけない時間や……そんな時間帯って、大抵はパジャマやる？」

「まあ、そうだけど……」

「室内を少しだけ薄暗くして、ろうそくのような灯りにほのかに安心できるような香りのアロマセラピーを使い、ほっと一息つけるような紅茶やココアを出したり、お菓子みたいな寝る前に少し食べておきたいなあ〜っていうものを出してみたり、そんなうつつと落ち着けるようなひと時をお客様に味わっていただくのが、私の出す『癒し』や」

「へえ〜…なんか、いいかもしれないわね」

「そうですね。それにパジャマですから、衣装代もあまりかかりませんし」

たしかに費用もあまりかからないし、浮いた費用を別の場所に回せるから、これはこれでいいのかもしれない。

「ちなみに私が着るパジャマやけど……」

「……………！！（カチャカチャ！）」

はやての言葉に反応して、ムツツリーニが起き上がってカメラの調整を始める。相変わらずこういうことだけは早いなあ……あとで交渉せねば！

ムツツリーニとどんな風に交渉するかを考えていると、はやてがとんでもないことを告げた。

「聞いて驚き、大きめな男物セーターや！」

「……なんだとお！？？」

Fクラス男子全員が驚愕の声を上げる。

はやてみたいな美少女がぶかぶかのセーターを身に付けるだなんて……なんて、なんて素晴らし、いやいや、けしからんことなんだ！！

「さらに驚きい……そのセーターは……Vネックなんやで！」

「……ぐはっ……」

ぐお……今の言葉で何人かが倒れこんだぞ……僕も今の言葉は危うかった。これはますますムツツリーニとの交渉を本格的なものにしなければ……！！

だがはやては更に追い討ちをかけてくる。

「ちなみに、ズボンはないで」

「……」
「……」
「……」

Fクラス男子、はやての『突き穿つ死翔の槍』ゲイボルグによって見事に心臓を貫かれ、その場に崩れ落ちる。

ちなみに僕はなんとかこらえる事が出来た。はやて……なんて恐ろしい娘……！

けれど今の発言でなのはやフェイト、姫路さんや美波は若干だが不服そうな雰囲気になっていた。まあ、たしかにこういったイロモノ路線は女子にとつてあまりいいものでもないよね……なんて思ってたなら、はやてが再びとんでもない発言をした。

「ちなみに、アキ君には執事服を着てもらつて」

僕に向かって……って、なんで……？

「はやて……？なんで僕が執事服なんて着るの……？」

「アキ君って結構、執事の才能あると思つんや……！」

「何を根拠に……？それに、執事服なんて僕に似合つわけが……」

「ほれ」

カチャリ、という音と共にはやてが僕にメガネをかけてくる。視界が可笑しくはならないから、度が入ってない伊達メガネみたいだ

けど…突然、何を？

……なんて思ってたなら、クラスメイト、特に女子達の視線が僕に集まってくるのを感じた。えっ？どうしたの？

「あ、明久……」

「よ、吉井君……」

「あ、アキ……」

みんなどうしたんだろう？

あごに手を添えて考えてみる仕草を見ると、息を呑む気配が伝わってきた。本当にどうしたの？

「どや？このインテリメガネ&執事服姿のアキ君…見てみたいと思わへんか!？」

「『『見たい!!!!!!!』』」

女子達が一斉にはやての言葉に賛成してきた。

えっ？マジで僕、執事服着るの？

……………。

「はあ」

ため息を吐きながら黒板にチョークでパジャマ喫茶を書く。まあ、途中からおかしな流れになったけど、とりあえず癒しをコンセプトにしているのは間違いないだろうし、それなら……………。

【候補？ パジャマ喫茶『Good Night』】

よし、これで大丈夫なはずだ。

と、書き終えたところで、筋骨隆々のごつい身体と、それに見合った顔を持つ男と、凜とした女騎士の女性が現れた。

「みんな、清涼祭の出し物は決まったか？」

先ほど、僕以外の面々を追い掛け回したFクラス担任と副担任、鉄人と劉…シグナムだ。

「今のところ、候補は黒板に書かれてある四つやで」

【候補？ 写真館『宝物庫』】

【候補？ ウエディング喫茶『Marriage Cafe』】

【候補？ 中華喫茶『老飲飯店』】

【候補？ パジャマ喫茶『Good Night』】

「真面目にはやっているようだな」

「ちなみに、これからこの四つの中からどれがええか多数決で選ぶうと思ってるところや」

はやてはそういつて決を採る。とはいっても、さっきの流れからして、なんとなくだけど結果が見えているような気がする。

【パジャマ喫茶 『Good Night』】全員

満場一致でパジャマ喫茶がFクラスの出し物として選ばれた。
まあ、当然だよね……選ばれた瞬間、はやてはニヤリと笑うのを僕は見逃さなかった。

はやて……まさか計算付くでこうなるように事を運んだっていうの！
？おかしい、彼女の頭とお尻から狸の耳と尻尾が見える……。

「クラスの出し物は決まったようだな……それでは吉井、クラス発表にお前が考えていたものを発表しろ」

「あつ、はい！」

鉄人の言葉に反応し、僕は壁に立てかけているギターケースを手にし、みんなに見せる。

深呼吸をしてから、僕はゆっくりと告げた。

「僕らFクラスのクラス発表は、バンドライブにしようと思います
！」

僕は今まで考えていた案を堂々と宣言した。

第十話（後書き）

次回はもう少し早めに投稿したいです…

第十一話（前書き）

今回はオリジナル歌詞が登場します

第十一話

清涼祭の準備が始まってから三日目。

僕らFクラスは着々と準備を進めていた。

この前までどうやって鉄人の目を逃れて遊びに徹するか、なんて考えてる奴らがいたけど、『利益を出して設備をよくする』という言葉にやる気を出したみたいで、みんな率先して準備を手伝っていた。

まず教室を綺麗にする。これが一番大変な作業だけど、汚い喫茶店だとお客さんも入ってこないだろうから、一番やっておかないといけないことだ。

店内の間取りだけど、ここではなのはがその腕を振るってくれた。喫茶店を経営している親を持つ彼女だからこそ、どこにどんな風に配置すればお客さんが満足できるかななどを熟知しているので、とても役に立ってくれた。

そして僕らはというと……。

「えっと、メニューはコーヒーにカフェオレ、ココアにジュースに……あと、緑茶かな？」

「せやな、寝る前に飲むものは基本的にそんなところやる」

「……………食べるものは、大体こんな感じでまとめてきた」

「おっ、サンキューやで康太君」

僕とはやて、そしてムツツリーの三人でメニューを作成していた。どうやら、料理が得意という理由で僕ら三人が選ばれたらしい。ちなみにこの組み合わせは姫路さんは絶対に厨房に入れさせない

ための布陣でもある。清涼祭で食中毒などという悲しい連鎖を生み出すわけには行かないから、ここで断ち切らせてもらおう。ただ一つ、今の僕らの格好がなぜか……………。

「「なんで、執事服？」」

なぜか僕とムッツリーニは執事服を着せられていた。

「細かい事気にしたらあかんで、二人とも！」

そう言ってバチコーン！とウィンクするはやて。

というか、どこからこんなもの調達してきたんだはやて。

「すずかちゃんの家からや」

はやての言葉に、僕は思い出す。

かつて、僕と一緒に遊んでくれた二人の女の子を。

月村すずか。

アリサ・バニングス。

遊んでいた時期はとも短かったけど、それでも僕の思い出の中にはしっかりと刻まれていた。

二人とも、元気かな……………。

というか。

「ねえ、なんですすずかが執事服なんかを貸してくれたの？」

これが気になる。なんで僕とムッツリーニなんかに執事服をわざわざ二着も貸し与えてくれたのが。

するとはやては僕の肩にポン、と手を置くと。

「面白そうやからに決まってるや！」

「そんな理由で!?!」

忍さん：月村家現当主はそんな理由で僕らに執事服を貸し与えたっていうの!?!

さらにはやてはニヤニヤしながら僕らにとんでもない事を告げてきた。

「安心し、しつかりと鮫島さんが一人に執事というのはなんたるのかを教えてくれるらしいから」

「はいい!?!」

鮫島さん!?!鮫島さんって…アリスの家の執事だったよね!?!あの方が指導するって…マジで?

「週末には迎えが来るはずやから、二人とも、きっちり教えてもらおうやで?」

はやての言葉に、僕は言葉を失ってただ呆然とするしかなかった。僕が呆然としていたとき、後ろからチョンチョンと叩かれ、振り返るとそこには皿の上に箱を手に持ったムッツリーニがいた。

「……………試作品」

「あつ、ムッツリーニも持ってきたんだ」

「……………も、という」

「僕も持ってきたんだ。特性ケーキ」

「ほほう、それは楽しみやな」

キラーンという擬音が聞こえてきそうなのはやてに苦笑しながら、僕とムッツリーニはちゃぶ台の上にそれぞれ作ってきたものを置く。

「……………チーズケーキ」

「僕はチョコケーキを作ってきたよ」

寝る前に楽しみに取っておいたスイーツを食べる人は多いと思うから、今回はケーキを作ってきたんだ。

ムッツリーニのチーズケーキは真っ白な矩形に艶やかな赤いソースがかかった、いかにも高そうな雰囲気を持ったケーキだった。なんか見た目からとても美味しそうなお困りだなあ……。

対して、僕のケーキはテイラミス風味の形状をしたチョコケーキで、濃厚なチョコの質感と食感を楽しんでもらえるように作った特性ケーキだ。

「それじゃあ、試食どうぞ」

「……………自信作」

そうやって僕らは姫路さんや美波、なのは、フェイト、はやて、ヴィータ達女性陣に、雄二、秀吉にもついでに手渡しておく。

で、評価は……。

「美味しい……チーズケーキは濃厚な味わいで……はう……………」

「ホント……チョコケーキは少し苦いけど、でも口の中に広がる」
の風味が……」

「美味しい……これに香りが良い紅茶を付け足すと、もっといいかも
しないよ」

「あつ、それいいね。なんだかホツとする組み合わせかも」

よし、かなりの好評価だ！

「実は私も作ってきたんや。とはいってもついさっきやけどな」

そういとはやては木のお盆を取り出す。その上には六つの胡麻
団子が乗っていた。

「それじゃ、召し上がれ」

「「「いただきます」」」

姫路さんと美波とフェイトが皿の上に乗っている胡麻団子を一つ
ずつ口に運ぶ。

「わぁ……こつちも美味しいです」

「ホント……外側がカリカリで中はモチモチしてる」

「甘すぎないところがいいなあ」

と、大絶賛。やっぱり女の子なんだなあ。甘いものが大好きみた
いだ。三人とも。

「それじゃあ、僕も一つ」

「召し上げれ」

団子の一つを手に取り、口に運んで咀嚼する。

「ふんふん、外はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎず、ねっとり喉を焼き尽くす酸性の痛みがとつても
「ぐべば」

僕の口からありえない音が漏れた。そして目に映るのは僕の十六年間の日々。辛いことや悲しい事もあったけど、それなりに素晴らしい人生を……って危なっ！これって走馬灯じゃないか！！

けれど僕の身体は動いてくれない。まるで金縛りにあったようだ……。

「どっしたのじゃ！明久！？」

「八神！それは本当にお前が作ったものなのか！？」

秀吉と雄二の絶叫が響く。あっ……やばい、段々と意識が……。

「たしかに私が……っ！私が作ったのは三つ！なんで増えとるんや！？」

「症状から察するに、姫路の作ったものじゃな」

「危ねえ……確立二分の一のロシアンルーレットじゃねえか！」

「……………取らなくてよかった」

「おい、しつかりしろ明久！まだ死ぬには早いぞ！！」

ヴィータの叫びが木霊しながら、僕はゆっくりと意識を失った。

そして教室の改装が大体済んだ頃だった。

「じゃあ、みんなに考えてもらった歌詞を発表してもらおうよ」

なんとか蘇る事が出来た僕は、クラス発表に向け作った歌詞をみんなに手渡そうとしていた。

最初はみんな色々戸惑ってたみたいだけど、今では割とノリノリで協力してくれていた。

ちなみにバンドのメンバーは、ギターは僕、ドラムは雄二、キーボードは秀吉、ベースはムッツリーニが担当してくれている。

そしてボーカルはフェイトとなのはの二人に任せることにした。その時なぜか姫路さんと美波は僕に怨嗟の視線を投げかけてきてたけど……………。

ちなみにこのメンバーになった理由は、僕と雄二は前からギターとドラムを使って適当にやっていた時期があって、秀吉は演劇部で使う機会があったから、ムッツリーニは紳士の嗜みとかで覚えていられるらしい。ギターをやるのが紳士の嗜みなのかどうかはこの際置いておくけど。

「それじゃ、まずは僕の歌詞から見てもらおうね」

そう言って僕はみんなにコピーした歌詞を手渡していく。

ロックとバラードの二つだけしかないけど、それでも会心の出来だと思った二つを持ってきたから大丈夫だと思う。
まずはバラードの方からみんなに配ってみる。

『Same days』 作詞 吉井明久

どうしたの 疲れたのかい それならそこで休んでいかないか
旅の途中で休む僕ら 缶コーヒー片手に君は語りだす
私たちはどこまでできたのでしょうか それに答えられる僕はいません
ただ黙って俯く僕に 君は何を思ったのだろう

ああ そういえばあの時も同じだった
答えが出ずに俯いた僕と 答えが出せた君 君がまぶしくて僕は
また俯いた

Same days あの日からちつとも成長できない僕
いつまで経っても前が眩しすぎる だけど足元見ないと怖くなる
君が前に立ってようやく前が見えた気がした

口にした缶コーヒーは少しだけ苦かった

どうしたの 道がわからない 地図を片手に立ち尽くす僕ら
目の前の道で 排気ガスを出して走る青い車を見送った
私たちはどうすればいいのでしょうか 不安な君の手を僕は握る
本当は不安で一杯な僕に 君は何を思ったのだろう

ああ そういえばあの時も同じだった
暗いトンネル潜る時 君は震えながら 僕の腕にしがみついていた

たね

Same days あの日からちっとも変わらない君
怖がりな君はいつも僕を頼ってたね それが少しだけ嬉しいんだ
君が凄く近くに感じられたから

青い車を追いかけるように僕らは歩き出す

いい加減 そろそろ家に帰らないか

諦めモードな僕だけど 本当はもつと君と一緒に頑張りたい
もつと頑張りたいから 重い身体を引きずって 君はまた歩き出す

足元がおぼつかないよ 本当に大丈夫なの

それでも君は歩き続けている

そんな君に少しだけ苛立って 少しだけ羨ましくなる
立ち止まった君は 寂しそうな目で僕を見てた

ああ そういえばあの時も同じだった

ボロボロな君に 僕は肩を貸してあげて歩いていた

Same days あの日からちっとも変わらない僕ら

無理しすぎる君と その隣で支えてあげる僕

気付けば隣にいる僕ら

Same days あの日から変わってない僕ら

それでもいい 同じ道を歩いていた僕らは 少しだけそう思えた
気がした

「へえ…やるじゃねえか、明久のくせに」

「ホント…アキが作ったのじゃないみたい」

「すごいや、アキ君！これ、ものすごくいい歌だと思うよ！」

「そうですね…なんだかじんわりと優しい気持ちになれます」

「ありがとう、みんな」

うん、皆からいい印象を得ることが出来たみたいだ。僕も会心の出来だと思っしね。

もう一つ…ロックの方も中々の評価を得ることが出来た。

「ふっ、まだまだだな。吉井」

「へっ？」

突然須川君が不敵な笑みを浮かべながら立ち上がった。どうしたんだろう？

「吉井、バカなお前が頑張った事は認めよう…だが！俺の最高傑作には遠く及ばないということを思い知らせてやる！！」

言いながら須川君はコピーした歌詞を僕らに配る。あれだけ大見得切ったんだ。きつと須川君もそれなりの作品なんだと思う……。

「見せてやるぜ…俺のソウルが宿った歌を！！」

『モテ王』 作詞 須川亮

HEY HEY 俺はMOTEW! 須川DA ZE!

今日も今日とて 可愛い貴女に告白さ

返事はいつも同じなのさ

KISS KISS! 俺にKISS!

可愛いあの娘のハートは俺だけものさ もちろん綺麗な君もね

KISS KISS! 君にKISS!

俺の心は誰のものかって? それはね 君たち美少女だけのものなのさ

「「「却下」「」

「BAKANNA!?!」

満場一致で僕らは須川君の歌詞を一齐に破り捨てた。

正直これは酷すぎる。しかもこれ、ただ須川君の願望が書かれただけだと思う。

「ま、待て!なんでだ!なんでこれが却下されるんだ!?!」

「いや、これは却下されて当然だと思っぞ」

「せやせや、こんな歌詞でお客さんの心を驚?みにできるわけない

やる」

「バカな！？俺はすっかりと驚？みされたぞ！??」

「妄想の中の自分に酔ってんじゃねえよ」

雄二とはやてが冷めた目で狼狽する須川君を見据える。

自分の歌詞を一番だとは思わないけど、さすがに須川君の歌詞は採用されるはずがないと断言できる。

「な、なら、こっちならどうだ！」

そう言っつて須川君は鞆から一枚のコピー用紙の束を差し出してくる。おそらく、これも彼が作った歌詞なんだろうけど……正直、不安でしようがない。

そう思っていたんだけど……突然、周りにいた横溝君や近藤君、福村君が須川君の歌詞を読んで驚愕の声を漏らしていた。

「す、須川……あなた、これ！」

「ああ……それは俺達が創りあげた魂の一品だ」

「まさかこれを持ってくるなんて……」

「須川……あなたあ、漢だよ……」

な、なんかもの凄く感動していた。

どうやらあの作品は、須川君だけでなく、彼らも制作に加わったみたいだ。

よかった。いくら須川君がバカだといっても、他の人がそこに加

われれば、いい加点になるはずだ。三人寄らば文殊の知恵、っていうしね。

須川君は誇らしげな顔でコピーした歌詞をみんなに手渡していく。さて、どんなものなのかな……………。

「さあ…感じてくれ。俺達のソウルを!!」

「ワン、ツー、スリー!!」

横溝君の合図で彼らは突然歌い始める。

や、別に歌わなくても……………。

『サンキュー・青春』

詞 須川亮と異端審問会上級会員

歌 作

須川亮と異端審問会上級会員

(Y A H・Y H A青春! S A Y S A Y青春!) 須川

(夏服冬服スク水ブルマスパッツジャージ!) コーラス

ちよつとそこで教科書読んでる君

そんな本読んでないでこっち見てよ

外は夕立 傘がない

一緒に帰ろう 濡れながら

イエー! 最高! 濡れるって青春! 隣の娘のワイシャツが透けてる

Z E !

おっと それは指摘しない こっさり記憶とカメラに収めとく

オオ サンキュー 青春 ありがとう 青春

肌の上にあるチエツク柄が最高だ

廊下で異端者発見！急いで連行せねば！

学校でのいちやつき行為など許すまじ

俺とは愛を捨て 哀に生きる

それを忘れるな 処刑制裁だ

イエイ！最高！ボコるって最高！血の雨が教室に降り注ぐZ E！

おっと 女子が怖がつてる だけど覆面被ってるから無問題！
もっまんだい

オオ サンキュー 青春 ありがとう 青春

携帯のメルアド消すのを忘れるな

<イントロ>

「異端者には死を！」

「死を！死を！死を！死を！死を！」

うわやっべえ 鉄人が来る

そろそろ逃げないと補習室行きだ

オオ サンキュー 青春 ありがとう 青春

まだまだ楽しい事がある青春 サンキュー

(YA・YHA青春！SAYSAY青春！) 須川

(夏服冬服スク水ブルマスパッツジャージ！) コーラス

須川君達のリサイタルが終わる頃には、僕のHPはほとんど0に近かった。なんだろう、今ならデバイスの補助がなくてもスターライトブレイカー並みの魔法が使えるような気がする。

「みんな、どうだった？」

俺、やり切りました。なんて清々しい笑顔を見せる須川君に、僕は思わずイラッと来てしまった。

無言で立ち上がると、配られた歌詞を無言で回収し始める。回収しているとき、ほとんどの人が僕のやっている事に口出しはしなかった。

全ての歌詞を手元に回収し終わると、僕は雄二の下へと歩み寄る。

「雄二」

「ほらよ」

名前を呼んだだけで雄二は僕に何を渡せばいいのかを察してくれたいみたいだ。

雄二は鞆の中からハサミを僕に手渡し、僕はそれを受け取ると歌詞の束を床に置いて、その束の上に情け容赦なくハサミを突き立てた。

「ああああああああ！！吉井、何を！？」

須川君の絶叫が響き渡るけど、そんなものは無視して僕はそのままザクザクと何度も何度もハサミを紙の束にブツ刺していく。うん、いい気分だ。

「明久、トドメだ」

「了解」

第十一話（後書き）

感想を書いてくださる方々、ありがとうございます！

今回は忙しすぎて返信ができなかったので、ここで感想を書いてくださった皆様への感謝と謝罪をさせていただきます。

いつも感想を下さり、ありがとうございます！そして遅れて申し訳ございません。

次回も楽しみにしてください！

第十二話（前書き）

しばらくぶりの投稿です！

第十二話

夜の街。

人気のない森の中で蠢く、奇妙な異形の数々。

そしてその異形の群れの中に突っ込んでいく……僕ら、魔導士。久々に僕はエネミー退治に外に出ていた。

でも今回は違うところがある。

それは、僕の後ろには仲間がいるということだ。

「デイバイン・バスター!!!」

金色の杖の先端に赤い宝石を持ったレイジング・ハートを構えたのは、凄まじい威力を持った桃色の魔力砲を放ち、黒い靄に赤い光を眼のように携えた怪物であるエネミーを貫いていく。

「バルディッシュ」

『Yes sir. Harken form Setup.』

「はあああああああ!!!」

鎌状になった漆黒の杖、バルディッシュを構えたフェイトが、金色の刃でエネミーに向かって踏み込み、その漆黒の身体を切り裂く。

「イージス!」

『Yes 坊ちゃん! Arrow form Setup』

「坊ちゃんは止めろって言うてるだろうが!!!」

雄二がトンファー形態だったデバイスを變形させ、弓に変える。
……それにしても、相変わらず雄二って自分のデバイスに坊ちゃ
んって言われてるんだよなあ…似合わないのは解ってるけど、最近
ではそれに慣れてきている自分がいるから驚きだ。

「穿て…螺旋！」

雄二が呟くと同時に、雄二の手元にネジのように螺旋を描く魔力
矢が生み出され、それを雄二は番えると、弦を引絞って一気に矢を
放つ。

『t w i s t f l a s h』

ギョーン！という凄まじい音と一緒に捻じれた魔力矢が凄まじい速
度で空中に軌跡を描き、そのまま森の奥へと消えていく。

その後、凄まじい衝撃と共に爆音が森の中に響いた。

暗い森の中を閃光が闇を切り裂き、次いで木々が薙ぎ払われる爆
発が起きる。

一瞬、その轟音に耳を塞ぎそうになったけど、それを堪えながら
目の前にいるエネミーを、フォルトで切り裂く。切り裂いた部位か
らエネミーは一気に黒い霧へと霧散していく。

それを一瞥すると、すぐに辺りの警戒に戻る。

今回の場所は森の中だから、まだ周りにいる可能性が高い…と思
ったんだけど。

「明久、今お前が倒したので終わりだ」

「え？」

雄二がそう言いながら空から地面に降り立つ。
いったい何言ってるんだろう…そんな根拠も何もない事を…って、
雄二がそんなこと言う訳ないか。

「雄二君、どういう事？」

なのはが小首を傾げながら雄二に質問すると、雄二は自分の目を指差す。

「どういう事だろう。そこに何かあるのかな？」

「…おい、明久。俺の目に向かって手を伸ばすな」

「えっ、ここに何かあるんじゃないの？」

「んな訳あるか!!」

雄二が叫びながら僕に弓を構える。

「ちょ、いくら非殺傷設定があるかといっても、この距離でさっきの受けたら確実に入院するって！」

「はいはい、雄二君、さすがにそれ以上はストップ」

「ちっ、運が良かったな明久」

フェイトに窘められ、憎々しげに呟きながら雄二は構えを解く。

「…ふう、さすがに今のは本気で命の危機を感じたよ。」

「アキ君、今のはアキ君も悪いんだから、ちゃんと反省しなよ」

「うっ、はい……」

なのはに怒られ、僕は頬をかきながらため息をついた。
うう、なのはの言う事って基本的に正論だから反論し辛いんだよ
なあ……雄二、後で覚えてる。

「…で、雄二の目がどうしたの？」

「ああ、俺の目は魔力を込めると、遠くまで見えるようになるんだ
よ」

へえ…それは凄いや。

でもどのくらいの距離まで見えるんだろっ？

その疑問に答えるように、雄二はここから十数キロぐらい離れて
いる位置にある鉄橋を指差して僕らの疑問に答えてくれた。

「…そうだな、あそこの鉄橋に使われてるボルトの数くらいなら、
この距離から余裕で見えるぞ」

「本当に!？」

なのはが驚いた声を上げる。

僕とフェイトも、声には出さなかったけど雄二の言葉に驚いてい
た。

ここからあの鉄橋までかなりの距離があるよね!? 僕がここから
見ても、ただの赤い橋ぐらいにしか見えないのに、雄二にとっては
近くにある物と同じようなものにしか見えないなんて!

……あれ? でも、雄二の今の格好を見ると何か思い出すような
……。

あ。

「アーチャー？（ヒュン）あぶなっ！」

僕の右頬に魔力の矢がかすめる。

い、今のかわさなかつたら眉間に深々と刺さっていたよね！？いくら非殺傷設定があるっていつても、それで怪我しないって訳じゃないんだよ！？

まったく、親友になんてことを…。

「次は右目だ」

僕は親友という訳ではないようだ。

三本の魔力矢を弓に番えた雄二の鬼気迫るような言葉に、僕は押し黙る。

人には触れられたくないものがあるんだ、これ以上余計な詮索はしない方がいいだろう。雄二のためにも、僕のためにも。

なんてバカやってたら、突然東の空から光が差してきた。

山の頂から覗かせる暖かな光に包まれ、星が散りばめられていた群青の世界が、少しずつ蒼穹のものへと変化していく。

「もう朝になるのか…」

「そうだね…寝る時間は少ないけど、少しでも眠っておかないと」

僕と雄二の言葉に頷く二人。

さすがに学園祭が近くなってきたこの時期だ。少しでも眠って体力を回復しておかないと。

「それじゃあ、お疲れー」

「「「お疲れー」「」」

そういつて僕らはその森を去っていった。

「うっわ…これは……」

「いくらなんでも酷過ぎるよ……」

僕とフェイトは、いや、この場にいるほとんどの人間が、目の前の惨状に絶句していた。

あれから数時間後、僕らはボロボロの教室を少しでもどうにかしようとしていた。

いくらなんでも古汚くて、健康にも支障をきたしそうな教室ではお客さんは入ってこない、という翠屋の看板娘であるのはがそう言ったからだ。

で、早速カビが生えたボロボロの畳を床から剥がしてみた結果が、これだ。

「畳が腐ってるよ……」

「これは酷いな」

「……………健康に支障を起こす可能性が高すぎる」

目の前の惨状に、そろって僕らは嘆息する。

いくら学力最低クラスのFクラスだからと言って、健康に支障を

来たすような設備を教育機関が生徒にこんなものを提供してもいいのだろうか？

いくら学力重視の教育方針を取っていると言っても、最低限生徒の健康には気を遣うものだと思うし、教室の設備のせいで体調を崩して勉強ができませんでした、では本末転倒もいいところだと思う。どうしようか、と口を開こうとした瞬間。

「（吉井君、聞こえるかしら？）」

頭の中に響く、どこかで聞いた事のある声。

誰かが僕に念話で話しかけているんだと思うけど…この声、どこかで。

「あ」

「（ひょっとして、木下さん？）」

「（ええ、そうよ）」

木下優子。

秀吉のお姉さんで、僕らと同じ管理局の一員だ。

ただ戦闘向きではないそうなので、エネミーとの戦闘には参加してないから、今まですっかり忘れて…。

「（吉井君？今、余計なこと考えなかった？）」

「（滅相もございません）」

女の子の勘って恐ろしいよね。

美波然り、姫路さん然り、どうして彼女達は自分たちへの事に関

してはこうも鋭いのだろうか…女の子はエスパー？

「（まあいいわ、ちょっと例のシステムについて話したい事があるから、誰か一人連れて、屋上に来てくれないかしら？）」「

「（例のって…何か進展でもあったの？）」「

「（それについても、これから直接話すわ。じゃ、五分後に）」「

そう言っつて木下さんは一方的に念話を切る。

例のシステムが…最近エネミーとの戦闘のせいで全然進展が無かったから、ちょっと興味があるな。

さてと、誰を誘おうかな…ゲームとかだと、ここで選択肢が出るんだらうけど…現実にはゲームみたいに進む訳ではないから、誘う人間はちゃんと決めないと。

なのはは…この教室をどんな風に改装するかで悩んでいるみたいだから、却下。

雄二は…学園祭をサボるために教室から出てどこかでぶらついているので、教室にはいない訳だから、却下。

ムツツリーニ…姫路さんを台所に立たせないために外す訳にはいかないから、却下。

はやても同じ理由で却下。

ヴィータは…力仕事で大変そうだから、却下。
そうなる。

「フェイト、ちょっといい？」

「ん？どうしたの、明久」

フェイトに近づくと、僕は彼女にしか聞こえない距離で話しかけ

る。

「（例のシステムについて、進展があったみたいなんだ）」

「（例のって…それがどうしたの？）」

「（木下さんが僕とあと一人交えて、相談したい事があるみたいなんだ。だからちよっと屋上に一緒に来てほしいんだ）」

「（わかった）」

よし、交渉成立。

さて後はどうやってこの教室から抜ければ……。

なんて思った瞬間、僕は一つの解決策を提示された。
ただそれは。

「諸君、ここはどこだ」

「「「神聖なる、異端審問の場である！！」「」」

最も最低で最悪な解決策だった。

「ちいい　　！！」

舌打ちをすると同時に、僕は駆け出す。

次の瞬間、僕のいた場所に大量のシャーペンやらボールペンやら、コンパスなどの先が尖ったものが一気に床に降り注ぐ。

振り返れば、そこにいるのは見慣れた古の魔術師のような格好をした異端審問会の面々。

「横溝、その吉井（雑）明久（種）の罪状を上げよ」

なんか突然須川君がどこかの金色の鎧をまとった英雄王みたいな口調で語り始めたぞ…しかも僕、雑種扱い？

「はっ、白昼の、しかも教室でテストロッサさんの顔に近づいてせつぷ」

「ええい！まどろっこしい！！要点をすぐに述べよ！」

「昔馴染みなのをいい事に、テストロッサさんにキスをしようとした吉井明久が腹立たしくて仕方ないです」

「うむ、いい言葉だ」

超誤解だ！！

たしかに周りのみんなに聞こえないように顔を近づけて話をしていたけど、他のみんなには僕らがキスをしているように見えていたの！？

これはすぐに弁明しないと！

「ち、違つよ！僕らはただ小声で話し合っただけで…！」

「そのの者、吉井明久の新たな罪状を述べよ」

へ？新たな罪状？

「はっ！吉井明久は白昼、しかも教室で、それも神聖なる…」

「要点だけでいい、とつとと申せ！」

「教室で堂々と逢引の約束をしようとして非常に腹立たしいです」

「うむ、良き言葉だ」

「どこが!？」

なんかどどん風向きが悪くなってきている気がする。

最近ではヴィータが抑止力になってくれてたけど、今彼女は教室を離れてしまっている…マズイ、飢えた獣の群れが僕という餌に群がってきそうな勢いだ。

須川君はゆつくりと前に出て右手を掲げる。

「この神聖たる場で、その不敬は万死に値するぞ、雑種!」

ゆつくりと須川君達はそれぞれの獲物を構え始める。

その瞬間、僕は教室の外に向かって駆け出そうとする…が、すでに入口は塞がれている。

だが甘い!

「とっ!」

「…何い!？」

教室の外…つまり、グラウンドに向かって僕は窓から飛び出す。

一瞬の浮遊感の後、僕は重力に引かれて落下していくが地面に激突する瞬間、激突の衝撃を受け流すように地面に着地する。

魔法も何も関係ない、ただの純粹な受け身だ。

…と言っても、覚えたのはついこの前なだけだね。

よし、これであいつらから逃げる事が…と思ったのが甘かった。教室の窓から次々と消防隊で使われるようなロープが垂れ下がっ

てきて、次々と教室から奴らが降りてくる。

おのれ、あいつらいつの間にかこんな技術を覚えたと言っんだ！

だが甘い！

まだまだ様々な局面に対応するために、付け焼刃だけど身に付けた技術はたくさんあるんだ！

なんとしても逃げ切ってみせる！

「遅い……」

その日、僕が木下さんのところに行けるはずはなく……翌日、

僕が木下さんから折檻を受けたのは言うまでもなかった。

第十二話（後書き）

次回はもっと早めに投稿したいです…。

第十三話（前書き）

最近遅れ気味です…バカファンの方も一緒に投稿したかった（涙）

第十三話

「んぎゃあああああああああ！！」

青空の下、文月学園の屋上で僕はありえない方向に捻じ曲げられようとしている間接の痛みに悲鳴を上げていた。

異端審問会との鬼ごっこ（という名のプリズンブレイク）を乗り越え、なんとか無事に木下さんの元へ駆けつけることが出来たのは良かったけれど……そこで僕を待っていたのは僕への罵詈雑言と秀吉がいつも身に受けているという関節技を受けるといって、必死の思いで逃げ延びてきた人間に対して、あまりにもな出迎えだった。

「うう、いたた……」

「昨日ずっとここで待たされてたのだから、当然の報いよ」

「それはどうかと思うけど……」

木下さんの言葉に苦笑するフェイト。

確かに逃げていたといっても、木下さんに一切連絡しなかった僕も悪いんだけどさ……それでもこっちは死に物狂いだっただから。少しはそこら辺のことも汲んで欲しいよ。

「それで、昨日私達をここに呼んだ理由は？」

フェイトの一言で屋上を包む空気が変わった。

木下さんはゆっくりとフェンスに歩み寄ると、僕らを前へ見据え

る位置に立つ。

「さて、それじゃあ話しましょうか…私が集めた情報、文月学園試験召喚獣システムの最新機能について」

僕らが管理外世界であるここ、地球にいる理由…その一つが文月学園を世界的に注目させている文月学園召喚獣システムだ。

僕らはこの召喚獣システムを調査するために、ミッドチルダから派遣された。

この学校のシステムは科学とオカルト、そして偶然という…よく解らない組み合わせで出来上がっている。

偶然はともかく、科学とオカルト。

この二つは僕らが普段使っているデバイスに酷似している。

僕らが使っている魔法は、一般人が思っているファンタジーものとかそういった幻想的なものではなく、魔力というエネルギーと、科学技術が組み合わさったいわゆる「超科学」みたいなものだ。

僕ら魔導師は、体内にあるリンカーコアで大気中の魔力素を吸収して、自身の魔力にして、その魔力を使って魔法を使っている。

デバイスは魔法を使う時の負担を軽減するための補助機械で、デバイスを使わなくても別に魔法を使うことは出来るんだけど…わざわざ負担がある方を好んで使おうとはもちろん、思わない。

まあ、いざという時は負担なんか無視して使おうとは思っていないけど。

話はそれだけど、僕らは科学技術とオカルトが合わさった超科学を魔法と呼んでいるわけだ。

ここまで言えば大体解るよね？

つまり…この学校にある召喚獣システムもその「魔法」に分類される。

管理外世界が魔法技術を手に入れたかもしれない。

その事実を知った管理局が、局員を派遣しないわけがない…というところで、僕らのような『本来なら学生でいられる年齢の局員』がこの学校に派遣されたというわけ。

（まあ、最近ではエネミーのせいで全然調べられてないんだけどね…）

そのことに少しだけ僕は苦笑する。

この学校に入学して一年以上経つけど、ほとんどといっていいくらい調べられていない。

しかもエネミーが出てくるのは夜中や朝方の時間帯だから、学校ではほとんど寝てばかりだった…：そういうえば、雄二達もよく授業中に眠っていたけど、あれは多分僕と同じで、夜中にエネミー達を倒していたからだっただ。。

だけど今はなのは達が交替制で僕らの仕事を手伝ってくれているから、睡眠不足ではなくなったのが嬉しかった。

さらに最近では召喚システムを調べるのが非戦闘員である木下さんに一任されているから、おかげで僕ら戦闘員はエネミー退治&調査に専念できるようになった。

「それで木下さん、最新機能って何？」

「白銀の腕輪よ」

「白銀の腕輪？」

僕とフェイトが同時に首をかしげる。

どういったものなのか尋ねようとしたら、隣でフェイトが「ああ！」と声を上げる。

「たしか召喚大会の優勝商品だっけ？」

「その通りよ」

「へえ、そうなんだ」

召喚大会…たしか学園祭で行われるイベントの一つだったけ？

「で、その白銀の腕輪がどうしたの？」

「その白銀の腕輪っていうのは二つあってね…一つ目の方は召喚フイールドを教師の承認無しで生徒でも発動できるようにしている機能が付けられているのよ」

「へえ…」

それは便利だ。

教師がいなくても召喚獣を呼べる事が出来るのなら、試召戦争でもかなり役に立つなあ。

「それで二つ目は、召喚獣を二体同時に召喚できる機能を持っているのよ」

「ふうん…って、それもの凄く難しくない？」

「難しい？」

木下さんとフェイトの声が屋上に響く。

「うん、召喚獣の操作は難しいからね…一体でも操作するのが難しいのに、それが二体同時っていうのは、召喚獣の操作が苦手な人間には…ちよっと厳しいんじゃないの？」

「なるほどね、召喚獣操作が得意な観察処分者ならではの言葉ね」

「やめてくれない！？その不名誉な称号を言うの…！」

木下さんの言葉が胸に刺さる。

たしかに僕は観察処分者…バカの代名詞と学園から呼ばれているけど、それは好きでなったんじゃないやい。

「それで優子、その白銀の腕輪がどうしたの？」

「白銀の腕輪、それを私達が手に入れるのよ」

「手に入れる？」

「なんで？と思ったけど、すぐに納得できた。」

「だって白銀の腕輪は召喚獣システムの機能があるのよ、調べる側の私たちにとっては絶好のアイテムのはずよ」

「なるほど」

たしかに管理局の設備を使って白銀の腕輪を調べれば召喚獣システムについて少しは解るかもしれない。

となると…僕らの役割は……。

「召喚大会に出場して、白銀の腕輪を手に入れること、だね」

「その通りよ。吉井君は…まあ、操作のほうでなんとかなるわね」

点数ちゆうの方は？

「フェイトの方は問題なさそうね、期待してるわ」

「うん、任せて…明久のほうも本番までになんとか…」

「ええ、頼むわよ…本当に」

本人を前に失礼な会話はやめてほしい……。
けど一つ気になる事がある。

「ねえ、どうして僕を呼んだの？こういう事って、雄二とかに話したほうがいいんじゃないの？」

なぜバカの代名詞…観察処分者に認定されてしまっている僕をここに呼んだんだろ。こういう話はリーダーシップがある雄二はやてみたいな、みんなをまとめるっていう資質がある人に頼むのがいいと思うのに。

「はやてはちよつと忙しそうだったし、坂本君に至っては問題外。やる気が見えなさそうだったからね…その点あなたは二人と接点があるし、もしかしたら坂本君を説得できるかもしれない…それにあなたの推理力に関して、私は一目置いているつもりよ」

「ははっ、これでも一応フェイトと同じ、執行官だしね」

「ええ、その執行官としての実力を発揮して頂戴。あの時みたいに」

「了解！」

推理力。

なぜか学業には一切反映されないんだけど、僕はその場で起こった事件に対して、戦略を考えている時の雄二くらい頭が回る。

それが今回の件に必要なかどうかは解らないけど、自分が認められているということって結構嬉しいものだね。

「それじゃ、そっちは頼んだわよ。私は代表を誘っているから…なんとんでも腕輪を手に入れないといけないのだから、成功率は高い組み合わせでお願いするわよ」

「了解！それじゃあフェイト、召喚大会では…」

「あつ、ごめん明久…私、なのはと一緒に出ようって前から決めてたんだ」

「え！？いつの間に!?!」

初耳だった。

でもどうしてだろう？ひょっとして、前々から白銀の腕輪に目を付けてたのかな？

「（副賞のチケット…なんとしてでも手に入れないと!）」

目の前でやたら鼻息を荒くしているフェイト。

……なんだろう、彼女の様子を見てみると白銀の腕輪とはまったく無関係みたいな感じがするのは……。

「あの、フェイト？」

「（ウエディング体験……明久と、え、えへへ）」

「もしもし、フェイトさん！」

「（結婚体験……結婚……初体験……結婚初夜）ブシャアアアア！
！！！！！！」

「フェイトおオオオオオオオオ！！？？？」

「ちょ、フェイト！？どうしたっていうのよ！？」

鼻血を噴き出して屋上の床に倒れるフェイト。

突然の事に動揺しまくる僕らだけど、アスファルトの床に鼻血の海を作り出している張本人は、なぜかムツツリーニと同じ恍惚といった表情だったのが気になった。

「それじゃ、頼むよシャマル」

「ええ、任せて……これで何回目になるのかしら……」

フェイトをシャマルがいる保健室に預け、僕は教室に向かっていった。

フェイトは……まあ、多分大丈夫だと思う。そういえばこの前も鼻血を出して倒れてたけど……どうしたんだろう？貧血気味で、鼻の粘

膜が弱いのが重なったからかな？

今夜の食事は鉄分とたんぱく質を含んだメニューにしよう。

「さてと、召喚大会の相棒は…どうしようかな？」

フェイトがなのはと一緒に出るのだから、僕は別に、この学校に潜入している管理局メンバーの誰かと組まなければいけない。

他の人と組んだら、せつかくの白銀の腕輪が片方しか手に入らない、なんていう結果が目に見えているわけだし。

それだったら、同じ仲間である管理局メンバーと一緒に出た方が無難だろう。

でも誰と一緒に出ようかな？

ムツリーニと秀吉は微妙に戦力になりそうにないし、はやては教室の経営、さらに姫路さんを厨房に近づけさせないという絶対防衛ラインを敷いてもらうために誘う事は出来ないし…ヴィータはいささか不安があるなあ。

やっぱり、無難に雄二かな？

P r r r r r !

「ん？誰からだろう…」

ポケットに入れている携帯を取り出して着信画面を見ると…噂をすればなんとやら。相手は雄二だった。

調度いい、と思いつつも僕は電話を取った。あいつ、教室から出て行ってサボタージユを決め込んでいるから、どこにいるかいまいち解らないんだよなあ。

「もしもし」

『明久か、調度いい！教室にある俺の鞆を後で届けに
翔子！！』 げっ！

「ちょっと、どうしたの雄二！？」

『くそっ！見つかつちまった！とにかく鞆を頼むぞ！念話は魔力を
追跡される恐れがあるから使わねえからな！！』

「雄二？雄二！？どうしたのさあ！！」

僕の問いかけに雄二は答えてくれず、代わりに無機質な電子音が
鳴っていた。

……あいつ、一体何をやってるんだろう。

「……吉井」

「うわっ！誰っ！？」

首を傾げていたとき、突然背後から声をかけられた。
びっくりした…考え事をしている時に話しかけられるのって心臓
に悪いよ。

「…霧島さん？」

後ろにいたのは、雄二の幼馴染である魅力的な女の子の霧島翔子
さんだった。

「……吉井、ちょっと聞きたいことがあるんだけど…」

「何？」

「……雄二がどこにいるか、知らない？」

「雄二？ごめん、僕も解らないんだ……念話は？」

「……やってるけど、さつきから無反応。イージスにも連絡入れてるけど、繋がらない」

「まったく、何をやってるのやら……」

「……見つけたら、氷付けにしないと」

「いや、さすがにそれは……」

やりすぎ、という前になんとなく雄二が逃げている原因が解った。あいつめ、また霧島さんから逃げているのか……まったく雄二も素直じゃないなあ。普通、霧島さんみたいな美人に言い寄られるだけで充分幸せなのに……霧島さんには前の貸しもあるわけだし、ここは僕も協力して一緒に探……いや。

ここはあえてこの状況を利用してみるか。

霧島さんには悪いけど、借りはまた今度返すことにしよう。

「そつえば……」

「……心当たり、あるの？」

「うん、たしかさつき体育倉庫辺りで雄二らしき人影を見かけたよ
うな気がする」

「……体育倉庫」

「うん…っていつても、雄二かどうかは解らないけどね」

「……ヒントだけでも、充分助かる。ありがとう、吉井」

「あまり力に慣れなくてごめんね、見かけたら連絡しておくから」

「……ありがとう、それじゃ」

「うん」

僕に礼を言っ去っていく霧島さん。なんとというか、罪悪感がある…なにせ、彼女を騙したわけだから…。

でもこれで雄二の協力を仰げるぞ。

あいつも管理局の仕事ということなら、借りを作った状態なら僕の言う事を聞いてくれるだろうし。

「やっし…」

僕は携帯に登録している雄二の番号にかける。

『…もしもし』

「あつ、雄二？」

『なんだ、明久。今忙しい…』

「霧島さんなら、体育倉庫に向かったよ」

『何？それは本当か!??』

「うん、廊下で偶然出会ってね。それで雄二が体育倉庫に向かってるって言ったんだ」

『そうか…いや、正直助かるが……どういつつもりだ？』

「うん、実は…」

僕は先ほどの木下さんとの会話の内容を話す。

『なるほどな……わかった、仕事っていうことなら協力する』

「助かるよ」

『おう、それじゃあな』

通話が終わり、僕は携帯を懐にしまうと教室に向けて歩き始めた。けどそのすぐ後に、雄二の悲鳴が僕の耳に届いたのは気のせいだったのだろうか……。

第十三話（後書き）

雄二が助かったかどうか、それは神のみぞ知る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6553x/>

バカとデバイスと魔導師 ~バカが奏でる絆の曲~

2012年1月14日13時45分発行